

機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズ～悪魔と英雄の交響曲～

シュトレンベルク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

厄祭戦。それは後に世界中の人口の4分の1以上の人々が亡くなったとされる大戦争。

多くの化け物と人々の間で巻き起こった戦争はこの世に悪魔を生み出した。そして、悪魔のあるところには英雄がいる。

これは悪魔と共に戦った英雄の物語。世界を救うためにその命を散らした一人の男の物語。

忘れるなかれ。この物語の結末は決まっている。決してその未来は覆らず、最後には滅びが待っている。それでも望むのなら――

※何番煎じかは分かりませんが、厄祭戦時代にオリジナル主人公とオリジナルキャラクターにオリジナル機体を登場させる話です。

目次

厄祭の始まった日	1
厄祭戦・1	6
厄祭戦・2	12
厄祭戦3	20
厄祭戦・4	27
厄祭戦・5	34
厄祭戦・6	42
厄祭戦・7	49
厄祭戦・8	56
厄祭戦・9	64
厄祭戦・10	72
厄祭戦・10.5	81
厄祭戦・11	90
厄祭戦・12	100
厄祭戦・13①	111
厄祭戦・13②	119
厄祭戦・13③	128
厄祭が終わった後	139

厄祭の始まった日

とある晴れた日の昼下がり。二人の青年が川辺に座り込んでいた。片方は手元の資料を見ており、もう片方は雲一つない空を見上げていた。

「なあー、シス」

「なんだ、アグ。俺は資料を読むので忙しいんだが」

「最近さ、面白い話を聞いたんだ」

「無視かよ……」

手元の資料を呼んでいる青年——シスは視線を寝転んでいる青年——アグの方には一切向けていないが、資料片手でも相手をしていた。アグは相手の事を一切気にせず語り始めた。アグ自身も別に聞いて欲しい訳ではなく、ただ少し思った事があるので話しかけただけだからだ。それが分かっているシスも手元の資料を眺めている。

「最近入ってきた新米が言ってたんだよ。この世には生まれ変わりがあって、俺たちは死んでも別の存在に生まれ変わるんだと」

「ふくん……で？」

「シスはどう思う？生まれ変わりなんてもんがあると思うか？」

「この世に存在する大凡の事は科学的に解明されている。解明されていないんだから、ないんじゃないかねえの？あったとしてもどうでも良いけどな」

「夢がねえなあ……」

「当たり前だろうが。死んだ後の事なんて誰にも分からないんだから、信じられる訳がないだろうが。もし、死の淵から蘇る前にそういう事があった、って言うなら話は別だ。だがな、それでもないなら信じられる訳がないだろう。大体、今を生きるだけでも必死なのに、死んだ後のことなんて考えてどうする。死んでからの事なんて死んだ後に考えればいいんだよ」

「そりゃああそうかもしれないけど……なんか思うことはないのかよ？」

「あのなあ、アグ。お前はなんだ？軍人だろうが。戦うことが仕事であるお前が、死後の事なんて考えてどうする？俺だって科学者の端くれなんだ。俺たちの仕事は今やるべき物なんだ。そんな事を語っていても時間の無駄なんだよ。死後の事なんてのはな、宗教家どもに語らせておけば良いんだよ」

「ロマンがないな。お前らしいとは思うけどな」

つまらなさそうにそう語るアグに対し、シスは資料から目を離して空を見上げた。雲一つなく穏やかとも言える気候がどこまでも果てがないかのように広がっていた。周りを見渡せばその陽気に誘われたのか、昼寝をしたりいちやついたりしているカップルの姿を見る事ができた。

「科学者がロマンを求めてどうする？俺たちはリアリストであらなくちやならないんだ。ロマンチストになったって、目の前にある問題は解決しないからだ」

シスはロマンチストを気取るつもりは一切ない。目の前にある問題に挑戦し、人間の文化の発展に貢献する事こそが科学者の役割だからだ。そこには希望的観測ではなく、現実的な視点が必要となってくる。そんな自分がロマンだのなんだのを求める資格はない。

「そもそも、だ。もし生まれ変わりがあって、それがなんだと言うんだ？死ぬ事が怖くなくなるのか？死んでも次があるから、どうでも良くなると思えばめるとでも言うのか？」

「…………いや、そんな事はないな」

「だろう。意味が無いのなら、そんな事を思考する時間の方が無駄だ。寝るなり学ぶなり好きにすればいいが、俺の邪魔はするなよ」

「んく…………まあ、それもそうかもな。じゃあさ、今回の戦争についてはどう思う？」

「火星の移住民との戦争のことか？」

昔から語られてきた火星への移住。火星をテラフォーミングする事で可能になったソレは、火星圏に移り住んだ人々と地球圏で生きる人々の間に軋轢を生んだ。地球圏側の火星で暮らしている人々に対して行われている搾取は火星圏で暮らしている人々の地球圏に対す

る反発を強くした。

地球で暮らしている人々も、火星圏の人々から搾取する事で良い生活を送っている。だからこそ、搾取を止める事ができない。距離が生んでしまったすれ違いは今や大規模な抗争へと変化し、それぞれの国家が軍を動かさなければならなくなるほどの物になっていた。

互いが人型のモビルワーカーを遠隔操作で動かし、大規模な戦闘になる事も今となっては多くなってきている。アグも偶然非番であったためにこうしてのんびりしているが、出動要請が入れば即座に基地の方に戻らなくてはならない。こうして外でのんびりしているのもいざという時に動きやすいように、というシスの配慮であった。

しかし、現在はモビルアーマーと呼ばれるAI搭載型の機体が主流となりつつあり、遠隔操作型であるモビルワーカーに乗る者は少なくなっている。パイロットたちも有事に備えて訓練を行ったりはするが、本当にモビルワーカーを操縦した者は数少ない。

「それ以外に何があるんだよ？」

「……きな臭い、という一言に尽きるな。今回の抗争に関しては簡単に予想できたことだ。あれだけ暴利を貪れば至極当然のことだ。そういう人間の集まりだからな」

「火星で一旗揚げようと思っていた連中だもんな……なあ、シス。なんだか嫌な予感がするんだ。この戦争が何かおかしいって思うお前の意見には賛成だ。この戦争は何かおかしい。何かおかしいのかまでは分からないんだけどな」

「だからどうしようと言うんだ？まさか、相手の錦の御旗——白き革命の乙女のような存在になるう、とか言うつもりか？」

「まさか。ただ……この戦争は何か致命的な物を生み出すような気がするんだ。それが何かは分からない。だけど、

俺たちは戦わなくてはならない事だけは確かだと思うんだ。だから、お前に頼みたいんだ——シリウス」

アグ——アグニカ・カイエルは真剣な表情でシス——シリウス・ダルクを見つめていた。お互いに子供の頃から知っているが故に、シリウスにはアグニカがどれぐらい本気であるのかが理解でき

た。孤児であった頃から、アグニカは変わっていないのだから。

「頼むのは結構だがな……俺にどうしろというつもりだ？俺は確かにパラエーナ教授のもとで色々と学んできた。他の奴よりもそれなりに博識であるという自負もある。だが、それでも俺にできる事などそう多くはない。そんな俺に、何を頼もうって言うんだ？」

「お前は俺よりも新開発されているモビルワーカーに詳しいだろ？俺の全力を発揮できるような、そんな凄い奴を作って欲しいんだ」

アグニカは軍の中でもエースパイロットと呼ばれているが、鋭敏すぎる操縦センスに機体がついて来れない程の腕を持っている。だからこそ、アグニカは求めている。自分の持っている力を最大限に発揮することのできる機体を。それを作れとシリウスに言っているのだ。

「新開発されているモビルワーカー？……ひよつとして、モビルスーツの話か？あんなの、まだ構想段階の代物でしかないぞ。そんなのを使いたいのか？」

「ああ。お前も知ってるだろ？モビルワーカーじゃ、俺の全力について来れないんだ。俺には力がある。なんでか分からないけど、そう思うんだ。だから……」

「ああ、分かった分かった。まったく……お前の全力について来れる機体ね。とんでもない注文を付けてくれたもんだ。どうなつても後悔するなよ？」

「もちろんだ。お前が俺の期待に答えてくれるなら、俺は何だってしてやる。だから、一緒に行こう。俺たちのあるべき場所へ」

「はっ、ふざけた事を言っつてんじゃねえよ。俺たちのあるべき場所だつて？そんなもんがあるつて言うなら、連れて行ってみせてくれ。その為だったら、お前の期待ぐらい応えてやるさ」

『カイエル中佐！至急基地に帰還してください！緊急事態です！』

アグニカの胸元の印章から通信が届いた。出動の要請か何かかと思っていたが、様子がおかしかった。分かりやすく言うと、起こるはずのない事が起こってしまったかのような……そんな焦り方だった。アグニカも眉を顰めながら確認を取った。

「一体何があった？火星圏側が本格的な侵攻でも始めたのか？」

『戦闘中であつた我が方と火星側のモビルアーマーが……前線基地に攻撃を開始しました!』

「なに……? そんな馬鹿な。一昔前の映画じゃあるまいし、そうならないようにプロトコルを組んでいた筈だろう!？」

『こちらも詳細は不明です! 他のモビルアーマーにも同様の反応が見られており、このままでは双方共に甚大な被害が齎されます! こちらの自爆指示も拒絶されてしまつて……現在、軍上層部はモビルワーカー隊を使ったモビルアーマーの破壊作戦を準備中です! カイエル中佐も有事に備えて戻つて下さい!』

「分かつた。俺もすぐに基地へ帰還する。モビルワーカーの整備を進めておいてくれ!」

『了解しました!』

これが厄祭戦と呼ばれた人を殺すバケモノであるモビルアーマーと人間同士が相争う地獄の戦争が始まつた、つい数分前まで存在した平和が木っ端微塵に碎け散つた一日の始まりだつた。

厄祭戦・1

モビルアーマーの暴走から早5年。戦況は瞬く間に悪化の一途をたどった。高度に発達したAIを搭載したモビルアーマーたちはプルーマと呼ばれる子機を操り、人を虐殺していった。その進行は留まることを知らず、地球圏と火星圏の間にあったコロニーは次々と被害にあつた。

遠隔操作されている無人機であるモビルワーカーにはモビルアーマーたちが一切見向きしないからだ。その結果、物量に押し切られて人が次々と死んでいった。モビルアーマーの開発者たちもその多くが前線にいたため、ほとんどが殺されてしまった。

モビルスーツの製造も急がれているが、そのために必要な物は多くあつた。モビルアーマーたちに負けない戦力と匹敵するだけの固有戦力だ。最早、国家だけではどうにもならない状態になってしまつていくが、国家間の足の引つ張りあいには止まらなかつた。地球側が完全にまとまりを失くしている中、火星側は強力なカリスマ的存在がいるせいなのか、一つの勢力として固まつていた。

地球側と同じ様にモビルスーツを開発している火星側において、画期的なシステムが提唱された。人体にナノマシンを埋め込む事で空間認識能力を増大させる、という謳い文句のシステム——阿頼耶識システムを身体に埋め込む事でモビルアーマーに対抗する戦力として活動していた。

「シス、お前は阿頼耶識についてどう思う?」

「また急な質問だな。どういう意図で質問をしているんだ?」

シリウスはモビルスーツや艦隊に使用されているエイハブ・リアクターを調整する技師として、軍事基地を訪れていた。まだアグニカの要望に応えられる機体は完成していないが、煮詰まつてしまつていたので一先ずコンペで合格されたモビルスーツの確認に来ていた。

シリウスが恩師として仰いでいたのがエイハブ・バーラエナ教授——

エイハブ・リアクターという相転移変換炉……分かりやすく言えば、稼働している間は半永久的にエネルギーを生み出し続ける機関

の開発者だ。開発者に色々教わっていたため、エイハブ・リアクターに関する事柄に関してはとても詳しくかった。その関係もあり、偶に基地や工場などを訪れていた。

「そのまんまの意味だよ。軍事的に使えらと思うか？」

「……まあ、使えない事はないんじゃないか？ 空間認識能力の拡大つて言うのは、モビルスーツ戦で重要なファクターになると思うよ。モビルワーカーと違って、モビルスーツは直接乗り込むからな。阿頼耶識搭載型は要するに、モビルスーツにパイロットを疑似的に投影するつて事だからな」

どんな技術でも良いところばかりではない。阿頼耶識にも勿論デメリットはある。MSクラスの機体から送られてくる処理情報が脳に与える負担は大きく、後々障害が生まれてしまう可能性がある。現在研究中ではあるが、今の段階では基本的に子供以外適合していないので、大人の阿頼耶識保持者がいない。中には無理に阿頼耶識を打ち込んだ結果、半身不随になってしまった被験者もいる。

「だが、まだ実用段階の技術じゃないぞ。火星圏だつて孤児の子供たちを被検体に使っている訳だからな。大人でも使えるようになるまで、俺たち^{大人}……お前は使えないぞ。そんなに興味があるのか？」

「ない訳ないだろ。このご時世、力はあつて困るようなもんじゃないだろ？ 手っ取り早く強くなれるなら、それに越したことはないだろ」
「はあ……お前らしいことだよ。お前の注文が多いせいでエンジニア側はてんでこ舞いだつてのに、呑気なもんだ。そういえば、お前が前に出してきた要望書の件だけ……本当にアレで良いのか？」

シリウスがアグニカの望むモビルスーツを作る際、どんなモビルスーツが良いのかを要望書で提出するように言っていた。その内容を先日確認したのだが、効率的ではあるが狂的な事が書かれていた。思わず、顔を合わせると確認したくなるほどに。

「ああ。速度特化で装備はブレードだけで良いぞ」

「お前、モビルアーマーの性能は知ってるだろ？ 攻撃を喰らったらひとたまりもないぞ」

「分かってるつて。でも、あいつらの主兵装はビーム兵器だろ？ ナノ

ラミネートアーマーがあれば、その辺は大丈夫だろう？」

「大丈夫って、効果がない訳じゃないんだぞ？それにビーム兵器を躲しても、その後は近接戦闘だ。攻撃を受けたりすれば、さしものナノラミネートアーマーでもやられかねないぞ」

「距離さえ詰められれば問題ないって。その後はあいつらの攻撃を躲しつつ、こっちの攻撃を当てれば良いんだからな」

シリウスもアグニカとは長い付き合いである。元々、二人ともスラムの出でありアグニカはスラムの一大勢力として名を挙げ、シリウスはその側近として行動していた。スラムを潰される際、運よく二人とも拾われた。そこでアグニカは軍隊に進み、シリウスは大学に進む事になった。その間も二人の関係は途絶える事なく続いていた。だからこそ、お互いにお互いの気性をよく理解していた。

それ故に、アグニカがふざけている訳ではなく真面目に言っている事をシリウスはよく分かっていった。普通のエンジニアに似たような事を言った場合、まず間違いなく取り入れられない事も分かっている。昔、パイロットになりたての頃に似たような事を言った時にふざけているのかと怒鳴られたという話を聞いていた。ちなみにその時は本気ですと言い、マジかこいつ……というリアクションを取られていた。

「まあ、それは別に良いけどさ……お前、シミュレーターの限界以上の性能を引き出すとか止めてくれよ。あんな成績だと現状のモバイルスーツでお前が満足できる機体なんてないぞ。なんだよ、シミュレーターで操作する機体がパイロットの操縦に耐えられないって」

「そんな俺のモバイルスーツを作るのがお前なんだろうが……何言ってるんだ？」

「くあく！腹立つ事を堂々と言うな！現行のモバイルスーツの限界値を易々と突破する奴が、この世の中にそうそういて堪るか！」

「いるじゃん、ここに」

「あああああああつ！なんだよ、お前！エイハブ・リアクターが一個じゃ足りないってか!?二個搭載した機体でも容易すれば納得すんのか!?あああつ!」

「あ、そうだ。何で今のモバイルスーツってリアクターを一個しか載せてないんだ？どう考えたって二個載せた方が強いだろ」

「……ああ、そうだったな。お前、馬鹿だったな。いや、でも予想外だったぞ。お前がそんな常識的な事も知らない馬鹿だったとは」

「ああ?!馬鹿馬鹿うるせえぞ、この野郎!」

「あのなあ!エイハブ・リアクターってのは一基あれば十分なんだよ!二基のエイハブ・リアクターの並列起動ってのは、現在の科学力ではまだ達成してないから無いんだよ!分かったか、この馬鹿が!」

「じゃあ、お前がやれば良いじゃん。それぐらい出来んだろ?」

「はあ?お前、人の話を聞いてたのか?エイハブ・リアクターの二基同時の並列起動って言うのは、現在の科学力じゃまだ……」

「だから、お前がそれをやってのければ良いだろ?大体、モバイルマーの脅威はすぐそこまで迫ってるんだ。出来るとか出来ないとかじゃなくて、やらなくちゃいけないんだよ。お前だって分かってるだろ?」

「それは……そうだけどな」

アグニカの意見は正しい。モバイルアーマーという最大の脅威に対して、出来る出来ないは関係ない。やらなくてはならないのだ。それがどれだけ無茶で無謀であったとしても、やらなくてはならない事に変わりはない。どれだけ不平不満を言ったところで、モバイルアーマーが消える訳ではないのだから。

シリウスもそれは分かっている。今、アグニカに対してどれだけ不満を言っても、結局は自分がやらなくてはいけない事には変わりはない。だが、それをさも当然の事のように言っているアグニカがムカつくだけだ。最後にはきつちりやり遂げるが、その努力を当然のように言われる事には納得できない。感謝はしなくても良いが、せめてもうちよつと殊勝な態度を取れと思うてしまう。

「くそっ……一度製造されたリアクターってのは、並列起動するのに向いてない。それはそもそも単体で使用する事を前提に作られてい

るからだ。かと言って、二基同時に稼働させるためのリアクター研究なんて許可が下りる訳がないし……教授に相談してみるか？」

バーラエナ教授の下で色々教わったシリウスだが、エイハブ・リアクターの発する磁気嵐——通称、エイハブ・ウエーブの発する固有周波数の調整をした事はない。教わりはしたものの、調整済みのエイハブ・リアクターにしか触った事がないからだ。いや、そもそも普通の技師であれば調整済みであっても、エイハブ・リアクターに触る機会などないのだが。

「お久しぶりです、バーラエナ教授」

「おお、久しぶりだねダルク君。君がアポなしで私の元を尋ねてくるとは珍しいね。どうかしたのかい？」

「はい。実は教授にご相談したい事が……」

シリウスは有休をとり、大学を訪れていた。普段は事前にアポを取った上で教授の許を尋ねていたのだが、今回はそんな普段であれば当たり前な事も思いつかない程に焦っていた。シリウスの能力ではどうしても、エイハブ・リアクターの並列起動式が分からなかったからだ。しかし、エイハブ・リアクターの生みの親であるバーラエナ教授であれば、と一縷の望みをかけていた。

「ふむ……エイハブ・リアクターの並列起動か。不可能ではないよ」

「本当ですか!？」

「本当だとも。ただね……君も知っている通り、エイハブ・リアクターは普通一基もあれば十分だ。エイハブ・リアクターの並列起動が難しいのは、何も技術的な観点だけではない。出力が大きすぎる必要因なんだよ」

「出力が大きすぎる……」

「そうだ。扱えない機体を二機用意するぐらいなら、扱える機体を二機用意した方が効率的だ。そうだろうか？」

「それは……確かにそうですね。教授、実は今こいつのための機体を作ろうとしているところなんです、何かご意見をいただけますでしょうか？」

シリウスが取り出した資料を受け取ったバーラエナはその数字に

目を開いた。その資料に書かれているのは、アグニカがシミュレーションで叩き出した数字だ。従来のモビルスーツパイロットの約二倍以上の数字が書かれていた。俺も実際に叩き出した姿を見ていなければ、数字のテコ入れをしたのではないかと疑いたくなるような数字だ。意味が分からないレベル、という表現でも構わない。

「信じがたい数字が並んでいるけれど……これは本当に？」

「……ええ、本当なんです。これが」

「ふむ……確かにこれならば二基のエイハブ・リアクターを使った機体でも操りきれられるかもしれないね。でも、これだけの能力を持つ人間にしか使えないようでは、軍からの許可は得られないだろう」

「やっぱりそうですよね……教授、これが火星圏で使われている阿頼耶識システムを使うとどうなるでしょうか？」

「阿頼耶識を？ふむ……私にも分からない。しかし、この機体と優れた阿頼耶識持ちのパイロットであれば、その性能を發揮できるかもしれない」

「ありがとうございます。後は軍の人間とコンタクトを取らないといけないし、出来れば火星圏の阿頼耶識持ちのパイロットを呼びたい。他にもこのシステムに耐えられるフレームの構築……やる事がいっぱいだな」

「軍の関係者へのコンタクトは私がやっておこう。先方もこのシステムが実用可能となれば、喜んで出資してくれるだろうからね」

「ありがとうございます、教授！」

「いや、教え子が頑張っているんだ。私にも協力させてくれたまえ」
「……本当に色々ありがとうございます。私には本日はこれで失礼させていただきます。先生、もしこの戦争が終わってお互いに無事で生きていられたら一緒にお酒でも飲み交わしましょう」

「ふっ、そうだね。それも良いだろう」

エイハブ・バーラエナは後もシリウスに力を貸し続けたが、厄祭戦が終わる前に死去。この約束が果たされる事は二度とないのだった。

厄祭戦・2

シリウスはバーラエナ教授がセッティングしてくれた軍部の関係者と接触した。先方はシリウスが出した数値に希望を見出し、火星圏側との連絡を取り持つてくれた。火星圏側も阿頼耶識研究が煮詰まっていたらしく、シリウスの提案に快く応じてくれた。

理論上の存在でしかなかった、リアクターを2基搭載したモバイルスーツの開発。そして大人の阿頼耶識保持者を生み出す事ができれば、間違いなくモバイルアーマー戦において切り札的な存在になりうる。そんな切り札を生み出すことに寄与できれば、お互いにメリットがあったからだ。

さし当たって、リアクターを2基搭載したモバイルスーツのシミュレーターを作り上げ、地球圏と火星圏両方の軍部でテストして貰う。その間に火星圏側と阿頼耶識を大人に適合させるために必要な条件とシステムの割り出しを行った。研究を始めてから約1ヶ月ほどで、大人に阿頼耶識を適合させるためのヒントを見つけ出した。この時のシリウスの尽力がなければ、阿頼耶識研究はもう数年の遅れを取っていたと言われている。

シミュレーターで優秀な成績を残したパイロットの内、理論上阿頼耶識を持つことの出来る者に被検体になって貰えないか声をかけた。勿論、ほとんどの者に拒否されてしまったが、アグニカを含めて八人のパイロットが快く了承してくれた。この七人が後にアグニカを支え、ギャラルホルンのトップに立つセブンススターズの祖先であった。

実験は無事に成功。八人全員が特に障害を持つこともなく、阿頼耶識の移植に成功した。ただ、アグニカだけは最終的に阿頼耶識のデバイスを三つも持っていた。まだ余裕だから、などというふざけた回答をしたアグニカに対して、シリウスは真つ向からのインフライトを敢行。少しの間、その場は騒然とした。

阿頼耶識保持者はシリウスの実験部隊預かりとなり、日夜研究に励む事になった。研究は多岐にわたるため、普段は隊員同士のシミュレーターによる模擬戦が日常だった。その中でもアグニカは異彩を

放っていたが、あり得ないという視線を向けられたのはどちらかと言えばシリウスの方だった。

「あの……主任？」

「……どうかしましたか？クジヤン少尉」

「えっと、前から伺いたかったのですが……何故主任まで阿頼耶識システムを持つているんですか？パイロットではないのですから、持つていても仕方がないのでは？」

「何を言っているんですか？今の状態が続いていけば、俺のような一般人でもモビルスーツに乗る機会は出てくるでしょう。あつて困るような物ではありませんから」

「それはそうかもしれませんが……「それに」」

「きちんと安全を確認せずに他人にこんな物を施す訳にはいかないでしょう？」

「は？」

「阿頼耶識は運が悪ければ半身不随になるような代物です。あなた方のような軍人が半身不随になれば問題ですが、俺のような科学者は机にかじりついて理論を組み立てればいい。機体に関しては技師に任せればいい」

「……………」

色黒の肌を持つ青年——ニース・クジヤンからすれば、その理論は狂気の理論であるとは思えなかった。確かにシリウスの言う通り、パイロットであるニースたちが半身不随となればそれは戦力の低下を招く。パイロット一人とっても重要な局面である現在、それは問題以外の何物でもない。

しかし、だからと言って自分で実験をする人間がいるだろうか？いや、いる筈がない。誰だつて自分の命が大事なのだから、自ら障害者になる可能性のある実験を受ける者がいる訳がない。だと言うのに、シリウスはそれをする事ができる。その事がニースには恐ろしかった。

シリウスが首を傾げながら取ったデータの確認をしに向かつて、ニースは立ち尽くしていた。そんなニースの肩が叩かれ、振り向いた

先にはアグニカがニヤニヤと笑っていた。

「お前も酔狂な事をするな、クジヤン。あいつに常識なんて求めても無駄だつてのにな」

「カイエル中佐……」

「シスは……いや、シスもこの世界で生きていくためには力が必要だつてことを知ってる。俺だつてそうさ。偶々方向性が違うだけで、俺たちのやっている事は同じなんだよ。孤児だった頃から、俺たちは力を求めているんだ」

アグニカは暴力という力を。シリウスは知力という力を。お互い
が何かしらの力を欲している。互いの欠点を埋め合わせようとして
いるかのようになり、彼らは力を求めはしたがそのスタンスは逆だった。
「俺だけじゃなくて、あいつも本心では分かっていたんだと思うぜ。
何かしらの大きな争いが起こるんじゃないか、つて事はな。だからこ
そ、こういう事態に備えてたんだ。だつて、そうだろう？ 少しでもな
きや、エイハブ・リアクターの研究なんてする訳がない。」

だつて、俺たちは元々親なき力なき孤児たちだ。オルフェンズエイハブ・リアク
ターなんてのはな、俺たちからすれば本当に縁遠い物なんだよ」

「ですが、分かっていたというのは少々言い過ぎなのではありません
か？ エイハブ・リアクターは十分なエネルギーを生み出す物です。そ
れについて詳しいという事は、後々に役立つのではありませんか」

「まあ、そういう進路もあったらうがな。だけど、エネルギー源として
のエイハブ・リアクターとモビルスーツや艦隊を動かすエイハブ・リ
アクターっていうのは、構造なんかが違うらしい。俺にはよく分から
んが、こつちの道に進んでるんだから、そういう事だろうな」

結局、戦いという物から離れられない。アグニカもシリウスも孤児
時代の経験に基づいた行動をしている。本人にそのつもりがなくて
も、片方から見ればそういう風に見える。そうなっている事に
気付けたとしても、アグニカであれば肯定するしシリウスも否定はし
ないだろう。

「それに、あいつの事を何やら舐めているようだけどな。あいつはパ
イロットとしての腕も相当なもんなんだぜ？ なにせ、あのシミュレー

ターの最難関訓練プログラムを組んだのはあいつだからな」

「えっ……あのカイエル中佐以外にはまだクリアできてないあのプログラムですか!？」

「そうそう。しかも、あいつは事前に自分でやって正確にできているのか確認するタイプだからな。既にクリア済み、って訳だ」

「……なんであの人は本職の軍人ではないんですか？」

「さあな。でも、あいつ個人は争いなんて好きじゃないんだよ。でも、経験で分かっちゃまってるんだよ。知ってるか？スラムなんかじゃ力がなきゃ生きていけないんだ。徒党を組んで、力のある者なんか組んだり力のない奴が力のある奴に近付いたり……ともかく、力って奴に皆敏感だったんだ。そりゃあ、死活問題なんだから当然なんだけだよ」

「……………」

「俺とあいつはずっと徒党を組んできた。俺がトップであいつが参謀。そんな関係でずっとやって来たんだ。だから、分かっちゃまうんだよ。お互いの気性って奴がな」

シリウスにとって、戦闘というのは一つの手段でしかない。回避できるなら回避した方が良く思っている。しかし、回避するにしても力はあった方が良く、力があるという事は、それだけ相手に対してプレッシャーをかけられるという事だからだ。いざという時でも、それを躊躇なく振り回せるようにしておく必要はあった。

アグニカにとっても、戦闘というのは一つの手段だ。けれど、それは生きるために必要な手段だ。こちらから圧倒的な力を見せれば、相手もこちらに対して噛みつきこうとはして来なくなる。スラムの中のシマを自由自在に操る事が出来るようになる。それはスラムで暮らす上で、非常に重要な物だ。

つまり、シリウスが消極的防衛として力を求めるのなら、アグニカは積極的防衛として力を求めた。使い方と方向性が違うだけで、二人とも力を求める事に対して否定的ではない。だからこそ、彼らは力を求める。絶対的にして圧倒的な力を。この世界で生きていくために必要な物であるが故に。

「阿頼耶識もモビルスーツも力だ。暴力よりとはいえ、その二つが力であることは純然たる事実だ。だからこそ、俺たちはそれを求めずにはいられないんだ」

「……カイエル中佐。いかなる経緯があろうとも、彼は私たちが守るべき一般人です。私たちはその事から目を逸らしてはいけません。違いますか?」

「まあ、それはそうだな。だが、分かっただろう? あいつはそんな弱者としての立場に甘んじる事は——」

「それでも。もし、主任が戦場に立つというのなら、私たちが支えれば良い。そうではないでしょうか?」

「……………」

ニースの言っている事は理想だ。現実として、シリウスはアグニカに匹敵するレベルのパイロットとしての実力を持っている。それを支える、というのは並大抵の事ではない。普通は支えるどころか足を引っ張るのが関の山だ。それでも、ニースは決してその真摯な瞳を崩すことはしなかった。

「クツクツクツ……………アツハツハツハツハツ! お前、あいつを支えるとか正気かよ!?! どれだけ高く見積もっても、お前があいつに敵う可能性なんてゼロに近いぞ?」

「もちろん、そんな事は分かっています。それでも、私がここで諦めてしまえば、私は彼に申し訳がたちません。私は力なき人々を守るために軍人となったのですから」

「あく、なるほど。だったら、好きにすれば良いんじゃないか? やろうとしている奴に一々口を挟めるほど、俺も偉い訳じゃないからな。好きにすれば良い。ただ、その道は楽じゃないとだけ言っておくさ」

アグニカは分かっている。シリウスを支えるという事がどれだけの難題であるかを。孤児時代から一緒に行動してきたアグニカだからこそ、シリウスの無茶振り具合はよく知っている。なまじ何でもできるからこそ、シリウスの期待度は高い。アグニカにシリウスが従っていたのだから、アグニカがシリウスに勝ったからに他ならない。

元々、シリウスはアグニカとは敵対するチームの人間だった。互い

に生きるためにぶつかり合い、最終的にシリウスはアグニカに負けた。しかし、アグニカはシリウスの事を気に入り、自分のチームに誘った。シリウスは疑問に思ったが、負けた以上は従うという信条に従った。

シリウスは確かに優秀だった。アグニカをスラム内での頂点に導き、その後もチームの中ではトップに近い地位を保ってきた。しかし、その優秀さを当然の物として受け止めていた。だからこそ、周りにもそれだけの成果を要求していた。残念ながら、アグニカの周りでは頭の出来よりも腕つぶしの方が重要だったため、それほどの成果を上げることは出来なかった。

シリウスはそれを責める事はなかったが、シリウスのチームに入っていた者たちは平然と嘲った。そこで内部抗争が起きかけた。アグニカとシリウスに締めあげられ、崩壊には至らなかった。しかし、それ以来シリウスはまず自分で安全を確認する癖がつくようになった。他人に仕事を最初から任せるといふ事をしなくなったのだ。他人に任せられるだけの能力があるかどうかは関係なく、他人に頼らなくなった。

「あの癖、どうにかなれば良いんだけどな……難しいだろうな。あいつ、頑固だし」

「どうかしたのか？カイエル中佐」

「ん〜？いや、何でもない。そっちこそ、俺に何か用事だったのか？フェアルド中尉」

「いえ、何やら考え込んでいるご様子でしたので。何か力にでもなれば、と」

「ハハハッ、要らねえよ。クジヤンと喋ってたのは俺の話じゃねえかな。というか、お前はまだ訓練メニューが終わってないだろ。そっちの方を先に終わらせろよ」

「今日のノルマは終わらせましたよ。それより、一体何の話？」

「シス……主任は阿頼耶職を持つてるだろ？それで少し話をしていただけさ。まあ、大した話でもない。それより腹減ったんだけど、飯食いに行かないか？」

「……そうですね。私も丁度訓練が終わりたてで空腹ですし、食堂にでも行きましようか。皆さんもどうですか？」

茶髪の青年——イグニウス・ファリドは周りで作業している人々に声をかけた。仕事をひと段落させた人は共に行く事にしたが、モビルスーツのフレームを作っている技師などは残った。食事を適当に済ませたシリウスは攻防の端にある電子端末の前に座り、フレームの完成度を確認しながら他の機体の設計図を作っていた。

「ふう……これで取りあえず十機分は完成か。まだ一機も出来てないけど、これができればきつと開発は進むな」

そう呟きながら、シリウスは段々完成へと近づきつつあるモビルスーツを見上げた。後は装甲と武装を用意すれば、いつでも動ける状態になる。そこでシリウスは思い出した事があった。作成したモビルスーツのフレーム名と機体名を決めていないのだ。

「忘れてた……うくん、なんか良い名前はない物か」

その時、何かの声がシリウスの頭の中に響いて来た。シリウスは周りを見渡したが、モビルスーツのいる所で作業している技師以外には誰もいなかった。技師にしても、シリウスの方を向いている者は誰もいなかった。シリウスは眉を顰めながら首を傾げた。そうして首を傾げていると、再び声が響いてきた。

「……なんて言ってるんだ？」

何かを言っているのは分かる。だが、どこから言っているのかも分からなければ、何を言っているのかも分からない。仕方がないので、瞼を閉じて何を言っているのかだけでも聞き取ろうとした。すると、段々とはあるが何を言っているのが分かってきた。

「ガ……ン……ダ……ム……？ガンダム？ガンダムって言っているのか？」

そう呟きながらモビルスーツの方を向くと、カメラアイの部分が光っていた。どう見ても起動しているようにしか見えない。だが、パイロットであるアグニカはいないし、作業中の技師の誰もが気付いていない。あまりにも非科学的な現象にシリウスは頭を抱えた。自分が幻聴でも見ているのではないか、とすら疑い始めた。実際、この仕

事を始めてから他人よりも睡眠時間は少ないので間違いではないと思えた。

けれど——目の前にいる機体……本人（本機体？）曰くガンダムはシリウスの事をまっすぐに見つめていた。その瞳からは邪気のような物は一切感じられなかった。寧ろ、生まれたての赤ん坊の様に純粹でまっすぐな瞳をしているようにすら感じられた。結局、機械である事には変わりはないのだが。

「ガンダム……ガンダム・フレームか。うん、中々に良い名前なんじゃないか？　そういえば、モビルアーマーって天使をモチーフに作られているんだっつけ」

シリウスは電子端末で軍の回線にアクセスし、データバンクに収められているモビルアーマーのデータを確認した。軍のデータバンクには敵方であるモビルアーマーのデータも収められており、シリウスはそれを閲覧することのできる権限を持っていた。

「うん、やっぱりだ。そうになると、天使の敵になるんだから、こいつには悪魔の名前を付けた方が良いかな……サタンとか？　いや、でもなあ。最強になったらサタンでも良いかもしれないけど……ルシファーも却下だな。モビルアーマーにいるし。さて、それじゃあ……」

シリウスはぶつぶつと呟きながら悪魔の名前を調べ始めた。技師も主任は一体何をしているんだろうか……と思いつつながら作業を進めていく。最低限するべき事をしてから、口を挟もうと考えていたからだ。しばらくすると、うんうんと頷き始めた。

「よし、決まった。お前の名前はバエル——ガンダム・バエルだ」
それが悪魔の王であり、この世に最初に生まれたガンダム・フレームでありギヤラルホルンの象徴として扱われた伝説のモビルスーツ、バエルが誕生した瞬間だった。

厄祭戦3

最初のガンダム・フレーム——ガンダム・バエルが完成した。そのテストパイロットは当然の如く、アグニカが務める事になった。アグニカはバエルとの出会いを後に運命と語った。

バエルの性能テストは突如出現したモビルアーマーとの戦闘に変化した。練習すら挟めない完全なぶっつけ本番となった性能テストだったが、アグニカはこれを都合だと思っていた。

「結局はモビルアーマーどもを殺すんだ。その予定が早まっただけだろう?」

「そういう問題じゃないだろ……いいか、アグニカ中佐。このバエルにはとあるシステムが搭載されている。モビルアーマーに反応して出力制限を解放するシステムだ」

「なんだよ、じゃあ普段は出力制限してるって事か?なんでそんな無駄な事を」

「人間を生態ユニットとして扱っている以上、当然の処置だ。常時出力制限がない状態だったら、阿頼耶識で繋がっている人間は数回乗っただけで廃人になるわ」

「しよがねえなあ……それで?」

「阿頼耶識側のリミッターは解除しておく。動かす時には邪魔になるだけだからな。だが、その分戦闘終了後にどうなるかは分からん。それだけ覚悟しておけ」

「この機体に乗れば何とかなるんだろ?だったら、問題ないさ。逆にモビルアーマーに見せつけてやるさ。人間の力って奴をな」

「勝手にしろ。生き残れるように努力するんだな」

「誰に物を言っつけてやがる。俺があんな鳥もどきにやられてたまるかよ」

その戦闘でバエルは本領を發揮した。神と敵対する悪魔の王はその名に違ふ事なく、天使殺しを成し遂げた。当時、百体以上のモビルスーツが二割近くを犠牲にする事で漸く一機倒せる、というレベルのモビルアーマーを単騎で。それだけの偉業を成したが故か、バエルは

ボロボロの状態だったが。その惨状を見た整備班の人間は悲鳴を上げた。

「はあ……出来立てだったのに、たった一戦でこの有り様か。あいつがマトモな操縦をするとは思ってなかったけど、これはこの先頭が痛くなるな」

軍人にとってその戦果は嬉しくとも、整備士にとって戦果の結果がこの有り様ではたまった物ではない。なにせ、右腕はもげているし、背部に設置されたスラストターは半壊、左足は着地の衝撃でもげていた。直せなくはないが、時間がかかるのは分かりきっている。

それでも、単騎によるモビルアーマー撃破は快挙であると言わざるを得ない。今まで一本筋で固まっている火星側以外にモビルアーマーを撃破できていない。即ち、アグニカの戦果が地球側初のモビルアーマー撃破だった。これに軍が興奮しない訳がない。

「主任、どうするんですか?」

「どうすると言われてもな……研究の続行を命令されている以上、止めることはできない。他のガンダム・フレームの開発と並行しながらバエルの修理をしていこう。どうせ、あの英雄様に振り回される事は確定してるんだ。俺たちは俺たちなりにやっていくしかない。まずはバエルの足回りの復旧だ。立たせられないとどうにもならん」

「了解です。聞いたな、お前ら! まずはぶつ壊れちまった左足から取りかかれ! 舐めた仕事したらぶつ飛ばすぞ!」

『はい!』

「悪いけどお願いします、整備長。後で軍資金を用意しますんで、俺の研究室に来てください。その金で呑みにでも行ってください」

「聞いたか、テメエら! 主任が金を用意してくださいさるそうだ! 労働の後の美味しい酒が俺らを待ってるぞ!」

整備長の言葉でテンションの上がった整備士たちの仕事ぶりはシリウスも見た事がない程だった。実に無駄のない仕事ぶりに苦笑を浮かべながら、医務室に向かった。そこでは戦闘で負傷(かすり傷程度だが)したアグニカが頭に包帯を巻いていた。

傍にはテストパイロットたちがおり、医師は若干迷惑そうにしてい

た。確かに大勢がいるべき場所ではないのに、更に人が増えただから仕方がない。けれど、シリウスにとっては火急の要件だった。

「おう、シス。どうかしたのか？」

「後遺症について、と言えはお前には分かるか？」

「ああ、それな。どうも左手が上手く動かないんだよな。殴るとか叩くとかそういう大雑把な動きはできるんだが、細かな動作は出来そうにないな」

「なるほど。思っていたよりは軽い症状だな。初回故のサービスなのか、それともお前がバエルに気に入られたのか……どっちにしても今回回りだろうな」

「……どういふ事なんだ？俺達には理解しきれないんだが」

そう言ったのはギレド・ボードウィン少佐。カールがかつた紫色の髪が特徴の青年だ。他のテストパイロットたちも困惑した表情をしており、アグニカとシリウスを見つめていた。他の者たちも同様に意味が分からないという表情を浮かべていた。

「……アグニカにはもう伝えたが、他の皆にも伝える必要はあるな。皆、俺の研究室に来てください」

「ここでは説明できないのか？」

「出来ない訳ではないが、無関係の人間がいる場所で話すような事でもない。アグニカの件も合わせて報告する必要があると思っただけです」

「まあ、良いじゃねえか。こんなところでグダグダしてても解決しないんだ。だったら、さっさと行こうぜ」

「カイエル中佐、あなたは怪我人なんですから、もう少し大人しくしておいてください」

「心配ご無用だつて。この程度のかすり傷、少し待ってりゃ治るよ。それにこの話は大事な事なんだろうしな」

アグニカの視線にシリウスは見返すだけで大した行動は取らなかった。しかし、それだけで理解したのかアグニカは立ち上がった。重心が取りにくいのか、少しふらついたが指し伸ばされたシリウスの手を取って立ち上がった。

一行がシリウスの研究室にたどり着くと、シリウスはアグニカをその辺に置いてある椅子に投げ飛ばした。そしていくつかの資料を机の上から取り出し、ホワイトボードに貼り付けた。他の面々も置いてあった椅子を取り出し、ホワイトボードの前に座った。

「全員が知つての通り、阿頼耶識は人体をモビルスーツの生態ユニットとする事でより高度な動きを可能にするシステムだ。モビルスーツから膨大な量の情報を叩きこまれる代わりに、モビルスーツを手足のように動かす事が出来るようになる」

「それは知っている。でも、それがどうしたんだ？」

そう言ったのはウエンデル・バクラザン大佐。テストパイロットたちの中ではトップの階級であると同時に年長だが、有事の際などを除けば上下関係を気にしない人物。アグニカを中心に据えたとするなら、陰の立役者と称されるような人物である。

「諸君はシュミレーターで動かした事があるから、分かるだろう？阿頼耶識の手術を受けただけで、モビルアーマーと戦えるようになるか？」

「ならない、わね。確かに普通のパイロットよりも技量的な意味では成長したけど、それでもモビルアーマーに勝てるとは思わないわ。でも、それをどうにかするためのガンダム・フレームなんじゃないの？」

そう言ったのはクエス・イシュー中佐。貴族の出でありながら、誰かのために戦う事を旨としている。本人は騎士となる事が夢だと語っているが、周りの人間に引き留められている。名家の出故の柵という物を抱えている。

「イシュー中佐の言う通り、阿頼耶識だけでは埋めきれない差を埋める物がガンダム・フレームだ。しかし、だ。具体的にどうすれば良い？災厄の名を冠するモビルアーマーの戦闘力は伊達ではない。高度に発達したAIも厄介に過ぎる。では、どうする？」

「それは……」

「モビルアーマーに反応して出力を始め、反応速度などを上昇させる。分かりやすく言えば、モビルスーツと一体化した上で出力を上げる事でモビルアーマーを圧倒できるほどの戦闘力を得る、という事だ」

「そんな事ができる物なのか？言葉にするのは簡単だが、そんなシステムを組む事ができるとは思えないのだが」

「条件付けが出来れば、不可能ではありませんよ。モビルアーマーの存在を確認すれば、ガンダム・フレームは全力を引き出そうとする。たとえば、パイロットを廃人にしたとしても——ガンダムはモビルアーマーたちを殺すために、その力をパイロットに与える。それはお前が一番よく分かっているだろ、アグ」

「ああ、もちろんだ。あいつは言ったよ。力をやるから、お前を寄越せよ————つてな。俺はそれに喜んで応じたよ。当たり前だよな。あいつらを、モビルアーマーを殺す事は俺にとって絶対の目的だからな」

「……お前ならそう言うと思っていたよ。バエルは調整するがな、あまり整備班の人間を困らせてくれるな。まさかテストであそこまでボロボロにされるとは思わなかったぞ」

「相手が相手なんだからしょうがないだろ。精々、整備班の連中には頑張ってもらうだけさ」

「まったく……俺はこれから火星側と連絡を取って、阿頼耶識の問題を何とかする。医療側と提携すれば不可能ではない筈だ。他のガンダムの開発も適宜開始される。ロールアウトには時間がかかるだろうが……軍高官側の手応えは良かった。残りも問題なく開発できる筈だ」

「ちよ、ちよっと待ってください！」

「どうかしたのか、クジヤン」

「どうかしたのか、ではありません！そんな非人道的なシステムを積んでいる機体に、我々も乗れと言うのですか!？」

「当たり前だろうが。何を言ってる？」

「ですが！」

「あのなあ、舐めた事を口にしてんじやねえぞ。確かに、ガンダムに搭載されているのは危険なシステムだ。本領を發揮すればするほどに、悪魔に人間としての機能を奪われちまうんだろう。だがな、結局は戦わなくちゃいけないんだよ。幾らか性能が良い程度の機体で勝てる

ほど、モビルアーマーは甘くねえ！それはお前だつて分かっている事だろうが！」

「そ、それは……」

ニースも理解はしている。テストパイロットたちもモビルスーツに乗り込んで戦闘に参加していた。バエルの圧倒的な戦闘力も、モビルアーマーの強大な戦力も理解している。だが、それでも、乗る度に四肢のどれかが使えなくなってしまうと言われて、平常でいられる程凶太くはないのだ。それは他のテストパイロットたちもそうだった。

「……ガンダム・フレームに乗るのは絶対ではありません。テストパイロットを辞退していただいても構いません。しかし、モビルアーマーを斃したと言っても人間側の戦果は、全体の1割にも満たない。地球側はただでさえ、互いに足を引っ張り合っているせいで火星側に戦果という意味では後れを取っています。」

ガンダムはそれを打開するための一手だ。この馬鹿は一人でモビルアーマーと戦う、なんていう馬鹿をやった所為でモビルスーツもロボロですし肉体に支障が出るほどの負荷を受けました。モビルアーマーと戦う以上は同じようなことは避けられないのかもしれない。しかし、我々は全力を尽くして皆さんをサポートします。どうか、私たちに力を貸してください。お願いします」

シリウスは頭を下げた。その真摯かつ真剣な雰囲気はニースを始めとした全員が口を閉じた。アグニカはそんなニースたちを黙って眺めていた。ニースたちがいかなる道を選んだとしても、アグニカの道は変わらない。バエルに乗ってモビルアーマーを殺し尽くす。その為に、アグニカはシリウスに力を求めたのだから。

「……分かりました。このニース・クジャン、力なき人々を守るために全力を尽くす事をお約束いたします。ダルク博士、弱音を吐いてしまった自分をどうかお許してください」

「そうだな。確かにクジャンの言う通りだ。俺たちは人々を守るために軍人になった。そんな我々が我が身可愛さに尻込みしては、誰も人々を守る事などできん。あのモビルアーマーどもを斃す事ができる力が手に入るのなら、それは本望というべきだろう」

「そこまで言ったんだから、私に相応しい機体を用意しなさいよ。心配しなくても、私は他の連中とは違って離れていたりはしないわよ。騎士に二言は無いんだからね」

「それを言うなら、武士に二言はないでは……?」

「え、ちよつと待ちないよボードウィン。武士って何?」

「うわ、藪蛇だったか。助けてくれ、エリオン」

「自分で話を振ったんだから、ご自分で何とかしてください」

「ちよ、おま、切り捨てるのが早すぎるだろう!」

全員が部屋から出て行く事なく、寧ろ乗り気な状態だった。その姿にシリウスは呆気を取られていたが、アグニカに肩を叩かれ笑ってしまった。何も持っていない孤児であった頃では考えられない光景だった。力こそが絶対であり、弱みなどみせよう物ならその瞬間に食われてしまうのがオチ。そんな頃では目の前の光景にはとても想像できなかった。

「皆さん、これからもよろしくお願いします。一先ず——今日は飲み会といきましょう。地球側が初めてモビルアーマーに勝ったお祝いとして」

「そりゃあ、良い。是非ご相伴に預らせてもらおう。よく考えると博士と一緒に飲んだ事はなかったな。今日は楽しみにさせて貰おう」
「そんな事言っても、俺は乗せられませんよ。ファルク少佐。まあ、そういう話は後ほどという事で」

シリウスとテストパイロットたちを眺めながらアグニカは笑っていた。その時、アグニカが一体何を考えていたのかは誰にも分からない。けれど、少なくともアグニカ自身は笑っているシリウスの姿に満足していた事だけは確かだろう。

そしてこれがシリウス・ダルクとアグニカ・カイエル、そしてセブンスターズの面々が本当に絆を深めたときされる出来事である。これ以降、シリウスはセブンスターズの面々と名前で呼び合い、本当の意味で仲間として行動し始めるのだった。

厄祭戦・4

ガンダム・フレームの開発が本格的にスタートし、それぞれのガンダムを開発作業がスタートした。ソロモンの七十二柱の悪魔を参考にして開発された悪魔たち。それぞれが悪魔としての力を遺憾無く発揮した。アグニカほど無茶苦茶ではなくとも、部下と共にモビルアーマーの討伐に成功している。

ガンダム・フレームの本領を発揮する度に、パイロットは傷ついていく。しかし、才能のあるパイロットが貴重である以上、使い物にならなくなったら切り捨てていては、すぐに良質なパイロットはいなくなってしまう。そんな状態ではモビルアーマーに対抗する手段などすぐに無くなってしまう。

そう考えた結果、シリウスはモビルスーツのログを基に阿頼耶識開発チームと協力してパイロット用の装置を開発した。阿頼耶識で繋がっている間は四肢を自由に動かす事ができる。その状態を日常的に再現する事が出来るように、それぞれに専用として設計された。その形はまるで首輪のような形をしていた。

まるで犬のように感じられはしたものの、それを付けることで普段通りに四肢を動かす事ができる。それ故にアグニカ以外のテストパイロットたちは付けることを了承した。しかし、どうしてもアグニカはその首輪を嫌がった。ガンダムの開発をしているシリウスの研究室を訪れ、首輪を摘まんでいた。

「本当にこれを付けないといけないのか？」

「別に付けなくても構わんぞ。強制している訳じゃないんだから、好きにすれば良い。常にバエルに乗れる訳じゃないんだから、いざという時のためにつけておいた方が良いと思うがな」

「ぐぬぬ……」

「そもそもお前は操縦が荒すぎるんだ。毎度毎度出る度にバエルをロボロにしゃがって……整備班と俺の気持ちも考えてもらいたいもんだがな」

「ししようがねえだろ？モビルアーマー相手に適当な戦いで何とかでき

る訳がないんだからさ。モビルアーマーをぶっ殺すためならあれぐらいなっちまうさ」

「それでも、だ。毎回あんな風にされては困る。お前の操縦が乱暴だから、あんな風になっちまうんだろう。実際、他のテストパイロットはお前ほど酷くはないぞ」

「それは分かっているけどな……」

「確かに、単騎での戦果という意味で言えばお前の存在は大きい。元々、プロバガンダ的な物があつたしな。しかし、もうちよつとどうにかならんのか？」

「うくん、俺もあいつもまだすり合わせの最中だと思うんだ」

「あいつ？バエルの事か？」

「ああ。俺はまだあいつがどれだけの能力を秘めているのかを知らない。あいつもまた俺がどれだけの能力を持っているのか分からない。

だからこそ、ぶつかり合いながらお互いの能力を確かめているんだよ。暫くはこんな事が続くかもしれないが、それでも俺は俺の力を手に入れてみせるさ」

「ご大層な事だ。それが何時になるかは知らないが、出来る限り早くそうなる事を願っているよ」

気のないような返事だが、シリウスは実際アグニカに期待していた。バエルのシステム面を担当しているシリウスだからこそ分かる事だが、今バエルのシステムは急速に変化している。もちろん、シリウスは何もしていない。バエルが考え、自らの手で行動しているのだ。少しでもアグニカの力とされるように、一体でも多くの天使を狩るために。

それに、シリウスはガンダムの声を聞く事ができる。その所為か、バエルが作業中のシリウスに話しかけてくるのだ。その行動に一々足を引っ張られ、中々作業が進まないで困っている。シリウス自身もシステム面に手を加えようとするのだが、その度にバエルが介入してくる。その所為で作業が遅々として進まない。今となつてはバエルが改変したシステムをシリウスが確認するだけに留めている。

「それにしても、お前は本当に被害が少ないな。もう両手を超える回

数はバエルに乗っているというのに、まだ片腕だけで済んでいるんだな」

「まあな。際限無く力を引き出ししてる訳じゃねえし、こんなもんなんじゃないか？他の連中はどうだったっけ？」

「クジヤン、バクラザンは左足。ファリドは左腕と左目。イシユーは右腕。ボードウインは味覚。エリオンは右足。ファルクは痛覚の麻痺。お前、これ片手で数えられる回数の被害だからな？バエルとお前の相性どんだけ良いんだよ」

ガンダムに乗ってモビルアーマーと戦う度にパイロットは傷ついていく。アグニカの試運転後、阿頼耶識の数を二つに増やしたテストパイロットたちはガンダムと意思疎通を計れるようになったが、ガンダムのじゃじゃ馬ぶりに翻弄されていた。モビルアーマーが人を殺す使命を帯びているなら、ガンダムはモビルアーマーを殺す使命を帯びている。モビルアーマーを前にして、ガンダムは落ち着いてはいられないのだ。

モビルアーマーを、自分たちに仇なす天使どもを殺す。それこそが、悪魔の名を冠するガンダムたちに与えられた至上にして絶対の命題なのだ。製作者であるシリウスや整備員、そしてパイロットたちの憎悪や敵対心を飲みこむ事で、ガンダムは完全なる悪魔としてこの世に誕生するのだから。そこには慈悲など一切として存在していない。「どうせ余計な事を考えてるんだろ？俺たちは軍人であり、モビルアーマーどもを絶対に殺すガンダムに乗ってるんだ。だったら、あいつら畜生どもをぶつ殺す事だけを考えていけば良いんだよ」

「お前らしい事だ。そんな風に単純に考えられたら誰も苦労はせんだろうな。人は獣みたいに単純ではいられない物さ。たとえば、その果てが同じ事だったとしても、方法を考えてしまうのが人間なんだよ」

「そんなもんかねえ……随分と平均的なモビルスーツだけど、何なんだ？」

「ASW—G—08ガンダムバルバトス——総てのガンダムの雛形とも言えるモビルスーツさ。癖のある一桁台の中で唯一、誰でもコンスタントに性能を発揮できる。そういうコンセプトで造られたモ

ビルスーツだよ」

「ふくん……でも、それって弱いつて事じゃねえのか？ 誰でもある程度の戦果を挙げられるって事は、ある程度しか戦果を出せないって事だろ？」

「さて、それはどうかな。実際に乗ってみれば分かると思うが、あいつは中々に凄いぞ。あいつのモビルアーマーに対する憎悪は、他の一桁台のガンダムにだって劣るもんじゃない。素直な奴だからな」

シリウスは感じていた。バルバトスはパイロットの求めに応じる。いや、応じすぎる。普通、ガンダムも他のモビルスーツの例に漏れず、パイロットがいなくては力を振るえない。だからこそ、奪う物と与える力を天秤にかけて与える力の量を調整する。

しかし、バルバトスはその事はない。パイロットの求める力をそのまま与える。もし、パイロットが廃人になっても構わないから力を寄越せと言われれば、バルバトスはその願いを叶える。純粹な者、強欲な者ほど、バルバトスとの相性がよく、同時にその命を落とす確率をはね上げる。バルバトスはそういう機体なのだ。

「ガンダムの開発も進んでいるし、少しずつではあるがモビルアーマーの討伐も進んでいる。後は地球圏におけるゴタゴタさえどうにかなれば……な」

地球圏で最大の被害はモビルアーマーではなく人災——即ち戦争である。これによって地球の人口は厄祭戦の始まる前の半分ほどまで減少した。その代わり世界の国々は少しずつ統合され、現在は4つの経済圏が確立されつつあった。

それがアブラウ・SAU (STRATEGIC ALLIANCE UNION)・アフリカユニオン・オセアニア連邦の4つである。

世界大戦と遜色ない戦争によって地球はあまりにも疲弊してしまっている。それ故にシリウスたち実験部隊はいつの間にか各経済圏から独立した組織として扱われるようになった。しかし、独立部隊としてはあまりにも人の手が足りないため、続々と各経済圏から人手が送られていき果てには巨大軍事組織となった。

当初の予定よりも巨大化した組織に危惧する人物はいたが、各経済圏の人々はこれ幸いとその組織を地球圏で唯一の軍隊とすることにした。これは先の大戦のような事態を防ぐためというのと、モビルアーマーという巨大な敵と戦うためには一致団結する必要があるとされたためである。

このトップにシリウスは据えられそうになったが、アグニカの人気を利用してアグニカに押し付けた。後で取っ組み合いの喧嘩になったが、しようもなさすぎるのでここでは記述しないでおこう。

アグニカをトップに据え、シリウスは参謀役というスラム時代の再現とも言える状態になった。その下にテストパイロットたちセブンスターズが着いた。この組織がいずれギャラルホルンと名付けられる組織の前身——アスガルドである。

この組織の登場により、地球圏の周辺に存在するモビルアーマーの掃討作戦が開始された。大戦によって多くの被害を出した地球圏としては痛い出費ではあったものの、これによって地球周辺の安全が確保される事となり、コロニー製造計画を進めることが出来るようになった。

その代わり、破壊され尽くしたガンダムたちにシリウスと整備員たちは悲鳴をあげることになったが。特にイシユウの乗っていたガンダムアガレスの大破具合は酷く、四肢欠損はおろか顔面まで破壊されていた。

「イシユウ！お前、ちよつとこれは酷いぞ！四肢欠損はともかく、顔面まで破壊されるってどんな戦い方をしてるんだよ!?!」

「五月蠅いわね。壊れてしまったものは仕方がないでしょう？あれだけの被害が出てしまうような戦いだっただから、このぐらい当然でしょう。……それで、この機体は直るの?」

「直ると思うか?」

「いいえ、まったく。一応聞いてみただけよ。直るのなら、また一緒に戦いたいと思っただけよ。この子も私の戦友なんだから」

「ここまで酷いと直すより、改めてフレームから造った方が早いだろうさ。幸い、エイハヴ・リアクターはまだ動かせるからな。どうする

？そちらが要望するなら改めてフレームから造るけど？」

「そんな暇がある訳がないでしょう？この宇宙にはまだ多くのモビルアーマーがいる。新しくフレームが出来るのを待っていたら、それだけ多くの被害が生まれてしまう……それは軍人として許すわけにはいかないのよ」

「……分かった。だったら、新しいガンダムにデータを入力しておく。完成し次第模擬試験を行っておいてくれ」

「分かったわ。それじゃあ、私は休ませてもらうから」

「ああ、分かった」

その後、テストパイロットたち改めセブンスターズの機体状況を確認した。その結果、ほぼ全員が別の機体へ乗り換える必要があることが判明した。ソレの指示をしていると、声が聞こえてきた。何かと思っていると、イシユウの乗っていたアガレスから聞こえてきた。

戦いたいと。殺したいと。あの天使どもをこの世から根絶やしにしてやりたいと、そう叫んでいるアガレスの呪いじみた声がシリウスには聞こえてきた。そんな最早残骸という名が相応しいアガレスに近づいて、シリウスは言った。

「まだ戦いたいか、アガレス」

勿論だと、アガレスは言った。こんな道半ばで終わりたいくはない。まだあの天使どもを殺したりしないのだと、アガレスは叫ぶ。

「たとえば、今の己ではなくとも連中を殺したいとお前は願うか？」

それで更なる力を手に入れ、あの憎き天使どもを根絶やしにできるなら構わないとアガレスは言う。憎しみもここまでいけば流石だと、シリウスは素直にそう思う事が出来た。

「ああ、俺がお前の願いを叶えてやる。お前に新しい力と身体を用意してやる。その代わり、お前はアガレスとしての名を失うだろう。その事に後悔はないか？」

——— ない。そんな物、あろう筈がない。自分の、悪魔の兵器としての使命を果たすことが出来るのだ。その使命を果たせなくなる事に比べれば、名を失うことなどほんの些細な事だ。重要なのは、あの憎き天使どもを根絶やしに出来るかどうかだけなのだから。

「……分かった。お前がその使命を果たせるように、俺も全力を尽くしてやる。お前が次に目を覚ました時、そこに大公アガレスはもういない。そこにいるのは……そうだな。人に仇なす竜ならぬ天使どもを塵殺する英雄であり、人を新時代へと導くための礎となる者——
——ジークフリートだ」

ここに契約は結ばれた。悪魔の王の名を冠するガンダムと共に並び立つ竜殺しの名を冠する機体がこの世に誕生する。父祖たる悪魔^{オーデイン}の住まうアスガルド^地を守るため、鋼の英雄を手繰るはあり得べからざる存在。

その果てが如何なる物となるのか……この時は誰にも分かっていなかったのである。

厄祭戦・5

アガレスの利用できる部分はほぼリアクターだけしか残されていなかった。ガンダム・フレームとしての機能はほぼ残されておらず、完全に一新する形となった。シリウスは雑務の類を片付けながら、アガレスのリアクターを利用したフレームを考えていた。

ガンダム・フレームに使用されているエイハブ・リアクターはそれぞれ使用用途が異なっている。一基だけでもモビルスーツを動かすのに十分なエネルギーを生み出す物を二つも積んでいるだけあり、自由度がかなりあるからだ。例えば、バエルであればナノラミネートアーマーに作用するエネルギーを加速系統に回している。アガレスの場合はナノラミネートアーマーの防御力を上昇させるようにしていた。

つまり、それぞれの機体によってリアクターの出力が異なっているという事だ。バエルは単騎でモビルアーマーを撃破させる事を目的としているため、速度特化の機体になっている。アガレスは味方モビルスーツの指揮も検討に入っているため、アガレスの防御力を上げる方向の調整が施されていた。

本来であれば、新たにパイロットとなる者の要望に応えてフレームは作るべきだ。しかし、そうする事ができない理由がシリウスにはあった。

「まさか、パイロットに俺を指名してくるとはな……」

そう、アガレスはパイロットにシリウスを指名してきたのだ。研究職であるシリウスがモビルスーツに乗る機会はそうはない。しかし、シミュレーターで叩き出される数字はアグニカに追随、或いは匹敵するほどの物であった。だからこそ、誰もがシリウスが戦場に出る事を切望していた。今のご時世、戦力は幾らあっても足りないからだ。有能なパイロットは一人でも多く欲しい、という意見もシリウスには分かる。

こうして業務をしているだけでも、モビルアーマーに対する戦力がどれだけ少ないのかが分かるからだ。度重なるモビルアーマーとの

戦闘により、パイロットも洗練されてきている。厄祭戦が始まる前のアグニカ程度の実力者なら、今では溢れ返りそうなほどに存在している。生き残るために、全員の腕が研磨されているからだ。それでも、モビルアーマーと戦うためには少ないと言わざるを得ない。

「もう潮時なのかもしれないな。俺も研究者だから、なんて理由では逃げられそうもない。戦場へ……か。昔では考えられない事だったな」

苦笑を浮かべながら、シリウスは業務を片付けた。そしてアガレスのリアクターを最大限に生かせる方法を検証し始めた。思いついたデータをシミュレーターの中に入れ、それを動かしながら訂正を入れていくという作業が一ヶ月間続いた。周りの人間にいつ寝ているのか、と言われるようなペースで作業と仕事を並列で行っていた。

新しいアガレスは一先ず形になった。しかし、シリウスには不満があった。防御方面に調整されたりリアクターであるためか、シリウスが求める速度を発揮する事ができないからだ。そこからどうしても先に進めず、数日程考えていた。

「よお、シス。なんか新しい機体を考えているらしいけど、形にはなりそうなのか?」

「いいや、絶賛足止め中だよ。アガレスのリアクターでは、どうしても俺の求める速度を叩き出す事ができない。しかし、一度調整されたエイハブ・リアクターを再度調整し直すことは出来ないし……どうしたらいい物か」

「なんだよ。そんなの簡単じゃねえか」

「……なに?」

「もう一個リアクターを付ければいいだろ?そっちの出力をバエルみたいにすれば問題は解決じゃねえか」

「リアクターを三つ……?」

アグニカの提案は単純な物だった。二つで足りないならもう一つ付ければ良い。子供でも言える案だったが、シリウスにとっては盲点に等しかった。何故なら、エイハブ・リアクターは一つあれば十分なほどのエネルギー製造機なのだ。ガンダム・フレームの二基搭載する

という行いは本来贅沢な物なのだ。それなのに、エイハブ・リアクターを三つも搭載するというのは、贅沢を超えてあり得ない事だった。

それ故に、シリウスの思考の中では自然とはぶかれていた。実際、実験部隊であった頃なら軍の高官たちに華で笑われていた事だろう。しかし、今のシリウスは地球圏の平和を守る独立組織。戦力となり得るのであれば、だれも反対はしないだろう。それが切望されていたシリウスの搭乗機ともなれば尚更の事だ。

アグニカの提案にシリウスの思考は高速で回り始めた。本来不可能とされていたエイハブ・リアクター二基の並列起動技術を知っているシリウスだからこそ、短時間で三基を並列起動させる式を考える事ができた。そしてそのデータをすぐさまシミュレーターに入力し、動かしてみせた。シリウスの理想としていた速度を、不満としていた要素の総てを解消したモビルスーツが完成した。

シリウスはすぐさま残りの仕事を部下に任せ、データを出力した上で整備班と会議を始めた。この時、アグニカもひっそりとシリウスの入力したシミュレーターを起動して動かした。しかし、その数値はいつものアグニカらしくなかった上に、シミュレーターを終えて出てきたアグニカは疲労困憊というあり様だった。

「……あいつ、なんてじゃじゃ馬を作ってやがる。俺はこの機体が出てきても絶対に乗りたくねえな」

その昔、特別に調整されたモビルワーカーを乗り潰していたアグニカ・カイエルにそこまで言わせる機体がどれほどの物か、誰にも予想する事ができなかった。実際、他のセブンスターの面々も挑戦してみたものの、最後までクリアする事も出来ずにリタイアした。アスガルドでもトップ集団であるセブンスターズですら乗りこなせない機体に恐怖と同時に、それを作れる興奮が整備班に漂っていた。

バエルを作った時と同じ様に、この機体はとんでもない物になると理解する事ができたからだ。途轍もない力を持つ存在はそれだけで世界を変えうる存在だ。アグニカ・カイエルがバエルに乗って単独で不可能と思われていたモビルアーマーを撃破したように、強大な力を

持つ存在は世界を変える。

エイハブ・リアクターを三基搭載した機体は最初は与太話の類かと思われたが、理論上とはいえデータとして示されると全員が目の色を変えた。元来存在していたリアクターを一切阻害せず、出力だけを向上させるといふ神業じみた行為を可能にした文字通り奇跡的な機体。技術的にも不可能ではないとなれば、整備班が燃えない訳がない。

製作には2〜3ヶ月を要し、その間にシリウスは実戦訓練を始める事になった。シミュレーターではなく、実際のモビルスーツによる戦闘をした事が一切ないシリウスに対して、シリウスの事をよく知らない兵士たちはサポートをする気でいた。そんな自信も一回の戦闘で微塵も残さずなくなっていた。

ヴァルキュリア・フレームというガンダム・フレームとは違う機体に乗込み、共に戦場に出ていたアグニカと共にモビルアーマーの討伐を行った。部下を指揮してブルーマと呼ばれるモビルアーマーのサブユニットを掃討しつつ、モビルアーマーの隙を見逃さずかつバエルの邪魔にならないようにサポートしていた。その優れた能力に誰もが自信を無くしかけていた。

「あいつと自分を比べない方が良いぜ？」

「カイエル様……しかし、彼は先日まで研究者だったのです。それなのに、軍人として戦っていた我々が負けるというのは……」

「あいつはさ、チェスとか戦略系のゲームが得意なんだ。同じような戦力がぶつかり合えば、あいつの指揮している方は絶対に勝つ。でもな、あいつ自身が本領を発揮できるのはお前らみたいな優秀な戦力があるからだ。あいつとお前らが同じ機体に乗込み込めば、あいつは負けるよ。年季の差があるからな」

シリウス個人の阿頼耶識を抜きにしたパイロットとしての実力は、一般のパイロットレベルだ。だが、部下を引き連れた戦術や戦略レベルになれば、シリウスに敗北はなくなる。それは他のパイロットたちの実力を最大限に引き出し、それを戦場に当てはめる事ができるからだ。文字通り、彼は司令塔^{キング}なのだ。

対して、アグニカは阿頼耶識を抜きにしても人類最強のパイロット

だ。部下がいようがいまいが関係なく、敵の総てを皆殺しにする。アグニカからすれば、部下は自分を引き立てる存在なのだ。文字通りの一騎当千によつて、モビルアーマージョーカーを掃討していく。彼こそが、アスガルドにおける切り札なのだ。

「俺とは真逆な存在で事さ。あいつからすれば、お前らは俺以上に大切な存在で事さ。お前らがいるからこそ、シスは生きているんだからな。新しい機体次第だが、お前らがいないとシスはコロツと死んでしまうからな」

アグニカは笑っていたが、偶々通りかかった乗組員としては笑えなかった。シリウスはアスガルドの支柱であり、今のアグニカはシリウスを中心にしセブンスターズと文官で回っている。今、シリウスを失えばセブンスターズと文官の負担が悪化して、最悪の場合アスガルドが空中分解する恐れすらあった。それほど、シリウスの貢献は大きい物なのだ。

「でも、あいつにだって分かつてるんだよ。それぐらいの実力しか自分にはないって事をな。だから、お前らが支えてやれ。俺はそういう柄じゃないからな」

「はっ……この命に代えましても、必ずや!」

「あ、別にそこまでの覚悟は要らない。あいつも戦場に出るんだし、自分が死んでしまう事ぐらい織り込み済みだろうからな。死んでも仕方がない程度で良いぞ」

アグニカの薄情とも言える言い方に、兵士たちの肩の力は完全に抜けていた。アグニカはそんな兵士たちを笑いながら、整備チームと機体の整備をしているシリウスの許に向かった。力仕事だけでも手伝おうとしていたが、アグニカの適当さ加減を知っているシリウスはアグニカを邪険に追い払おうとしたが結局絡まれていた。

そんな二人の仲の良さから、兵士たちはタイプとしては真逆に位置する二人がどうしてあんなに仲が良いのかが分かった気がした。真逆だからこそ、あの二人の仲は良いのだ。もし、あの二人が今と少しでもズレていたとしたら、あそこまで仲良くはしていなかっただろう。兵士たちは自然とそう思っていた。

「ダルク公、如何でしたでしょうか？ヴァルキュリア・フレームの方は」

「ああ、良い出来だと思う。アレなら量産を検討しても良いぐらいだ。資金援助の件は確約させてもらおう」

「ありがとうございます」

シリウスはヴィーンゴールブというアスガルドの本部がある場所に戻ってきていた。そこでヴァルキュリア・フレームを製作したメーリア・クルスと面会していた。本来、ヴァルキュリア・フレームはアスガルドのコンペで落ちてしまったため、日の目を見られない機体だった。しかし、偶々ソレを見つけたシリウスが使い勝手を確認してみたいと打診を行った物を戦場で使用した。

メーリアにとって、この打診は嬉しい物だった。選考に落とされた物がアスガルドのトップの目に留まり、当の本人が乗ってみたいと言ってきたのだから当然だ。研究所の名誉と威信をかけて造りだされたヴァルキュリア・フレーム——ヘルヴォルがシリウスを満足させる事ができてホッとしていた。

「ガンダム・フレームはリアクターを二つも使わないといけないからな。エースと呼ばれる人間にしか渡せない。だが、ヴァルキュリア・フレームはリアクターを一つ搭載しているモビルスーツの中でもトップの性能を誇っているだろう。それに非阿頼耶識保持者のパイロットが乗れるというのも良い点だ」

阿頼耶識は今となってはパイロットにとって必需品とも呼べる物となりつつあった。しかし、阿頼耶識に適合できない者がこの世には絶対数存在している。それは阿頼耶識に対する適合係数が低いからだ。阿頼耶識はその適合係数が最低でも50%はなくては、手術に失敗する。失敗の如何はDNAデータを確認すれば分かるが、それでも阿頼耶識を持ってない事はモビルスーツ乗りとしては重大な欠点となりつつあった。

普通の人間では阿頼耶識持ちの反応速度に追いつく事ができない。勝てない訳ではないが、同じ調整をされた同種の機体では勝つ事も難しくなってしまう。それ故に、阿頼耶識持ちではないパイロットたち

は落ちぶれつつあった。しかし、ヴァルキュリア・フレームはそんな非阿頼耶識保持者のパイロットたちを助ける一助となると、シリウスは判断した。

「ありがとうございます。ダルク様にそこまでお褒め戴き、恐悦至極です」

「ただ、俺は問題なかったが少し操作系に難があるな。その辺りはテストパイロットたちと相談して調整してくれ。専門の者たちも一応回しておくから、頼んだぞ」

「はい！いろいろとご助力いただき、ダルク様には感謝しかございません。どうでしょうか？一度、プライベートでお食事でも……」

「提案には感謝しよう。しかし、こちらが多忙の身故、勘弁してくれ」

「あ、はい……申し訳ございません」

「いい。気にしないでくれ。そちらからの申し出を断るのは心苦しいが、こちらこそちらに迷惑をかけたくはないのだ。理解してくれるとありがたい」

「い、いえ！こちらこそ、ダルク様の事を考えられず申し訳ございませんでした！」

「そこまで謝らずとも……そうだ。もし良ければ、なんだが……あの機体を俺が貰う事は可能か？」

「はっ……ヘルヴォルを、でございますか？」

「ああ。俺はあの機体が気に入った。何が、と言われると返答に困るところなのだがな。だから、もし良ければ良い。そちらで改めて研究に使うというのなら、素直に返上しよう。どうか？」

「ダルク様のお眼鏡に適ったというのなら、それは喜ぶべき事でございます。どうぞ、ヘルヴォルを使ってやってください。ダルク様であれば、無碍に扱う事はないと思っております」

「ああ、それは確約しよう。絶対にあの機体を粗末に扱ったりはしない。これはアスガルドの参謀長として命に匹敵する約束だ」

「はい。ヘルヴォルをよろしく願います」

これ以降、シリウスはアガレスのリアクターを使用した機体が完成した以降も度々ヘルヴォルに騎乗して戦場に出た。エースであるガ

ンダムの引き立て役として活躍を続け、ヴァルキュリア・フレームを参考にした量産機——グレイズ・フレームの登場以後はバエルと同じ様な扱いを受けた。

ヴァルキュリア・フレームが戦場に登場し始めて少しした頃、ついにアガレスのリアクターを使用した機体が完成した。全身を銀色に塗装され、威風堂々と立つその姿は明らかにガンダムとは異なる物だった。ついに完成したその姿にシリウスも整備班の人間も喜んでいった。シリウスは早速乗り込み、機体を確認していた。

「初めまして、だ。俺の事が分かるか？」

『分かるとも。先代が選んだ我が主よ』

「ほお……随分と鮮明に聞こえるんだな。ガンダムはもうちよつと聞こえにくいんだがな」

『それは自我がよりはつきりとしていないからだろう。我ほどではなくとも、バエル様は他の後輩よりも声が聞きやすいだろう？それは徐々に自我がハッキリとしてきているからだ』

「ほう……面白い話だな。さて、お前の名前を決めようと思うんだが、何か要望はあるかな？」

『いや、特にはない。主殿の言いやすい名前にすればいいだろう』

「そうか？ならば……そうだな。やはりこの名前だろうな」

問うまでもなく、シリウスの中ではこの機体の名前は決まっていた。目的のためには、これ以外の名前はあるまいと思っていたのだ。その名前は——

「ジークフリート。ASW—GE—01ジークフリート。それがお前の名前だ」

ASW—GE—01ジークフリート。世界にたった一つしかないエインヘリアル・フレームはこうして誕生した。天使どもを皆殺しにする為に、竜殺しを為す不死身の英雄はここに誕生した。総ては人類に仇なす化け物どもを根絶やしにする為に。それだけを求められた機体は確かにこの世に生まれ出でた。

厄祭戦・6

ジークフリートの動作試験は何事もなく終了し、いつでも出せるような状態にしてあった。シリウスとアグニカや他のセブンスターズとの時間が合わず、モビルアーマー討伐の任務に出る事は叶わなかった。そんな中、火星圏のリーダー的存在である白き革命の乙女が接触を求めてきた。

アスガルド結成前の地球圏はそこまでの余裕がなかったので、情勢的に落ち着いてきている現状で行ってくれたのは寧ろ好都合と思っていた。しかし、アスガルドにも一定数のファンがいる辺りは彼女のカリスマを素直に凄いと思っていた。少なくとも、自分^{シリウス}には火星圏の人間を纏められるほどの能力はないだろうと考えていた。本当はそんな事はないのだが、アグニカがいるので勢力を二分化しているため、シリウスはそう思っていた。

木星圏にあるコロニーで落ち合う約束を交わすと、シリウスは即座に行動を始めた。地球圏ではガンダムやヴァルキュリアによってモビルアーマーの掃討が進んでいるが、火星圏側は数でモビルアーマーと相対している。合流前にモビルアーマーに襲われれば一溜まりもないかもしれないのだ。救援を送る事込みで準備をしていた方が良くいと判断した。

こちらから迎えに行く勢いで準備を進め、二日後には地球を出発していた。ハーフビーク級の艦を三隻用意し、手土産にガンダムを何機か用意しておいた。文官たちにそれは手土産としては多すぎるのではないかと苦情を言われたがシリウスはそうは思わなかった。火星圏でガンダムが活躍してくれば、それを提供したアスガルドの評判は上がる。それにモビルアーマーを討つという目的は同じなのだから、手を貸さない訳がない。

「どうも、うちの文官は少し頭が固いな」

「仕方がありません。ガンダムは我々にとつての最上級戦力です。私も本音を言えば、その文官たちに賛同しますよ。態々、火星圏の者たちに渡さずとも、とね」

「そうではないよ、艦長。我々はモビルアーマーという強大な敵と戦う同士だ。人類の危機だという状況で方向が違うというだけでいがみ合うのは愚かな事だ。いがみ合うのは戦いが終わった後でも遅くはあるまい。今は目の前の危機に注意を向けるべきだ」

「それはそうかもしれませんが……」

「それに、たとえ数機程度ガンダムを渡したとしても問題はないさ。こちらにはセブンスターズとアグニカがいる。あの連中がたかがガンダム数機程度に負ける物か。君は想像できるか？初回の模擬テストでモビルアーマーを破壊するような奴が負ける姿を。俺には到底イメージできない」

「ハハハッ、それは確かに。カイエル閣下がいればどんな相手でも恐ろしくはありませんな。普段は温厚な方ですが、戦場では本当に苛烈な御方ですからな」

「そりゃそうさ。あいつは究極の負けず嫌いだからな。負けるぐらいなら無理矢理にでも引き分けに持って行こうとする。やる事なす事無茶苦茶で、こつちの盤面を引つ掻き回してきやがる。後にも先にもあいつだけだろうさ。俺が負けを認めたのはな」

「ダルク閣下はカイエル閣下と幼少期からの付き合いだそうですが、やはり昔からああいう方だったのですか？」

「……いや、あいつが軍人としてどんな風に戦っているのかは知らなかったが、付き合いのあった奴に訊けば変わったそうだよ。普段は変わらないのほほんとしてやがるがな。昔はあそこまで苛烈じゃなかったよ」

アグニカ・カイエルは良くも悪くもはつきりしている人間だった。勝負がキツチリとつけば、そこで争いは終わりだと思っていた。相手を完膚なきまでに叩き潰すという考えがアグニカはない。だからこそ、シリウスはアグニカの甘さをカバーするように動いていた。シリウスのカバーがあるからこそ、アグニカはスラム街の頂点に立っていたのだ。そうでなければ、スラム街はもっと混沌としていただろう。

しかし、今のアグニカはそうではない。キツチリと止めをさすまで戦う事を止めない。アスガルドはモビルアーマー討伐に限らず海賊

組織の掃討も行っているが、アグニカと相対した連中は一人残らず殺されている。アスガルドという絶対権威に逆らっている以上、仕方ないのかもしれないがシリウスはアグニカの変化を明確に感じ取っていた。同時に変化の理由も。

「……まあ、手加減して命を落とされるよりはよほど良いでしょう。カイエル閣下もダルク閣下も今の情勢下では必要な御方ですから」

「そうだな。単騎で盤面を覆す輩は敵にいられると厄介だが、味方にいればこれ以上なく頼もしいからな。精々、あいつには頑張ってもらおう……うん？」

「どうか……何事だ!？」

「前方にエイハブ・リアクターの反応多数! 中心には火星側の使者と思わしきハーフビーク級が三隻! その手前には海賊船と思わしき反応あり! 後方には……モビルアーマーです! ハシユマルタイプと交戦中の模様!」

「チツ……嫌な予想が当たった訳だ。艦長、俺はモビルアーマー討伐に出る。他のパイロットを海賊組織捕縛に向かわせ、完了次第モビルアーマー討伐に参加させてくれ」

「了解いたしました。ご武運を」

「こんな所では死ねんさ。俺は美人な嫁さんを迎えて大往生で人生を終えるつもりだからな」

「確かにそれでは死んでも死にきれませんな。では、我らに勝利を齎してください。あなたの駆る竜殺しの名に偽りがあらんことを」

「もちろんだとも。とは言っても、これからするのは天使殺しだが……構うまい。父祖オーディンに逆らう神天使どもの御使いは皆殺しだ」

獣じみた笑みを浮かべながら、シリウスはパイロットスーツに着替えた。そしてモビルスーツデッキに移動し、準備を終えているジークフリートに乗り込んだ。そして初めての実戦故か興奮しているジークフリートに気が付いた。そんな遠足前日に眠れずにいる子供のような反応に、シリウスは微笑を浮かべる。

「いよいよだ、ジークフリート。お前の全力を発揮させる時が来たぞ。しかも、俺たちが助ける相手は白き革命の乙女——有り体に言え

ばお姫様だ。お姫様を救うのは何時だって英雄の仕事だ。そうだろう？」

シリウスの言葉に反応するように、カメラアイが光る。そんなジークフリートのリアクションに満足しつつも、操縦桿を握る。先ほどジークフリートにはああ言ったが、シリウスも興奮を隠せなかった。自分のために作業し、自分のために調整された機体を操るのだ。興奮しない訳がない。

「さあ、行くぞ。シリウス・ダルク、ジークフリート出るぞ！」

艦から飛び出たジークフリートは海賊艦を瞬く間に抜き去り、火星圏側のハーブビーク級も抜き去った。突如として現れた機体に誰もが困惑を隠せなかったが、ジークフリートがモバイルアーマーハシユマルに攻撃すると誰もが動き出した。しかし、シリウスはそれを一切気にすることなくジークフリートを操っていた。まるで初めて貰った戦隊物の玩具で遊んでいるかのように、ジークフリートを操る。

「良いぞ、ジークフリート。だが、まだまだ。お前ならもつと出来る筈だ！こんな天使如き、軽く手を捻るようにやってのけるだろう！もつと力を引き出せ、ジークフリート！」

その言葉に反応するかのようには、ジークフリートの眼光が赤く染まる。それに応じて、ジークフリートの出力が上昇する。周りに存在するサブユニットであるプルーマを羽虫を散らすように蹴散らし、ハシユマルの特徴とも言えるテイルブレードを手元にあるバスタードソードによって捌いていく。モバイルアーマーの特徴たるビーム兵器を一切展開させずに戦闘を続けていく。

ジークフリートがテイルブレードの隙をついて一太刀浴びせた瞬間、ハシユマルに殴り飛ばされ腕部の運動エネルギー弾を叩きこまれる。何とかその一撃をバスタードソードで防ぐが、運の悪い事に何度もテイルブレードを振り下ろされた部分に直撃されてしまい、バスタードソードに罅が入ってしまった。シリウスは舌打ち混じりにバスタードソードを捨て、右腕部に取り付けられたソードと腰部に取り付けられたハンドガンを抜いた。

「忌々しい……とつとと墜ちろ、天使もどき」

シリウスのその眩きに反応したのか、ハシユマルが咆哮する。その咆哮に反応してジークフリートのリアクター音がまるで咆哮の様に響き渡る。それを感じたシリウスは笑みを浮かべる。ジークフリートの昂揚がシリウスにはダイレクトに伝わり、全身に充足する力がハシユマルを絶対に殺すと告げているのが分かるからだ。

「まだだ。もっといけるだろう？ジークフリート。天使共を殺すお前の力がこの程度な訳がない。だから、もっとだ。俺の身を心配しているのなら、それは無用な心遣いだ。目の前のこいつを……殺しきれ！」

シリウスの咆哮にジークフリートが応える。ジークフリートの眼光は最早真紅と呼んで相違ない程に輝き、総ての天使を殺すために全力を發揮する。ジークフリートは理論上、ガンダム以上の性能を發揮する事ができる。エイハブ・リアクターを三基も搭載しているというのは、決して伊達ではないのだ。

ハンドガンハシユマルの口元に突っ込み、弾丸をすべて吐き出させる。ダメ押しと言わんばかりにソードをビーム発射口に突き刺し、完全に破壊する。そして上昇した出力でハシユマルの顔を蹴りつける。それによつて、ハシユマルはのけぞった。更にその上から殴り込み、口の下——顎の部分を破壊する。ダメ押しと言わんばかりに腕部の指の一つを踏み砕いて距離を取る。

各部から焰を撒き散らしながらハシユマルが咆哮する。修復を行おうにもプルーマはシリウスの部下と火星圏側の戦力によつて破壊されている。何より、目の前の相手がここから退避するのを見逃すはずがないという確信があった。

実際、シリウスとジークフリートにハシユマルを見逃す気など欠片もなかった。無理矢理な行動をしたため、腕部と脚部に損傷が発生していた。これは間違いなく、艦に戻ったら修復ルートまっしぐらだと苦笑を浮かべながらハシユマルを睨みつける。そしてハシユマルが再び咆哮した瞬間、最大速度でハシユマルとの距離を詰めた。

ハシユマルはテイルブレードでソードを持っていた左腕……ではなく、基点と言える左肩を潰してきた。それによつて一切の武装を失

くしたジークフリートに悠々とテイルブレードを突き刺そうとした瞬間、ハシユマルの首が断たれて動けなくなっていた。

一体何故、と思考した瞬間吹き飛んだ左腕のソードラックに嵌まっていたソードがなくなっていた。左肩ごと左腕をもぎ取られそうになった瞬間、シリウスは奇跡とも言える反応を見せた。後ろに吹き飛ぶ腕と前に動こうとする機体の間で生まれる反作用を利用し、東方に伝わる居合い抜きを再現してみせたのだ。首と胴体を繋ぐ装甲の隙間を見事に切り裂いてみせたのだ。

文字通りの神業だったが、そこで慢心することなく転がった顔面に剣を突き刺した。その上で装甲の隙間からリアクターを貫通するようにソードを突き刺した。そして周囲のプルーマが動けなくなったのを確認した後、ジークフリートは停止した。シリウスも目と鼻から血を流しており、動けなくなっていたというのが正しいかもしれない。

その後、部下にジークフリートと腕と装備を回収され、共に木星にある大型惑星間巡航船『天形』に向かった。この一帯はテイワズと呼ばれる複合企業によって統治されている。ヤクザと言われるマフィアの一種でもあるが、きちんと統治できているのであれば問題ないので放置されている。今回はその代表取締役であるマクトール・バリストンに場所の仲介を頼んでいた。

天形に向かう航路の中で意識を取り戻し、専用の調整を施したチョーカーを付ける事で普段通りに動けるようにしていた。目を覚ました後にジークフリートを見に行くと、整備班の人間に怒られてしまっていた。バエルの時と同じぐらいに壊してしまったので、「お前さんもあいつと親しいだけあるわ」と嫌味を言われてしまった。

それはともかく
閑話休題。

シリウスはマクトール立ち合いの元、火星圏代表と相対していた。目の前にいる少女は美しい少女だった。火星圏側の軍服を身に纏っている少女は成人なり立て、というぐらいの歳だ。それでも木星圏を纏めている百戦錬磨の偉丈夫と多少年上とはいえ、地球圏の軍閥係を纏め上げた英雄を相手に毅然としていた。

その毅然とした姿にマクトールは感心し、シリウスは納得していた。確かに、自分たちを相手にこれだけ毅然としていられるなら、人々の心を揺り動かす事も不可能ではないと。だが、それとこれと話は別だと言わんばかりにシリウスは少女を見つめていた。

「それでは、初めまして火星圏を纏め上げる若き革命の乙女。俺の名前はシリウス・ダルク。地球独立治安維持組織アスガルドで宰相として活動しています」

「え?……あ、失礼しました!私は火星独立組織アルマイルでリーダーをしているジャンヌ・ダルクと申します」

「おつ?なんだ。お前さんたち、同じ苗字なのか。なんだ?兄妹なのか?」

「いや、偶然でしょう。俺は孤児でしたから、親の顔も名前も知りません。拾われた施設でそう名付けられただけなので、偶然でしょう」

「いや、面白い偶然じゃねえか。いつそ、運命的な物を感じるな」

「そうかもしれないですね。しかし、交渉の話はまた別ですから。それでは話し合いを始めるとしましょうか」

厄祭戦が開始してから三年、火星と地球はようやく同じテーブルにつく事が叶ったのだった。

厄祭戦・7

火星圏との会談を終え、地球と火星は正式に同盟を打ち立てた事を表明した。モビルアーマー討伐が終了するまでの間、共に手を出さずに戦うことを確約した。この同盟によって地球と火星はお互いに抱えたままであった問題を抑え、一時的な平穏を手に入れていた。しかし、その平穏もほんの一時の夢に過ぎなかった。

「モビルアーマーの行動パターンが変わった？」

「ああ。今回の遠征ではモビルアーマーの姿はなかったが、その分大量のプルーマが発生していた。俺たちだけでは抑えきれず、被害が出てしまった」

「モビルアーマーの姿はないのに、プルーマだけはいたなんて……今までではありえない事ですね」

「確かに。そもそも、プルーマを操作しているのはモビルアーマーだろう。それなのに、モビルアーマーがないなどという事があり得るのか？」

「信じがたい事ではある。しかし、エリオン卿の間違いであるとは思えない……一体、どういう事なんだ？」

「……どう思う？ シス」

「どうもこうもあるものか。恐れていた事態がついにやってきた、というだけの話だ。やはり、火星との会談はやっていて正解だったようだな」

「恐れていた事……ですか？」

セブンススターズの会議に上がった議題。それはプルーマの大量発生による被害の拡大だった。地球側は大戦によって疲弊し、火星側はモビルアーマーとの戦いによって疲弊している。どちらにとっても、今回の事態は歓迎すべからざる事だった。シリウスとしても、今回の事態は非常にまずいと言わざるを得なかった。

「おそらく、今回の一件を招いたのは智天使ケルベムの連中だろう。人を殺すだけなら、モビルアーマーが赴かずともプルーマだけで事足りるからな。モビルアーマー側の実質的な司令官であるあいつらを叩かなけ

れば、俺たちが勝利する事は難しいだろう。ここからは完全な物量戦とかすからな」

もしそうなれば、人間には完全に勝ち目がなくなる。ブルーマなど、今のパイロットたちにとっては屁でもないが物量が違う。どれだけ強い人間であつても数には勝てないように、どれだけ優れたパイロットでも数の力に抗うのは非常に難しい。一般人を同時に守るのであれば尚更の事だろう。モビルアーマーは完全にシリウスやジャンヌたちの弱点を見切っていた。

「……やはり、以前から議題にしていた物を実行に移すしかないようだな」

「地球圏と火星圏の軍事力を一つにまとめた治安維持組織の設立、か……あちらは了承するか？」

「するかどうかではない。させるしか我々が生き残る道はないのだ。このままではなす術もなく全滅する事は必至だ。その前に、打てる手は打たなければならぬ。開発部門から上がってきていた決戦兵装の開発、各経済圏への根回し、組織を纏める上で邪魔な問題の解決、火星側への配慮……考える事もするべき事も山のようにある」

「それは、そうかもしれないが……」

地球側には火星側に対する偏見がどうしても存在した。その偏見が彼らに正しい選択をする事を阻んでいた。しかし、シリウスにはそんな物はない。何故なら、火星圏に移住せざるを得なかった者たちよりもよほど酷い生活を送っていたのだ。そんな偏見が生まれる土台など、シリウスにはない。自分たちも彼らもただ生きるために、必死だっただけなのだから。

「どうする？ アグニカ・カイエル最高司令官。最終的に決めるのはお前の仕事だ。どうせ、俺たちはお前の決定に従うだけなんだからな」
「……シリウス・ダルク宰相。お前の中で、その計画の成功率はどれほどだ？」

「さつきも言っただろう。成功するかどうかじゃない。必ず成功させなければならぬんだ。お前が望むなら、俺は必ず成功させてみせる。お前は、タダ命令すれば良いんだ。モビルアーマーどもを根絶や

しにする為の一助となれ、とな」

「ハッ、確かにそれはその通りだな。モビルアーマーどもを根絶やしにする為なら、どんな手段でも取ってやる。それは悪魔と契約した俺たちの役目だ。そのためなら、火星の連中と手を組めばそれが可能なら喜んで手を組もう。シス、お前の言う事は絶対だな?」

「お前の暴力と俺の知力が合わさって出来なかった事があるか?」

「ねえな。俺はお前と力を合わせてスラムの頂点に立った。お前が造ったバエルに乗る事でモビルアーマーを撃破した。俺とお前が組んで出来ない事などある訳がない。だったら——お前ら!俺たちの役目は何だ!」

シリウスの言葉に納得したアグニカは立ち上がり、座っているセブンスターズの面々を見回した。舐めた事をほざいた奴はぶつ殺すと言わんばかりの眼光に、誰もが一瞬身を竦めた。しかし、一番最初にイグニウス・ファリドが立ち上がり、アグニカの質問に答えた。

「ハッ!市民を守り、それに仇なす敵を撃滅させる事があります!」

「そうだ!だったら、今の俺たちの敵は何だ!」

「憎き天使ども——モビルアーマーであります!」

次にニース・クジャンが。

「そうだ!無辜なる民を虐殺し、俺たちの同胞の命を無惨にも奪っていったあいつらだ!だったら、俺たちはあいつらを絶対に赦してはならない!だが、残念なことに俺たちだけでは戦力が足りない!ならば、どうする!」

「足りない物は他所から持ってくる!」

次にウエンデル・バクラザンが。

「そうだ!自分が持ってねえなら、他所から持ってくるのは当然だ!ならば今、それを持っているのは誰だ!」

「火星の独立組織であります!」

次にギレド・ボードウインが。

「そうだ!幸いにも連中はガッツがある!力が足りないなりに知恵を振り絞り、ガンダムもなしにモビルアーマーをぶつ殺した!そんなあいつらはお前らが思っている程貧弱か!」

「いえ！そんな事はありません！彼らは勇気ある兵士たちであります！」

次にクエス・イシューが。

「そうだ！俺たちは彼らに対して敬意を持ちこそすれ、貶して良い道理など存在しない！ならば、俺たちはどうする!?!」

「火星側と協力を持ちかけ、智天使などと名乗る者たちに正義の鉄槌を！」

次にマルクス・ファルクが。

「そうだ！ガンダムという絶対の暴力を持つ俺たちと脆弱なる身でモビルアーマーを斃すという偉業を成し遂げた彼らが手を組めば、恐れる物は何もない！違うか!?!」

「いいえ！我々の力と彼らの力が合わされば、天使どもなど恐れるに値しません！」

次にアマデウス・エリオンが。

「そうだ！彼らと我らで力を合わせ、この戦争を終わらせる！ならば、俺たちが掲げるべき言葉は!?!」

「——我らに勝利を」

最後にシリウス・ダルクがアグニカ・カイエル問いに答えた。望む答えを告げてくれたセブンスターズと最も信頼する親友にアグニカは笑みを浮かべる。そう、モビルアーマーを根絶やしにした上での勝利をアグニカは求めている。そのためなら、アグニカは喜んで悪魔にその身を売り渡す。

「分かっているなら動け！連中は待ってくれんぞ！モビルアーマーを、あの虐殺の天使どもは皆殺しだ！」

『ハッ！必ずや、勝利を我らに！』

ここに趨勢は決まった。これ以降、セブンスターズとシリウスは火星圏と戦力を合一化した組織のために尽力する事となった。当然、その動きは各経済圏及びアルタイルのトップであるジャンヌ・ダルクの知るところとなった。そのために活動しているアスガルド上層部——

——特にシリウスの疲労具合は他とは比べ物にならなかった。

作業している机の上にはエナジードリンクが常備されており、誰か

と面会する予定がない限りは部屋に閉じこもって作業をしていた。誰かと会う際にも化粧係にクマを何とか誤魔化してもらい、多少時間はかけるがそれでも十分はかけずに誰かと会える体勢を整えていた。寝る時間もほぼなく、寝ている時間があるとすればそれは気絶している事を意味していた。そんなブラック企業も真つ青な労働環境に身をやつしていた。

「シリウスさん、大丈夫ですか？少しは休まれた方が良いのでは……」
ジャンヌはシリウスの多忙さを知る数少ない人間の一人だった。命を救ってもらったあの一件以来、ジャンヌはよくシリウスと話していた。ごく短期間でシリウスの事を把握したジャンヌは勿論、無茶苦茶な生活を送っているシリウスの事もよく理解していた。確かに、今が大事な時期である事は確かだが、それでもあんな生活を送っているは死んでしまうかもしれない。

火星を離れ、地球を訪れていた彼女はシリウスの家でお世話になっていた。シリウスの家で働いている使用人たちも普段は主人であるシリウスがいないので暇を持て余していたが、ジャンヌのお陰で働きがいがあった。さらに心底シリウスの事を心配しているジャンヌの姿に、もうシリウスの嫁に来てくれないかとすら思っていた。

「彼の労働環境はもう少しどうかならないのですか？」
「うーん、あいつは最高責任者だからさ。俺に求められているのは英雄としての象徴と組織を纏め上げるための錦の御旗なんだってよ。その分、発生する責務に関してはあいつが負担するという事になっているんだ。下手に俺が首を突っ込むと逆にあいつの負担になる可能性すらあるからな。中々手は出せないよ」

ジャンヌはアグニカの元を訪れ、シリウスの労働環境の改善を求めている。基本的には遠征部隊にいるアグニカもシリウスの現在の労働環境にはドン引きしていた。確かに、この案件は拙速を尊ぶがそれでもシリウスの行動はやりすぎだと思う。しかし、それをアグニカが止める事が出来ないのもまた事実だった。

「そうですか……」

「あいつはさ、結構万能な奴だよ。オールマイティって言った方が良

いか？それが余りにも過ぎるから、誰もがあいつに頼っちゃまう。んでもって、あいつもその期待に応えちまう。その連鎖をどうにかして断たない限り、あいつはああやって無茶し続けるだろうさ」

「何でもできるが故の弊害……ですか」

「そう。あんただって、多くの人に支えられて今までやってきただろう？あいつはその逆。多くの人間を一人で支えられるだけの能力を持っててるんだ。万能の天才とはまさにあいつを指す言葉さ。あいつほど器用に物事をこなす奴を少なくとも俺は知らねえな。俺みたいな一方向に秀でた、というか突き抜けた奴以外にあいつを負かせられる奴はあいつと対等にはなれねえよ」

「対等な関係の人間の言う事には従うのですか？」

「従うって言うのは正解じゃねえな。少なくとも一考の余地ありと判断するだろう。その上で無茶する時は無茶するし、聞く時は聞き入れるさ。それ以外じゃあ、あいつは無理矢理にでも何とかしようとするな」

シリウスにとって、対等ではない存在は基本的に守る対象として認識している。敗北したことを認めているアグニカだからこそ、シリウスは守るといふ事をしない。シリウスにとってはアグニカは既にそういう対象ではなくなっているからだ。だが、それ以外の下っ端や部下たちは違う。シリウスにとって、彼らは守るべき対象なのだ。守るべき対象のためなら、シリウスは幾らでも無茶をする。

「まあ、あんたがあいつの事を好いてるって言うなら、あんたがあいつを縛る鎖になってやれば良い。そうすれば、あいつも多少は言う事を聴くだろうさ」

「え……？」

「なんだ、違うのか？確かにこれまであいつの無茶振りに対して、俺に嘆願してきた奴は大勢いたがな。それでもあんたほど真摯かつ真剣に頼み込んできた奴はいない。特に女ではな。まあ、端から俺らの周りにはあんまり女はいないけどな。イシユウの奴は完全にストライクゾーンどころかデッドボールゾーンって感じだし」

アグニカの言葉を聞きつつも、ジャンヌは困惑していた。自分がシ

リウスの事を好いている、という自覚が完全になかったからだ。シリウスの事を心配しているのも、常識人として彼が無茶苦茶な事をしていてそれを止めたいという想いがあつたからだ。恩人であるシリウスが過労死したなどという事になっては、悔やむに悔やみきれないからだ。

普通の人であれば、シリウスは心配されて当然だろう。シリウスの古馴染みだと言うのなら、アグニカはシリウスの暴走を止めるべきだ。だが、アグニカはそんな事をせずに彼に完全に任せきっている。シリウス・ダルクという男であれば、その程度はやつてのけると本気で信じているのだ。だからこそ、アグニカはシリウスのやる事に口を出さない。そこには絶対の信頼があるからだ。ジャンヌの向ける感情とは違う物だ。

「まあ、悩めよ。火星圏独立の旗頭に立てられた若き革命の乙女。あいつはともかく、あなたにはまだ時間がある。ゆっくり考えて答えを出していけばいい。まあ、確かにあいつもそろそろ気絶させてでも寝かせるべきかもしれんしな。その辺りは俺がなんとかしよう」

そう言ったアグニカの言葉もジャンヌの耳には届かず。ジャンヌはただその場に立ち竦んだまま、まとまらない思考に意識を向け続けるのだった。

厄祭戦・8

苛烈を極めたシリウスの仕事は一先ずの落ち着きを見せた。最早どれだけ徹夜したかも分からない程、というよりは昼夜逆転どころか昼夜皆無というレベルだったシリウスにも遂にまともに休める時が訪れた。正確に言えば休める時間ではなく、休まされる時間と言うべきだろう。

モビルアーマーに対する警戒態勢の構築を部下に完全に任せたセブンスターズ、そしてシリウスの余りの惨状にもう駄目だと判断した文官たちに休暇を取らされたのだ。さしものシリウスも常軌を逸した衰弱状態＋体調も狂っているとすれば、抗うことは出来ない。無理矢理車に乗せられ、家に運ばれた。まるで荷物の如く家に運ばれたシリウスに驚くものの、一切抵抗できていないシリウスにしようがないと判断した。

「し、シリウスさん!？」

誰も何とも思っていない中、唯一ジャンヌは荷物扱いされているシリウスに驚いていた。最早抵抗する事すらアホらしくなっていたシリウスは完全に眠っていた。最早、死んでいるのではないか?と言いたくなるほど眠りの深いシリウスに、それでも心配できるほどジャンヌは出来た女性だった。

前日にSAUの政治家と会っていただけに、身体的に汚れているところはなかった。ただただ一心に眠りこけているだけだった。ジャンヌはベッドで寝ているシリウスの手を繋ぎながら、シリウスを見守っていた。時計が動いている音しかしない空間にたった二人だけ。そんな夢のような事態にジャンヌの心は葛藤していた。

『何をしているんですか?彼に対する感情に気付いたんですから、ここはキスの一つでもやっておくべきでしょう』

『何を言っているんですか、黒い私!病人にそんな事をするなんて常識知らずな事をしてはいけません!』

『何を言っているのはこちらのセリフです、白い私。彼はただ極度の疲労で眠っているだけ。別に病人という訳ではありません。看病する

代わりにキスをするという報酬をもらうだけです』

『それを常識外れと言わずに何と云うんですか！今時、看病の報酬にキスを迫る人なんていませんよ！』

『綺麗事しか言えない聖女様に用などないわ。さあ、今の自分が何をすべきかあなたは分かっているでしょう？さあ、やりなさい！』

『いいえ、そんな事はしません』

『なっ!?!』

『そう、それで良いんです！そもそも嫁入り前の娘がそんな事をするなど、はしたないにも程が……』

『彼が目覚めてからもっと凄惨な事をして貰いますから。それまではお預けです』

『ええっ!?!』

「こんなに大勢の人に迷惑や心配をかけて……本当に悪い人。自分が一体どんな事をしたのか、じっくりたっぷりと教えて差し上げるとしましょう」

その時のジャンヌの表情は妖艶な色気に包まれていた。神聖さを通り越して魔的とも言えるその表情は、見た者を彼女色に染め上げるかのよう。ジャンヌの天使と悪魔は両方仲良くドン引きしていた。その時ばかりはジャンヌは聖女というよりは魔女という言葉が相応しく、シリウスも若干震えていた。

しかし、ジャンヌはすぐにその表情を引っ込め、シリウスの頭を撫で始めた。そしてジャンヌは遠く離れた火星で暮らしているであろう家族を思い出していた。今の地位になってから、ジャンヌは家族の元へは帰れていない。それは彼女自身が家族と出会ってしまえば、自分の心が揺らいでしまうという事を理解しているからだ。

成人なりたてという若い身の上だ。戦場とは程遠い環境に生まれ、火星に移住してからも両親の仕事を手伝いながら妹や弟の世話をしていた。そんな中、悪化する一方だった環境をどうにかしたいと考え、行動した結果革命の乙女などと呼ばれるようになった。それは決してジャンヌが望んだ称号ではなかったけれど、ジャンヌが活動する事で両親の生活が良くなるなら——そう考えて行動してきた。

モビルアーマーと戦ってきたのも、アスガルドと交渉していたのも、総ては火星で暮らしている家族が幸せに暮らしていける事を望んでの事。もし、家族が本当に幸せに暮らしていけているのなら、きっとジャンヌはそこで足を止めたくなくなってしまふ。だが、それは赦されない事なのだ。これまでの戦いで犠牲にしてきた命と、これから犠牲にしていくであろう命のために。ジャンヌはまだ止まる事ができないのだ。

たとえば、アスガルドとアルマイルが一つになり、巨大な一つの組織としてまとまればジャンヌの存在など必要ではないとしても。ジャンヌは止まる事ができない。それはこれまで戦ってきた者とこれから戦う者に対する侮辱だからだ。彼らを先導した者として、ジャンヌは戦わなければならぬのだ。それが革命の乙女と呼ばれたジャンヌの唯一為すべき事だと信ずるが故に。たとえば、その果てが己の死だとしても――

「私は止まらない。止まる事など……出来る筈がない」

それが自分の罪であり、自分の贖罪なのだ。ジャンヌは信じている。シリウスの手を自分の額に当てながら、ジャンヌはそう呟いた。その姿を薄く目を開けたシリウスに聞かれているとも知らず、ジャンヌはただ神様に祈り続けていた。その姿に内心でため息を吐きつつ、シリウスは再び眠りについた。

そのまま眠り続けた翌日、シリウスは完全に感覚をアジャストさせた。栄養分が不足しているといえど、それは食事で補えば良い。そう思いながら身を起こそうとすると、手に違和感を感じた。そちらの方を見てみると、一度目を覚ました時と同じくジャンヌが手を握っていた。なんとか手を離させようと検討していると、ジャンヌが何やら呟いていた。

「……あ」

「……？」

「もう嫌……もう戦いたくなんてない。お父さんとお母さんの所に帰りたいよ……」

それはジャンヌの本音だった。鋼の意志に包まれたジャンヌ・ダルの

クという少女の本音。ごく当たり前に家族に愛され、ごく当たり前に家族を愛した一人の少女の、偽らざる本音。それを聞いたシリウスは無言でジャンヌを見つめていた。シリウスには彼女のように思う事ができないから、彼女にかけるべき言葉が分からない。

何故なら、シリウスもアグニカも記憶がある頃には既に闘争の毎日だったからだ。弱い奴は強い奴に搾取されるのが当たり前な世界で生きてきた。だからこそ、彼らには力が求められた。そこでアグニカは集団を支配するための暴力たる力を求め、シリウスは集団を率いるための知力という力を求めた。それ故に、戦うのが嫌という感情が分からないのだ。そんなシリウスをさておき、ジャンヌの寝言——本音は続く。

「本当は人の命を奪うような事をしたくない……誰かを死なせてしまうような事はしたくないの……だって、怖いんだもん。彼らが私の事を恨んでるんじゃないか、って……どうしても考えちゃう。私がいなければ……彼らは生きれたんじゃないかって……」

「……それは違う。あなたがいなければ精々死ぬ順番が変わったぐらいで、より大勢の人間が命を落としただろう。あなたは残された人々の命を救ったんだ」

「——でも、彼らが命を落とした事実は変わらない」

いつの間にか、ジャンヌは目を覚ましていた。その美しい瞳からは真珠の如き涙がこぼれ、その涙はベッドに落ちて染みを作った。しかし、そのような事も気にならない程今のジャンヌは感情的になっていた。普段はしないであろう行動——シリウスに抱きつき、涙ながらに言い始めた。

「これが、火星の人々のためになると信じていました。一人一人の力は小さくとも、皆の力が合わさればきつといい未来が訪れると……そのために頑張ってきました。そのために身をすり減らしてきました。そのために革命の乙女なんて似合わない称号を受け入れてきました」

「……………」

「私は皆のために頑張らないといけない。今も火星で苦しむ人々のた

めに、これまでの戦いでその身を散らしてしまった兵士の皆さんのために、これからの戦いで命を落としてしまうかもしれない人たちのために……私は挫ける事なんて許されたいんです……！」

「……そんな事、出来る訳がないだろうに」

「でも……っ!？」

これ以上口にするなとばかりに、シリウスはジャンヌの口を自分の口でふさいだ。シリウスの突然の奇行にジャンヌは目を見開いた。そこで真摯な瞳をジャンヌに向けているシリウスに気付いた。シリウスはジャンヌの言葉を理解しきれない。けれど、ジャンヌが無理をして頑張っていた事は分かるのだ。だからこそ、ジャンヌが自分自身の努力を否定する事が許せなかった。

確かに、ジャンヌの言う事は一理あるのかもしれない。ジャンヌが指揮をしたから死んだ人がいたのかもしれない。しかし、そんな想定は所詮IFでしかない。その者たちが死んだという事実は、決して覆らない。そんな意味もない事をするぐらいなら、彼女が救った人々の事を考えた方がよほど建設的だろう。

「あなたは、今生きている彼らを救った。本来、モビルアーマーっていうのはどれだけの戦力で挑んでも勝てないだろうってくらいの化け物なんだ。それをあなたは打倒した。その報せが、その事実が、どれだけ人々の心を勇気づけたか、君に分かるか？」

シリウスは覚えている。火星側がモビルアーマーを打倒したと聞いた時の人々の反応を。理不尽に、暴虐のような力で人々を蹂躪していた存在。そんな存在が斃された。それがどれだけ人々の心を勇気づけたか。モビルアーマーも所詮破壊できる機械でしかないのだと。そう世界に知らしめた彼女の偉業を、シリウスは知っている。

ジャンヌの頭を胸元に引き寄せ、シリウスは彼女を抱きしめた。自分は今此処にいるのだと、そう彼女に教えるために。抱きしめられたジャンヌは手をシリウスの左胸に当てた。心臓の鼓動が直に伝わり、ジャンヌは猛烈に泣きたくなくてきていた。

「君は頑張った。いや、君は頑張っている。だから、後は俺たちに任せておけ。君がもう頑張れないと言うのなら、俺たちが後を継ぐから。」

モビルアーマーを根絶やしにして、これから生きる人々の未来を俺たちの手で創ってみせるから……だから、泣き止んでくれ。俺は、君の涙なんて見たくないんだ」

男が頑張れるのは女性の笑顔のためだと、誰かが言った。守りたいと思わせてくれる大切な人の笑顔こそが、人の原動力になるのだと。その通りだと、シリウスは思った。だからこそ、彼女の涙など見たいなどとは思わなかった。自分の情けなさを教えられているようで、心苦しかった。自分の力のなさを告げられているような気さえしてくるのだから、不思議な物だ。

「俺は戦う事しか出来ない。仕事だって俺にとっては戦場みたいなものだ。家庭とか、そういう物が俺には分からない。誰からも愛された事のない人間だからな。だけど……そんな俺でも……君の涙を止める事ができるなら。どうか力になってやりたいと思うよ。だから、どうか泣き止んでくれ」

「……ふふっ、不器用なんですね」

「そうだな。大抵の事には器用な自信があつたんだが、女性の……いや、君の扱いにはほとんど自信を無くすよ。こんなに俺は無力だったのか、と唾然としてしまうからな」

「だったら……しばらく胸を貸してください。涙を見たくないというのなら……どうか聞きとげてください」

「君の涙を止める事すら出来ない、こんな無力な男の胸でも良ければ」それから暫くの間、ジャンヌはシリウスの胸元で涙を流し続けた。そして泣き終えた後、疲れ果てたのか再び眠りについた。今度は目端に涙の残りがあれど、確かな笑みを浮かべながら。目端の涙を拭いながら、シリウスはジャンヌをベッドに横たえる。そして服装を換え、食事をとる事にした。普段で考えられない量の食事をとると、シリウスは軽く連絡を取った。

そのまま数日程休みを確保したシリウスは久しぶりに穏やかな時間を過ごしていた。仕事から完全に離れた時間も久しぶりだ、と思いつつながらシリウスはメイドが出してくれた。コーヒーを飲みつつ新聞を読んでいた。普段は適当なニュースをBGM代わりに聞いている

だけだったので、懐かしい感覚にすらなっていた。

そんな感じで久しぶりの休みを体感していたシリウス。昼頃になると顔を真っ赤にしたジャンヌが既に席についていた。そんなジャンヌに使用人たちは首を傾げていたが、シリウスは気にすることなく昼食を食べ始めた。そしてジャンヌよりも先に食べ終わったシリウスは呆れながらコーヒーを飲んでいた。

「食べないんですか？冷めてしまいますよ」

「……よく堂々と食事を出来ますね。先ほど、あんな事をしておいて」「はて、そんな赤面するような事をしましたか？当たり前な行動をしただけだと思いますが」

「あ、アレが当たり前前なんですか!？」

「涙を流している女性を慰めるのは男の役目、とアグはよく言っていましたから。そうでなくとも、あなたがあんな姿をあれ以上みたいとは思いませんでしたから」

「そんなナンパ師みたいな言葉を堂々と……」

「俺は、あなたに対して自分の感情を偽るつもりはありません。俺がしたいと思ったからやっただけです。お気になさらず」

「そこで気にしなくて済むのなら、ここまで悩んでいません!」

「ハア……それで、何をそこまで悩んでいるんですか?」

「……あんな恥ずかしい姿を見られてしまいました。これでは私はどこにもお嫁になど行けません」

「ふむ、理由はよく分かりませんが……それで?」

「……分からないんですか?」

「俺に責任を取れ、という話ですか?そうは言われなくても、不可抗力に近い流れだったと思いますよ」

「うっ……」

「……それでも。俺があなたに対して責任を取らなければならないのなら——良いでしょう。どこにも嫁に行けないと言うのなら、ウチに来ればいい。私は少なくともそれを歓迎しましょう。他の者たちもそうでしょう」

シリウスは周りに立っているメイドや使用人たちに視線を向ける。

使用人たちもしきりに頷いており、意見の相違など一切見られなかった。しかし、それでも踏ん切りがつかないジャンヌの手をシリウスは掴んだ。ジャンヌは震えたが、シリウスはそんなジャンヌの挙動を無視した。

「俺はあなたを受け入れましょう。ジャンヌ・ダルクという少女の悩みを、後悔を、迷いを、苦しみを、悲しみを、辛さを、喜びを、楽しみを……あなたの総てを俺は受け入れましょう。では、あなたは？」
「えっ?」

「……俺はお世辞にも真つ当な出じゃありません。今の階級を除けば、スラム街で育った癖の強い男でしかない。真つ当に生きてきたあなたとは、どうしたって対等には立てない。そんな俺でも、あなたは受け入れる事ができますか?」

シリウスは自分の出自に対して自慢に思った事はない。誰だつて真つ当に生まれ、真つ当に生きられた方が良いに決まっている。戦いの中に身を置き、強者である事を強いられ続ける環境など間違っているのだ。そんな環境で生きてきたシリウスは、真つ当に生きている人物とはどうしたって釣り合わないと感じている。だからこそ、ジャンヌに問うのだ。こんな自分でも、あなたの傍に居ても良いのかと。しかし、その疑問はジャンヌにとっては愚問だった。

「ええ、もちろん。私は今ここにいるシリウス・ダルクという男性と共にありたいのです。それ以外の誰でもなく、今私の目の前で不安そうに私を見つめているあなたが、私は欲しい」

「受け入れる、ではなく欲しい、と来ましたか。これは俺も中々うかうかしてられないようだ」

「ええ、覚悟してください。あなたが私にどっぷりと溺れて抜け出せないぐらい、私はあなたを愛してみせますから」

この数日後、『アスガルド宰相』シリウス・ダルクと『革命の乙女』ジャンヌ・ダルクの電撃結婚が発表された。記者会見をした際、「これは彼女と私の競争の第一歩なんですよ」というシリウスの言葉は後々の研究者の間でも議題となったのであった。

厄祭戦・9

ジャンヌとシリウスの結婚報道後、やはりというか当たり前と云うべきか、アルタイル側では騒動になっていた。ジャンヌの側近である人々には伝えていたが、それ以外の人物は知らなかったのだから寧ろ当然とも言える。アスガルドとアルタイルの統一化も一時は破談の可能性すらあったほどだ。しかし、そこに待ったをかけたのがアグニカだった。

「お前ら、女が幸せを掴もうとしてるってのにいちやもん着けようってのか？ 情けない事してんじゃねえよ！ 一人の人間の幸せも祈れないで、誰かの命なんか守れるか？ 俺たちは子供に未来を渡すために戦つてんだろうが！ 寝惚けたことを宣つてんじゃねえよ！」

アグニカの言葉にアルタイルのトップたちは納得し、統一化作業は続行する事となった。シリウスも支障をきたさない範囲で活動し、無事にアスガルドとアルタイルの統一化は成功の一途を辿りつつあった。そんな中、とある目出度いニュースが世界中に響き渡った。――
――ジャンヌ・ダルクの懐妊である。

これはさしものシリウスも大慌て。すぐに仕事を切り上げ、自宅にいるジャンヌのもとに帰っていた。常に冷静沈着で仕事の手を抜く等ということは一切ないシリウスも、この時ばかりは人並みに慌てていたので部下たちも微笑ましいものを見る視線でシリウスを見ていた。それ以降もできる限りストレスにならないよう、仕事も定時で上がるといふ徹底ぶりだった。

数カ月前まで仕事の鬼だったシリウス・ダルクの姿はどこにもなく、そこにはただ愛する女の事を心配する一人の男がいるだけだった。そして、そんな風に思われている事も知らないシリウスとジャンヌはアグニカとその妻、サファイア・カイエルとお茶を飲んでいた。「それにしても時が経つのも早いもんだな。ついこないだまで迷っていた嬢ちゃんが今では宰相夫人で子供まで身籠ったなんてな。まったく何がどうなるか分からんもんだぜ」

「人の世の中なんて奇々怪々。何がどうなるかなんて俺たちには分か

らんさ。大体、お前らの時だつて似たようなもんだつたらうが。いきなり『俺たち、結婚するから』なんて言われた俺の気持ち分かるか？」

「あの時はご迷惑をおかけしました。シリウスさんには本当に色々とお世話をしていたいただき、感謝しています」

「それは別に構わないけどな。この馬鹿が迷惑をかけるのなんて分かりきってますから。こいつの我が儘に比べれば、あなたの世話をすることなんて迷惑のうちにも入りませんよ。それに、今はこっちが迷惑をかけている側ですから。どうぞ、お気になさらず」

「それにしても意外でした。アグニカさんって結婚されていたんですね」

「アスガルド創設前からな。公私ともにこの馬鹿を支えている影の立役者さ。元々は整備料の事務を担当している人だったんだけど、バエルの整備にも携わっていてな。その頃に知り合い、付き合い始めたという訳だ。他人の惚気話なんて聞く性分じゃないから、詳しいことは知らないがな」

それでも、実際にサファイアはとても有能な人間だった。基本的に暴力でしか物事を解決した事がないアグニカの緩衝役として機能している。アグニカを恨んで彼女に手を出した場合、アグニカだけでなくそれ以外の彼女に恩のある人々そいつらを締める。それはもう、友人がお前誰？と思わず言ってしまうほどに顔をしかたまを殴るところから始まる。

シリウスも彼女の書類処理能力は評価しており、是非とも自分の仕事を手伝ってほしいと何度か打診している程だ。シリウスに評価されるというのは、大変名誉がある事だ。しかし、それを理解している尚、彼女はアグニカのために尽くしている。そんな彼女を見て、さしものシリウスも誘う事はしなくなった。

「サファイアさんと結婚してもこの馬鹿は一切変わらないんだから、まったく困ったもんだぜ。俺はずっとこの馬鹿の思いつきに振り回されっぱなしだ」

「ふふっ、それがこの人の良いところですから。こちらが思いもしな

い事を思いついて、こちらを驚かせてくれる。そんな事してくれる人なんて、世界広しと言えどもこの人ぐらいの物ですよ」

「ハハハッ、それは確かに。この馬鹿の思いつきには迷惑をかけられまくっていますが、偶には役に立ちますからね。ジークフリートもこの馬鹿のおかげで完成したと言っても過言ではありません。誠に遺憾ではありますが、ね」

「見てくれよ、嬢ちゃん。俺の嫁、俺よりもシスの方が仲良さそうに見えるだろ？これがいつもの光景って言うんだから、ほんとアレだよな」

「ムムムツ……妻が目の前にいるって事を自覚しているんでしょうか？」

「もちろん。でも、話が合う女性っていうのは中々稀少なんだ。アスガルドは軍隊だから、元々男所帯なんだ。話の合う女性っていうのは中々稀少なんだよ。そうでなくても、その馬鹿に同じように振り回されている奴なんてイシューのアホを除けば彼女ぐらいなんだ。多少は勘弁してくれ」

「それは分かりますが……」

「心配しなくて問題ないさ。俺が他人に色目を使う事はないし、他人から色目を使われたとしても靡く事はないさ。それは彼女にしても同じ事。そもそも、俺たちはタイプが同じ過ぎて逆に合わないと思うぞ？」

シリウスもサファイアも、互いに誰かをサポートする事に向いている能力の持ち主だ。それが戦闘向きか、それともそうではないかの違いしかない。だからこそ、お互いに良い人だとは思っていても惹かれ合う事はない。精々、振り回してくる相手の無茶苦茶具合を共有できぬぐらいだろう。それ以上の関係にはお互いになり得ないと分かっている。

だからこそ、お互いに気楽に語り合う事が出来るのだ。お互いの経験から振り回されてしまう気苦労という物をよく理解している。良くも悪くも、アグニカは破天荒な人間だからこそそれに振り回される人間の心労や疲労は体験した者にしか分からない。

「まったく、困ったもんだ。少しは落ち着きを覚えて欲しいんだがね」
「その意見には同意しますけどね？ そうなってしまうた旦那様をイメージできますか？ 私から言わせれば、そんな人はアグニカ・カイエルとはとても呼べませんよ」

「これは一本取られたな。確かに、そんな殊勝な奴はアグニカ・カイエルとは言えないな」

「まったく、これだから人生バラ色みたいになった奴は困るぜ。こんな風に人をおちよくって遊んでくるんだからよ。綺麗な嫁さんも出来て、子供も生まれるとなれば完璧じゃねえか。あれ？ これってお前の死亡フラグじゃないか？」

「冗談拔かせよ。俺の最後は大往生って決まってるんだ。子供や孫に看取られて死にたいの。あんな天使もどきどもに殺されてたまるか。大体、俺が死んだらお前は書類の山で死ぬ事になるぞ？ 最高司令官の次に偉い宰相がサインしてるから、何とかなってるって事を忘れてないか？」

「ゲエ……嫌な事を言うなよ。戦い抜いた果てに死ぬならまだしも、書類の山に埋もれて死ぬなんてごめんだ。俺は本当にそういう仕事向いてないからな」

「じゃあ、俺が天使どもに殺されないように祈っとけ。って言うか、モビルアーマーを何体も殺した奴の弱点が書類って、それで良いのかよ？」

「うるせえな。適材適所って奴だよ。出来ねえ事して迷惑をかけるよ、出来る事で貢献した方が何倍もマシだろ」

「へえ、そんな風に思える程度の頭脳はあつたんだな」

「あのな、お前は俺を侮り過ぎだ！ 俺だってそのくらいは……」

「で、どうなんですか？ サファイアさん」

「ちよ、おい！」

「今のは主人の考えですよ。私は何も言ってません……ただちよつと騙しただけで」

「ええっ!? おい、サファイア！ 騙したってなんだよ！」

「だって、あなたが書類の仕事をしたりなんてしたら逆に手間がかか

りますし、私の仕事が無くなってしまいうじやないですか。そうなるのは困ります」

「まあ、勉強なんて30分も続かなかったしな。いつそ、呪いと言っても過言じゃないレベルで落ち着きがないよな」

「しよ、しようがねえだろ？字が連ねてあるだけの書類とか読んでるだけでストレス溜まるんだからよ。アレだったら、外に出てモビルアーマーを狩ってる方が万倍マシだぞ」

「それはそれでどうかと思うがな……」

十年來の親友のように三人は喋っていた。そこでハブられていたのはジャンヌだった。会話に混ざろうにも、独特の雰囲気や漂わせているので混ざりにくい。そんなジャンヌを見たサファイアは申し訳なきように頭を下げた。

「ごめんなさい、ジャンヌさん。私たちだけで盛り上がってしまった……」

「え、あ、いえ、気にしないでください！三人がこうして顔を合わせるのは久しぶりだと分かっていますから」

「いいえ、それはジャンヌさんを除け者にして良い理由にはなりません。久しぶりの再会を喜ぶ事はあなたを話に混ぜない理由にはなりませんから。そう、火星での話でも聞かせてもらえないかしら？」

「火星の話、ですか……？」

「ええ。私は生まれてこの方、地球から出たことがないの。だから、良ければ火星の生活を聞かせてもらえないかしら？この人はその辺り、本当に気が利かないから……」

「そんな事言われてもな……俺が立ち寄るのは火星にある基地ぐらいで、街中になんて寄らないんだから言っても仕方が無いだろ？」

「そこは地球で待つ妻のためにお土産の一つや二つはあっても良いでしょう？だって言うのに、あなたときたらモビルアーマーを何体殺したとかそんな話ばかりするんだから」

「……シリウスもそうなんですか？」

「うん、否定はできないな。でも、これは別に面倒くさいからという理由じゃないんだ。俺たちは部隊の責任者だから、基本的に基地から

出る事ができないんだ。お土産は俺の場合は部下に立て替えてもらってる」

「ほら、シリウス様も家族に対する心配りは忘れていませんよ。あなたも見習ったらどうですか？」

「そんな事言われてもな……何が良いかなんて俺にも分からないんだから、仕方がないだろ？」

「二人とも、その辺にしておけ。俺もジャンヌの火星時代は気になるんだ。騒いでも良いが、もう少し静かにしてくれ」

「あ、あはははは……」

それから、ジャンヌの話は続き最後まで話す頃にはジャンヌとサファイアの仲はとても良い物になっていた。それを見たシリウスとアグニカは内心で安堵の息を吐いていた。ダルク家宅とカイエル家宅は隣近所だ。ないとは思っているが、不仲になったりしたら大変な事になる。どちらも妻を信頼しているとはいえ、心配なものは心配なのだ。

「あの、失礼だと承知していますが、訊いても良いでしょうか？」

「はい、何でしょう？」

「お二人は子供を作ったりはなさらないのですか？」

「ジャンヌ、それは……！」

「……作らないんじゃないよ。作れないんだよ。他ならない俺のせいだな」

シリウスは思わずジャンヌを止めようとしたが、先にアグニカが話してしまった。アグニカにその事実を言わせてしまった事に、シリウスは苦々しい表情を浮かべた。その表情の意味は分からなかったが、アグニカの言葉を聞いた瞬間に自分が何を訊いたのかを理解した。

「……え？」

「……アグには精子がないんだ。子供を作るために必要な物が無い。今の科学でも無いものを生み出すことは難しい。それが遺伝子的なものになれば、尚更のことだ」

「ご、ゴメンなさい！私、失礼な事を言ってしまった……」

「いいのよ、ジャンヌさん。私は、いいえ、私たちはそれでも幸せなんだから。確かに子供を産めないことは残念だと思う。でもね？他人の精子を私の子宮に入れるなんて、私は絶対にしたくない。だって私が愛したのは、アグニカ・カイエルだけだもの」

「それは……そうですね。私も旦那様以外の子供なんて産みたいと思いません。たとえば、どれだけ子供が好きだったとしても、この人以外の子供は嫌なんです」

「そう、私も同意見よ。私もこの人以外の人の子を孕みたくなんてない。この人を愛しているから、それ以外の人にはまったく興味が無いの。この人と一緒になる事に意味があるんだから、それ以外の事なんて些事ではないわ。だから、この事に関してはこれ以上気にしないでちょうだい」

「はい……ありがとうございます。お詫びではありませんが、火星からお中元が届いているんです。干し果物ですので、きつとこのお茶にも合うと思うんです。取ってきますから、待っていて貰えますか？」

「私も行きますよ。妊婦を一人で動かす訳にはいかないわ」

二人が仲良く歩いていく姿を暫く眺めた後、シリウスはアグニカに視線を向けた。あの二人は二人にとっては日常の象徴なので、仕事の話も二人の目の前でするつもりは一切なかった。だからこそ、シリウスの視線が仕事の話だとアグニカは理解していた。

「そろそろ、アルマイルとの交渉が終わる。おそらく、当初の予定通りに進むだろう。数ヶ月ほどすれば、記者会見を開いて統合の発表を行う。それと同時に智天使搜索のための人海作戦を開始する。俺たちも同時に智天使討伐を開始する事になるが……準備は良いか？」

「……やっとか。中々時間がかかったもんだな」

「準備つてのは時間がかかるもんだ。その代わり……戦うのは一瞬だ。あいつら全員をぶち殺せ。バエルの、俺たちの命の輝きをモビルアーマーどもに見せつけてやれ」

「ああ、もちろんだ——モビルアーマーどもは根絶やしだ」

その時、アグニカが浮かべた笑みは先程までお茶会で浮かべていた優しい笑みとは違う、獣如き獰猛な笑みだった。そしてそれを見てい

たシリウスが浮かべていた笑みもまた、
獰猛な物だった。

厄祭戦・10

「モビルアーマーとの戦い……厄祭戦と呼ばれるこの戦争が開始してから既に地球や火星、月にコロニー……半分以上の人々がモビルアーマーの犠牲になった。我々は彼らの遺志を無為にしてはいけない。これから生まれ、生きていく子供たちにこれ以上の地獄を味合わせはならない！そのためには、最早地球や火星という枠組みに縛られていてはいけない。」

我々は、地球圏独立治安維持組織アスガルドと火星圏独立治安維持組織アルタイルの統合を——ギャラルホルンの設立を、ここに宣言する！同時に、我々はモビルアーマーに対する総力戦を此処に宣言する！我々は民衆諸君らに約束しよう！我々は必ずや、モビルアーマーを一体残らず掃討する事を！」

厄祭戦が始まってから五年の月日を経て、アスガルドとアルタイルは共に歩むことを決めた。世界治安維持組織であるギャラルホルンがこの世に誕生。同時に行われた総力戦宣言により、ギャラルホルンはその総力を持って智天使たちの討伐作戦を開始した。人の数を利用した人海戦術により、エイハブ・リアクターの放置されたデブリ帯に隠れていた智天使を発見。これを討伐した。

プルーマによる物量戦が停止した事によって、地球圏と火星圏の治安は瞬く間に回復した。モビルアーマーの散発的な活動もギャラルホルン内に新設された月外縁軌道統合艦隊《アリアンロッド》と地球外縁軌道統制統合艦隊の活動によって、コロニーで生活している人々の安全も確保されつつあった。

「現在、地球圏と火星圏を始めた圏外圏の治安は急速に回復しつつあります。先日のバクラザン公の討伐されたモビルアーマーによって、開発された総数の四割を切ったそうです。このままであれば、十年以内にモビルアーマーは討伐される見込みです」

「このままであれば、か……本当にそう思うか？」

「モビルアーマーどもがそんな自然的な消滅を良しとするのであれば、我々はここまで彼奴等に苦しめられる事はなかったでしょう。間

違いなく、もう一悶着あるものと考えます」

「やはり、か……これまでのモビルアーマーの討伐箇所をレポートに
してまとめおいて貰えるか？どうも嫌な予感がするんだ」

「かしこまりました。急ぎでご用意させていただきます」

「急ぐ必要はないが、なるべく早めで頼む。下手な事があってもらっ
ては困るからな」

「はっ、了解いたしました」

シリウスは書類を片付けながら、指令を下していく。次々とこなさ
れていく書類の中で、シリウスはどうにも不安が絶えなかった。まず
間違いなく、これからモビルアーマーとの戦闘では間違いなく、激闘
と呼ばれる物が存在するとシリウスは考えていた。何故なら、まだモ
ビルアーマーたちのトップ——《セラフ》が戦場に現れていない
からだ。

モビルアーマーの中でもトップクラスの能力を持っている《セラ
フ》。今までその存在は確認されていないが、それぞれの軍部で開発
された天使たちの資料にしっかりと記載されている。それぞれの戦
闘力は記載されていないが、スペックから鑑みるに実に厄介な存在で
あると認識している。それは五年経ってもまだ一度も発見を赦して
いないという所からも明らかかもしれないが。

「決戦兵装の使い心地はどうだ？」

『一般兵士たちが使う分には実に使える物と認識しております。後は
ガンダムやヴァルキュリアのパイロットたちとの連携を考える必要
がありそうです』

「分かった。引き続き、そちらはモビルアーマー専用の決戦兵装の開
発を急がせろ。相手がどんな手段を取ってくるか分からない以上、い
くら用心してもし足りないという事はないだろうからな」

『はい。このまま開発と練度の向上に努めさせていただきます』

「そう言えば、君の名前はウォーレンで良かったかな？確か、アスタロ
トを預けたパイロットだと記憶しているが使い勝手はどうだ？」

『問題なく稼働しております。ただ、セブンスターズの方々の様に上
手く扱えている自信はありません』

「はははっ、それは仕方があるまい。俺たちは君よりもはるか前からガンダムに触れているんだ。当然慣れという物もある。それにこのシステムは慣れない方が身のためという物さ」

『そうでしょうか?』

「ああ。迷惑をかけたな。もう良いぞ」

『はっ、失礼させていただきます』

通信が切れると、シリウスは立ち上がって外を眺めていた。真っ青な空がそこにあり、その向こうではモビルアーマー討伐部隊とモビルアーマーの苛烈な戦いが繰り広げられているとは思えないぐらい、平和な青空だった。その空をシリウスはじつと見つめていた。そして掌に視線を落とし、じつと見つめていた。

シリウスは遠征に同行してジークフリートに搭乗して戦っている。その度に自分の身体がジークフリートに侵食されているような気がしていた。正確に言えば、ジークフリートの元となったアガレスにと言った方が正しいだろう。ジークフリートは装甲もフレームも異なるとはいえ、その機体を動かしているのはアガレスのリアクターなのだから。

悪竜の血を取り込む事で英雄となったジークフリートの様に、シリウスも悪魔の力をその身に宿すジークフリートと一体化する毎に、そちらに近付いているような気がしていた。それぐらい身体の調子が乗る前と後では異なっているのだ。もちろん、実際に身体能力が変化している訳ではない。しかし、充実度とでも言うべき物が桁違いな物になっているのだ。まるで、本当に人の身から離れているような――

「……今更か、そんな事は」

天使^悪どもを皆殺しにする為に、俺は力を求めた。そうであるのなら、ただの人のままでいられる訳がない。人の枠から外れなければ、あんな化け物どもを皆殺しになど出来る訳がない。そうであると定め、そうであろうと決めた以上は進む以外に道は存在しない。シリウスはそう思っていた。事実として、彼は人ではなくとも化け物ではない。

帰るべき場所がある。戻るべき場所がある以上、シリウスは自分を自制する術を知っている。本当に踏み越えてはいけくない一線を踏み越えずに耐え抜く覚悟を、シリウスは持っているのだから。だからこそ、彼は致命的な間違いを起こす事はないだろう——そう、彼は。『宰相閣下、奥様がお見えになつておられます』

「うん？ああ、もうそんな時間か。分かった。これから向かうから応接間の方に通しておいてくれ」

ジャンヌは昼時になるとシリウスのために弁当を持って訪れていた。シリウスが本当に朝早くから家を出る必要があるため、弁当の類を持っていない。結婚する前は食堂などで適当に済ませていたが、結婚した後は「そんな健康的じゃない生活は駄目です！」とジャンヌにダメ出しをくらった。なので、ジャンヌが用意した弁当と一緒に食べるのがシリウスの日課になっていた。

「待たせたか？」

「いいえ、大丈夫ですよ。シエルも先程までは起きていたんですけど……」

「いいよ、気にするな。まだ生まれたばかりなんだから、そこまで頑張らせる必要はないさ。来てくれただけでも有難いさ」

シエル・ダルク。シリウスとジャンヌの間に生まれた子供であり、生後半年程度のまだまだ世話のかかるお年頃の赤ん坊だ。シリウスが初めてシエルを抱きしめた時、思わず涙を流してしまいアグニカに揶揄われながらも幸せを感じていた。親に捨てられた自分が親になる、というのは中々に来るものがあるんだなとシリウスは思っていた。

まだぷにぷになシエルの頬を撫で、ソファに座り込みジャンヌが用意した弁当を手取る。おかずの一つ一つを丁寧に味わい、そこに籠もっている感情も咀嚼するように噛みしめる。本当にジャンヌの事を考えていると理解しているので、ジャンヌも黙って見つめていた。そして食べ終わると、ジャンヌの胸元の抱っこ紐に吊るされているシエルを抱きかかえる。

「それにしても、こういう事をした事がないからよく分からんが、これ

で合ってるのか？」

「ええ。あなたは立派にお父さんしていますよ」

「……そうか。俺もそういう存在になったんだな。何とも感慨深いものがあるよ。この子も本当に可愛らしい。願わくば、お前似であってほしいな。俺に似たら暴力的な性格になってしまいかもしれないからな」

「別にそれでも構いませんよ。きっとあなたに似たら賢い子になりますから。より大勢の人を導く……そんな子になってくれる事でしよう」

「……そうだと良いんだがな。俺みたいな奴よりはジャンヌみたいなのが美人さんになって欲しいと俺は思うがね。娘にはそう願うのが当たり前だと思うぞ？」

その時のシリウスの顔は、一緒に働いている人間は思わず目を疑ってしまう程に穏やかな物だった。手つきは柔らかく、シエルを見つめる眼差しは慈愛に満ち溢れていた。ふと時計に視線を向けると、ため息混じりにシエルをジャンヌに渡した。昼休みが終わる時間に差し掛かっていたので。本当に名残惜しそうにしていたが、何とかジャンヌに手渡していた。本当に口惜しそうにしているシリウスの姿にジャンヌは苦笑を浮かべていた。

ギャラルホルン内において、トップは最高司令官であるアグニカ・カイエル。次に宰相のシリウス・ダルク。その次にセブンスターズと続き、七星番外家としてダルク家が機能している。本来、この役職は兼任する事ができないのだが、ジャンヌに子育てに専念してもらいうためにシリウスは宰相としての仕事とダルク家当主としての仕事を兼任している。

そのため、シリウスの忙しさは他家の比ではない。にも関わらず、定時で総ての仕事を終えてしまうという辺りがシリウスの優秀さを証明している。しかも、飲み会の類もほぼ参加しない上に朝帰りなどまずあり得ないという生活を送っている辺り、家族に対する愛情はかなり深い。それを周りも理解しているので、基本的に飲み会に誘う事がない。精々、新年会や忘年会などの季節の節目に誘うぐらいだろ

う。

「ダルク公、歓談中に失礼します。会議の時間ですので、参上いたしました」

「……ああ、今行く。誰か、ジャンヌたちが帰るから車を出してやってくれ」

「大丈夫ですよ。偶にはゆったりと歩いて帰ります。それに、SPの方々も一緒ですから」

「……そうか？ いや、やっぱり車には乗っていけ。下手な事を考える奴はどこにでもいるからな。お前やシエルに万が一があつては、俺も気が気ではいられないだろうからな」

「……心配性ですね。分かりました。それではご厚意に預らせていただきます」

「そうしてくれ。……また後でな、シエル」

「あう……パアパ」

シエルが言った言葉にシリウスは思わず目を開き、ジャンヌを見た。ジャンヌ自身も驚いていたが、それ以上に驚いていたシリウスを見て笑みを浮かべた。それぐらい、シリウスの顔は驚きに満ちていたからだ。

「あら……パパですって。良かったですね」

「……ああ、そうだな。それじゃあ、行ってくる」

「行ってらっしゃい。シエルと一緒に待っていますね」

「頼んだ。俺は俺の仕事を果たすとするさ」

シリウスはジャンヌとシエルから離れ、部下を引き連れて会議室に向かった。これは最高司令官から七星番外家の当主がそれぞれの現状を報告する場となっており、基本的には各家の当主同士による話し合いとなっている。定期報告を含め、話を聞いた宰相が情報を纏めて各支部に命令するようになっていた。その定期報告会議が今から行われようとしていた。

「さて、それでは定期報告会議を始める訳だが……あの馬鹿はどこへ行った？ 確か、遠征部隊は火星で補給を受けている筈だろう？」

定期報告会議と言っても、基本的に宇宙を飛び回っている人間が多

い。なので、何人かはいない事が多く、その場合はテレビ会議となる場合が多い。最近ではほとんどそうであり、全員揃っている事などま
ず無いと言って良い程に忙しい。それでも、基本的に全員揃って行っ
ているのだ。しかし、その場にアグニカは訪れなかった。

『そ、それが……私に任せたと行って火星の街に降りてしまつて』

「はあ？世界に名だたるギャラルホルンの最高司令官だぞ!? そんな呑
気な事をしていて良い訳がないだろう！即刻、連れ戻せ！どうせ、そ
の辺で買い食いをしているかお土産を買っているぐらいだろうからな
！」

『は、はい！すぐに命令します！』

「まったく……あいつは自分が世界でもトップクラスで偉い立場につ
いているという自覚があるのか……？」

シリウスは思わず額を抑える。最高司令官なんていう立場につい
ても、アグニカは相変わらずだったからだ。良い大人なのだから、も
う少し大人しくなってほしいと心底思っていた。欲を言うなら、もう
ちよつとこちらの言う事も聞いて欲しいと思つている。そんな事は
あり得ないんだろうけどなあ……とため息を吐いているシリウスに
その場にいたセブンスターズたちは合掌していた。

アグニカが戻るまでの間に他のセブンスターズたちの定期報告を
聞き、会議を続けていた。すると、画面の向こうが騒がしくなってい
た。その声にシリウスは顔を歪めた。部下に引きずられる形でアグ
ニカが会議室の席に座らされていた。

『なんだよ、クジヤンがいれば俺必要ないじゃん……』

「そういう問題じゃねえだろうが。一組織のトップともあろう者が会
議をサボるな。嫁さんにまたどやさされるぞ。言つておくが、今回は
庇つてやらねえからな」

『そうは言うけどさ……一体何を話すつて言うんだよ。いつも通り、
遠征に出てこれから数週間ほど火星圏のパトロールをする。これぐ
らいしか言う事ないんだぜ？それぐらいの報告なら、クジヤンだけで
良いじゃん』

「こういうのはする事に意味があるんだ。お前は雑把だからそん

けしか言う事がないだけだろ。それで、実際のところはどうかだっただけだ？クジヤン公」

『はい、火星支部の人間に話を聞いてみたところ、付近にあるデブリ帯で何やら怪しい動きアリという事です。おそらく、海賊組織が根城にしている可能性があります。……これは勘になります、周囲にモビルアーマーの気配を感じた者がいるそうです』

「ほう……？そのパイロットと言うのは？」

『火星支部でパイロットをしている新月・オーガスという人物です。現在はバルバトスを操縦しているようです。火星支部でも指折りの実力者という話です』

『へえ、バエル以外で唯一残るファーストシリーズのガンダムのパイロットか。それで、どう思う？こいつは当たりか、それとも外れか』
「私見で言えば、恐らく当たりだろうな。その宙域には間違いなくモビルアーマーがいる。しかも、エイハブウェーブの磁気嵐を貫通してくるほどの気配……いるならば間違いなく大物だ。クジヤン公、決戦兵装の使用を許可する。総力を持ってモビルアーマーを潰せ」

『よろしいのですか？』

「構わないさ。バルバトスに気に入られるパイロット……間違いなく、感覚器官はかなりの物だろう。ジークフリートではないが、人間よりも獣に近いからなバルバトスは」

『了解いたしました。それではすぐに準備に移らせます』

「頼んだぞ。アグもあんまり遊んでないでクジヤン公を手伝ってやれ。お前とバエルの待つ闘争はすぐそこだ。それまで大人しく待っている」

『……ああ、分かった。その後は好きにして良いんだろ？』

「大物が相手だった場合、補給は必要だろうからな。修理の邪魔にならないなら好きにしている」

『了解。さて、どんな奴かな？』

そう言いながら、アグニカは通信を切った。真っ暗になった画面を凝視しながら、シリウスは次の作戦を考え始めていた。モビルアーマーの動きから推測し、奴らが何をしようとしているのかを考えてい

た。嫌な考えが一つだけ浮かんだもの、まさかそれは……と思い思考から外した。よもやその思考が当たっているとは、この時のシリウスは気付く由もなかった。

定期報告会議の数日後、アグニカとニースはデブリ帯を艦で突っ切りながら進んでいた。その隣ではデブリ帯に不審な気配を感じたという新月・オーガスが後ろに控えていた。楽しげにしているアグニカとデブリ帯をじっと見つめているニースの事をぼんやりと見つめていた。

火星支部の人間にとって、セブンスターズの面々など会う機会などそうはない。彼らからすれば、セブンスターズは雲の上の存在に等しい。ましてや、ギャラルホルンのトップであるアグニカ・カイエルと会う機会などある筈がない。だからこそ、二人がどういう人物であるのか新月はよく分かっている。

ニースは実直で部下の人々も彼らの許では実に楽しそうに仕事をしていた。おそらく、彼の性格がそんな空気を生み出しているのだろう。実直且つ素直な性格であるが故に、彼らはニースを支えようと努力をしている。それは分かった。しかし、新月はアグニカの事を理解しきれていなかった。

「うん？どうかしたのか、オーガス？」

「……いえ、何故私はここにいるのかと思っただけです」

「そりゃあ、発見したっていうお前がないとどれがお前の言っている奴なのか分かんないだろ？そうでなくても、俺は個人的に気になってるんだよな……シスがあそこまで言ったバルバトスに乗っているお前の事がな」

アグニカは獣じみた笑みを浮かべながら、新月を見た。その笑みを見た瞬間、新月はアグニカの事を同類であると理解した。即ち、どこまでも貪欲に力を求める獣としての習性を持っている。だからこそ、互いに分かり合えない事を理解した。何故なら、どちらも貪欲に力を求める獣の王であり、相手に勝つためなら何の躊躇いもなく身体を切り売りする事ができる人間だ。意見がぶつかり合えば、殺し合う以外に道はない。

お互いにそれを理解したからこそ、アグニカの握手に新月は応じ

た。少なくとも、現段階においては新月にアグニカに勝利する術がない。バエルはバルバトスよりも上位に立つ存在であるという事を新月は認めていた。格とかそういう話ではなく、純粋に実力がバエルの方が上なのだ。

しかし、それは当然だ。シリウスはバルバトスを後のガンダム・フレームの基礎となるように作り上げた。バエルをアグニカの要望通りのピーキーな機体として作り上げた。そもそもとしての機体性能に差が生じてしまう事は無理らしからぬ事なのだ。だから――――諦められる訳がない。

確かに、バルバトスは平均的な機体だ。それは事実として受け入れなければならない。しかし、平均的な機体が専用に使われたピーキーな機体に劣るといふのなら、後付けでも良いから尖らせれば良いだけの事だ。新月・オーガスという男の専用機として作り上げれば良いのだ。そうすれば、後はアグニカと新月の力量差だけになる。そこから先は幾らでも喰らいつきようがある。

「フハツ……面白いな、お前。折角だ、俺と競争といこうじゃないか、新月・オーガス。シス曰く、ここに潜んでいるであろうモビルアーマーは相当な大物らしい。獣は獣らしく狩りに興じるとしようじゃないか」

「……望むところです。しかし、カリエル閣下」

「なんだ？」

「……別に先に殺しても良いんですよね？」

その言葉に。ギャラルホルンの大英雄であるアグニカ・カリエルに対して喧嘩を売っていると思えない言葉に、その場にいた者たちは身体を強張らせた。長い付き合いであるニースですら、アグニカは間違いなく怒っていると思った。それはアグニカの根底に舐められるのを嫌う感情があるからだ。王としてのプライドとでも呼ぶべき物が彼にはある。

「クハ、ハハハハハハッ！お前は面白いな、オーガス！お前のような面白い男が火星にいるとは思わなかった。どうだ？お前が望むんだったら、俺の側近にやってもらいたいぞ？」

「要りません。多分、俺に地球の空気は合わないと思います」

「確かに。それはそうかもしれないな。ああ、楽しみだな。今回の遠征は中々俺を楽しませてくれる」

だからこそ、ニースは驚いた。あのアグニカが笑ったのだ。喧嘩を売っているような言葉に対して。普段であれば自分の眼と耳を疑ってしまう事態に困惑しきり、遠征終了後にシリウスにこの話をしていった。しかし、シリウスはあまり驚いていなかった。

「まあ、それはアレだ。相当気に入ったんだろうな、そのバルバトスのパイロット。あいつは自分が気に入った奴に対しては寛容になるんだよ。俺とかが良い例さ。思いつきりあいつに喧嘩を売るような発言をしても、あいつ怒らないだろ？それと同じ事さ」

「そ、そんな簡単な理屈なのですか……？」

「あいつが小難しい理屈で動くもんか。動物的な本能の持ち主だからな……何かが琴線に触れたんだろ。そう言えば、バルバトスの改造要求が来てたな。俺も一回、火星に行つて会った方が良いかな？アグの奴も面白いってゲラゲラ笑つてたし、ちよつと気になるな」

ちなみに、その時はシリウスが仕事をしている真つ最中にゲラゲラ笑っていたので、イラつとしたシリウスがレバーブローを叩きこんで呼吸困難の状態に追い込んで部屋の外に投げ捨てた。仕事が終わった後、取っ組み合いの喧嘩になるまでが一セットで、最終的にはジャンヌとサファイアのコンビに説教されていた。

閑話休題。

デブリ帯を突っ切っている真つ最中に何かが視界の端によぎった。それが何かと思つた瞬間、アグニカと新月は我先にと言わんばかりにブリッジを出た。それと同時に、それが何であるのか理解したニースはすぐさま戦艦を戦闘モードへ移行させてブリッジを収納した。

「まさか、こんな辺境で発見する事になるとはな……ルシフェル！」

百機近く開発されたモビルアーマーの中でも、上から数えた方が早いスペックを誇る機体。《セラフ》に追随する実力を持ち、黒を基調にしながら金色の意匠という派手な機体であるにも関わらず今まで発見される事はなかった。それは即ち、発見した者が皆悉く殺されてき

たという事に他ならない。

それほどまでに極まった性能を誇っているのが、ルシフェルという伝承におけるミカエルよりも前の天使長の座に着いていたモビルアーマーなのだ。はつきり言って、ここにいる戦力だけで討ち取れるか甚だ疑問な相手ではある。しかし、幸運にも彼らには希望があった。

「ハハハハッ！天使長の癖に人間に嫉妬して墮天した天使か！どうせ醜い事には変わりないんだから、このまま死ねよ！」

「……邪魔」

二体の悪魔がそれぞれの獲物を振り回しながら、ブルーマを薙ぎ払っていく。一緒に発進したヴァルキュリア、ゲイレールにロディやヘキサたちが援護していく。順調に思えたルシフェル戦だったが、何かの閃光がモビルスーツ隊を薙ぎ払った。それはビームを刃状に変形させ、モビルスーツ隊の武装に始まり果てにはナノラミネートアーマーすら両断してみせた。

「馬鹿な……ビーム兵器でナノラミネートアーマーを両断するだど!?」

ナノラミネートアーマーはビーム兵器による攻撃を塗料の鏡面効果によって拡散・反射させている。しかし、長時間高熱にさらされた場合は塗膜自体が融解してしまう。それを利用してルシフェルは刃状のビームを何重にも重ねがけし、短時間でナノラミネートアーマーの許容限界以上の熱量を叩きこむ事で塗料を引き剥がして機体を破壊してみせた。

その理屈を直感で理解したアグニカと新月はすぐさま動き始めた。ナノラミネートアーマーの限界熱量を短時間で埋めてくるのなら、一発受けた段階で終わりだと判断したのだ。即ち、ルシフェルのビーム兵器による攻撃を総て躲した上でルシフェルを殺しきらなくてはいけないのだ。普通の人間なら諦めてしまう所だが、残念なことに彼らは普通の人間ではなかった。

「攻撃を一発も喰らわずにあいつを殺す……単純で簡単な理屈だろうが！」

「殺せば皆同じ事」

二人は獣じみた本能でビーム兵器の総てを掻い潜り、ルシフェルに近づく事に成功した。しかし、近づく事ができても安心できる要素は欠片もなかった。翼からハシユマルよりも小型ではあるものの、ワイヤー付きのブレードが八本同時に二人を襲う。更にそのブレードを操りながら、同時に腕部からエネルギー弾を叩きこんでくる。それに加えて、ビーム刃も嵐のように振り抜かれていく。

二人は即座にガンダムとの同調率を上げ、総てを躲していく。ワイヤー付きのブレードは武器で弾き、エネルギー弾は腕が向けられた瞬間に殴るか蹴って砲身をずらし、ビーム刃は最小限の動きだけで躲していく。それだけの動きをしても尚、ルシフェルに攻撃する事ができていない。あまりの難易度の高さに、アグニカも新月も笑みを浮かべていた。

食いでのある獲物が来たのと、二匹の獣は歓喜の声を挙げる。その声に反応するように、二体の悪魔は力を授ける。目の前の敵を殺せと、憎き天使を一匹残らず根絶やしにしようと、隣に立つ憎たらしい悪魔に負ける事など赦さないと、そう叫んでいるかのように。獣もまた悪魔の声に同意し、こいつを殺すための力を寄越せと叫ぶ。

結果、更に同調率は上がり、悪魔に魂総てを捧げる寸前まで売られた肉体は最早機械なくして動かす事は叶わないだろう。しかし、その代わりに彼らの力は最大限まで引き上げられている。更に繊細な動きと強力な力、獣じみた本能や直感を発揮する。劣勢だった形勢は瞬く間に五分の領域まで引き上げられた。

「は、ハハハハッ！ここまでやって五分か！何とも素晴らしい力だな！じゃあ、ここでお前を殺せば俺はもつと強くなれるって事だよなあ！！」

「ルシフェルだか何だか知らないけど、俺の邪魔をするなら叩き潰す。これ以上、俺たちの邪魔をするなよ機械天使風情が……！」

アグニカは歓喜を、新月は憎悪の感情をルシフェルにぶつける。たった二人だ。別に何十億人の意志と対峙している訳ではない。ガンダムに乗っているだけの二人なのだ。しかし、そんな二人の強烈に

して苛烈な意志にルシフェルは押されていた。まるで人間総てと戦っているかのような、そんな感覚を味あわされていた。その時、感情などモビルアーマーが確かに感じたのだ——恐怖という感情を。

瞳を紅く輝かせる悪魔が一步ずつ距離を詰めていく。次第にモビルアーマーの思考は周囲の敵よりも目の前にいるバエルとバルバトスに集中し始めた。それによって攻撃はさらに激しくなったが、遠征部隊の負担は軽減された。この隙を突き、ニースは決戦兵装の準備を始めた。活動を継続させながら、我先に敵を殺そうとするバエルとバルバトスを見た。

「これが悪魔の力……改めて見ると恐ろしい物だ」

同調率を上げたパイロットは全能の力を得たような気分になる。究極の個としてあるからこそ、頭の中から仲間という存在が消えている。天使を殺すのは俺だと、そういう思考に捕われる事で圧倒的な暴力で敵を圧倒しにかかる。自分こそが天使を殺すのだ、というガンダムの思念に吞まれてしまうのだ。だからこそ、あそこにいる二人はきつとお互いの事を認識していないのだろうとニースは思った。

「ニース様、ダインスレイブ・テイルヴィング部隊の準備が完了しました！」

「よし、ではそのまま待機！あの二人の隙を搔い潜って叩きこむぞ！発射の合図は私がする！遅れるなよ！」

『はっー！』

アグニカも新月も後方の部隊の動きは分かっていた。正確に言えば、後ろで何やら準備を始めているというのを理解しているだけだ。それが何であるのかは理解していないし、理解する気もない。だが、向こうがこちらの動きを待っている事は伝わってきた。バエルとバルバトスは一瞬だけ互いを見て、即座に選択した。

一度、距離を縮めるように踏み込みモビルアーマーを警戒させ、即座にスラスターを噴射させて距離を取った。バエルとバルバトスの行動の意味を理解しきれなかったルシフェルは一瞬、完全に動きを止めた。そして、更に後方にあるニースたちの方を向いた瞬間にはもう

遅かった。

「ダインスレイブ・テイルヴィング隊、放て！」

放たれた決戦兵装は二つ。艦隊のナノラミネートアーマーすらも貫通させるほどの威力を持つダインスレイブ。そしてアスタロトの兵装であるγナノラミネートソードを利用した、フレームごとナノラミネートアーマーを切断するテイルヴィング。この二つの決戦兵装により、ルシフェルはボロボロな状態に——なっちはいなかった。

「なにっ……ブルーマどもを盾にしたのか!?!」

ルシフェルの周りには何十体ものブルーマが浮いており、その総てが真っ二つに割れているかダインスレイブで団子のようになっており、身代わりにしたのが伺えた。しかし、その総てをどうにかできた訳ではないのか、片翼は使い物にならなくなっていた。だが、だからと言って次弾を装填している暇はない。ルシフェルは翼と口を開いてビームを発射しようとした瞬間、後ろからバエルが剣を使い物にならなくなっていた片翼に振り下ろした。

その衝撃によって姿勢制御の狂ったルシフェルは明後日の方向にビームを発射した。その隙を逃さぬように、バルバトスとバエルはルシフェルに猛攻を仕掛けた。ルシフェルも何とか対応しようとするが、姿勢制御プログラムでは賄いきれない程に損傷した機体では先ほどのような攻撃は出来ない。対して、バエルとバルバトスの猛攻は納まる処か烈しくなる一方だった。

誰もがこれは勝ったと思つた瞬間、ルシフェルは意地でも一人は道連れにするといわんばかりの執念を見せた。崩れた姿勢からバルバトスを掴み、そのままコックピットを押し潰そうとしたのだ。無論、バルバトスもそのままだった訳ではなく、手に持っていたナイフを顔面に突き刺した。しかし、浅くしか刺さらず奥にある中枢コンピュータまでは届かなかった。

あわや一卷の終わりかと思つた瞬間、ルシフェルに一発の銃弾が直撃した。またも体勢が崩れた。その瞬間を突くように、バエルがルシフェルに迫る。剣を振り降ろそうとした瞬間、片翼からブレードが放たれ

て弾かれる。しかし、それに構う事無くまるで一昔前に存在した仮面をつけたバイク乗りのように蹴りつけた。そこにあつたのは先ほどバルバトスが突き刺したナイフだった。

ブーストをかけられた蹴りで浅かったナイフも深くまで突き刺さり、それによつて中枢コンピュータを真つ二つにされたモビルアーマー《ルシフェル》は活動を停止した。そして倒れているバルバトスを見下ろしながら、バエル——アグニカは笑みを浮かべた。

「攻撃つてのはああいう風にするんだよ。中途半端は駄目だぜ？ああやつて相手に行動する余裕を与えちゃうからな」

「……………」

「……………なんだよ、気絶してんのか。まあ、まだまだ機体に振り回されているようだし、そんなもんか」

バエルがバルバトスを抱え上げると、母艦に向かった。ほぼ無傷に等しいバエルと違い、バルバトスは各部に損傷が生まれており実力の差を露わにしていた。アグニカにはバエルを抱えて連れ帰れるだけの余裕があつたが、新月は何もすることは出来ない。互いの間にある格差という物を、新月は見せつけられた気分だった。

そう、新月は気絶している訳ではなく口を開くだけの力も残されていないだけなのだ。だからこそ、言葉にできないが悔しいという感情を味わっていた。同時にこれでは終わらないと強く誓っていた。一先ずバルバトスの改造要請を真つ先にしようと思っていた。

ニースはルシフェル討伐の報告を聞き、一安心していた。整備班と救護班をモビルスーツデッキに向かわせ、モビルスーツ隊にルシフェルの残骸の回収に向かわせるように命令すると、疲れたと言いながらガンダム・ストラスの銃口を下げ肺に溜まった息を吐き出すようにため息を吐いた。そんなニースを見て、部下たちは苦笑と共に同意した。

次の瞬間には死んでいのではないか。そう言いたくなるほどの激闘だった。間違いなく、これまでの戦いの中でも三指に入るほどの戦いだつた。実際、バエルはまだしもバルバトスが生き残っていると聞いた時は耳を疑った物だ。それほどまでにルシフェルは強力なモ

ビルアーマーだった。間違いなく、ニースがガンダムで出ても勝てなかっただろうと確信していた。

それでも、勝った。《セラフ》と同等の性能を持っているモビルアーマーに。これは間違いなく快拳であり、この戦争を終わらせる一助となっただろう。しかし、ニースには疑問があった。何故、この宙域にルシフェルがいたのか？偶然ならばまだ良い。しかし、そうだとはとも思えなかった。何かの陰謀があるような気がしてならなかった。それが何なのかは分からないが、調査する必要があると思った。

「でも、一先ずは戻るとしよう。我々も疲れているからな……火星へ進路を取れ！一時帰還する！」

厄祭戦・11

ギヤラルホルン設立から五年、モビルアーマーたちは大きな動きを取る事もなく沈黙していた。偶にデブリ帯などのいわゆる影の航路とでも呼ぶべき場所でモビルアーマーたちが活動しているという報告もあつたが、基本的には戦闘などが起こる事も少なくなっていた。本来であれば歓迎するべき事ではあるが、モビルアーマーどもが何かを考えていると判断したシリウスは更なる軍備増強に努めた。

何故なら、《セラフ》の連中が戦場に姿を見せないからだ。モビルアーマーたちの完成策とでも言うべき個体たちであり、他のいかなる機体よりも命令を順守するように設計されている。そんな機体が大んまりを決め込んでいるなど、何かを準備していますと言っているような物だ。ならば、こちらも万全の準備を整えねばやられてしまうかもしれない。

ガンダムのパイロットたちに独自の訓練プログラムを行わせ、各パイロットの癖や特徴などを把握してガンダムの改造を行う事を始め、決戦兵装の改良やそれぞれのモビルスーツに使われている武装のチェック。他にも仕事は山のように存在していた。シエルが成長してきたのもあり、仕事によって家を空ける回数が多くなっていった。

「パパ〜！」

「シエル、どうかしたのか？」

しかし、それは家族間の中が悪くなったという意味ではない。なにせ、自宅が基地のある場所にあるのだ。自分から行く気にさえなれば、会う事自体は不可能ではない。そして、成長したシエルは未だ五歳児ながらと言うべきなのか、五歳児故にと言うべきなのか、好奇心が年齢相応かそれ以上に旺盛だった。仕事中の父親の許を襲撃し、仕事に関わっていた。

シエルが質問し、シリウスが答えるというやり取りは一種の名物となりつつあつた。その質問の中で画期的な物を生み出してきた辺り、その科学的な優秀さは父親譲りと言えた。その天真爛漫さは母親譲りなのか、兵士たちの中でもマスコットキャラクター的な扱いをされ

ていた。

「呼んだだけ！」

「そうか。それで、今日はどうしたんだ？またシミュレーターで遊びに来たのか？」

「うーん、それでも良いんだけど。今日は違うの！アグニカおじさんにモビルスーツに乗せてもらうんだ！」

「アグに……バエルにか？しかし、遠征の予定はないしモビルアーマーの発見報告もない。テストなんてする予定はない……ちよつと待て。ヴァルキュリア・フレームの次世代フレームのテストは何時だ？」

「確か……あ、今日になっていますね」

「チツ……何が起こるか分からないんだぞ。大体、テストパイロットとしての活動の最中に子供を乗せるなよ。仕方がない。俺もテストの確認を行う。準備してくれ」

「かしこまりました」

「え、パパも付いてきてくれるの!？」

「ああ。シエルを一人であの馬鹿の無茶振りに付き合わせる訳にはいかないから。そうでなくても、本来は部外者であるシエルはモビルスーツのテストには参加できない。だが、俺の付き添いという事になれば不可能ではない。本来はそんな物に参加させたくはないんだがな」

「ありがとう、パパ！」

「はいはい、どういたしまして。それじゃあ、行くとしようか。ところで、ジャンヌには言って来たのか？」

「うん、パパのところ遊びに行ってくるって！」

「遊びに、か。ここは軍事施設であって遊び場じゃないんだがな。シエルも俺の親族だからってあんまり権力を乱用しないようにな。そういうのは墮落の始まりだ」

「墮落って？」

「自分に甘くなる、って事さ。いいかい、シエル。自分だけに甘い世界ってのは幻想だ。世界は等しく、誰にでも厳しい物だ。だからこ

そ、生きているとも言えるんだ。都合の良い妄想は現実にあつてはいけないんだ」

「……どういう意味？」

「例えば、そうだな。勉強も手伝いもせずに悠々自適に過ごせる世界、なんて物はないという事だ。頑張れば報われる訳ではない。でも、頑張らなければ報われない。頑張らずに良い目を見ようだなんて烏滸がましい事だ。シエルにはそれを分かって欲しいんだ」

「……頑張れ、って事？」

「そうだな。今はそのぐらいの理解で構わない。だけど、シエルが将来本当に望む生活をしたくないなら、自分に甘えてはいけない。誰かに頼り切つてはいけない。シエルは多分、俺やジャンヌの跡を継ぐ事になると思う。ダルク家の次期当主として、頑張らなければいけないのよ。うな事態になるかもしれない。でも、捕われる必要はないんだ。シエルは好きな道を選んで良いんだから」

ダルク家の当主になる道もならない道も、シエルには存在する。シリウスもジャンヌも、子供に自分の跡を継いでほしいとは思っていない。出来るなら、継いでほしいが無理強いはしたくない。シエルはシエルらしく生きていってほしい。それこそが、親としてシリウスとジャンヌが望む事だ。

それさえ叶えば、特に言う事はない。シエルの将来を縛らずにいられるなら、シリウスには特に言う事はない。モビルアーマーを根絶やしにして、シエルに平和な未来を齎す事ができればシリウスはそれで良い。後はジャンヌとシエル、家族一緒に過ごせる時間があればシリウスに言う事はないのだ。だからこそ、シリウスはシリウスのできる事をする。と決意していた。

自分で道を選んできた自分たちの様に、シエルには自分の道を選んでもらいたい。シリウスは孤児であった頃、アグニカと共に歩く道を選んだ。その後もアグニカに振り回されこそしたもの、基本的には自分の意思で選んできたのだ。今の地位に就く事だつて選択肢はほばないに等しかったが、シリウス自身の意思で選んだのだ。

ジャンヌにしてもそうだ。火星の独立運動の旗頭となる事、その為

の独立治安維持組織を立ち上げトップとなる事、地球と同盟を組んだ事、シリウスと結婚した事、そしてシエルを出産する事……その総てを自分の意思で選んだのだ。それは決して、誰にも否定する事のできない事柄なのだ。そう思っているからこそそのシエルに対する願いでもあった。

「……まあ、今からする心配でもないか。ただシエルには覚えておいてほしいんだ。俺がこういう話をしたんだって事を。俺もジャンヌもシエルの幸せを願っているんだって事をな」

「……パパは今幸せなの？」

「もちろん。愛する妻がいて、こんなに可愛い娘がいる。これが幸せじゃなくて何だって言うんだ？これから歩いて行く道はきつと困難も多いだろう。しかし、同時に幸福な事もいっぱいある筈なんだ。それはシエルもきつとそうさ。俺みたいな愛を知らなかった人間でもシエルを授かる事ができた。俺はその幸せをジャンヌに祈っているんだ」

「神様じゃなくて？」

「ハツハツハ。良いかい、シエル？今のご時世で神様だなんて言うてはいけないよ。少なくとも、セブンスターズの連中もアグもモビルアーマーがいる限りはそんな事は言わないよ」

「どうして？」

「モビルアーマーは天使をモチーフに作られた。そして、天使は神の御使い——神の部下なんだ。つまり、神様に祈るといふ事はモビルアーマーに祈るのと同じ事なんだ。奴らを滅ぼす事を目標にしている俺たちはそんな事は出来ないんだよ」

ギヤラルホルンという名もそれが由来となっている。北欧神話と呼ばれる神話において、神の終末とも言える神々の黄昏を世界に知らせる笛。天使の総てを掃討する事で、初めて人間の時代は始まるのだ。明日自分の命があるかなんていう不安から人々を解放する。そのため、ギヤラルホルンはあるのだから。

「もちろん、神様にも色々いるのは知っているよ。でも、俺たちが神様という天使の上にいる方が浮かんでしまうんだ。だから、俺たちは

神様には祈らない。それだけ分かってくれれば良いんだ」

「ううくん、よく分かんないや」

「それもそうだろうな。仕方のない事さ」

シリウスは苦笑しながら、手を繋いでいたシエルを抱き上げて肩車した。シエルは急に目線が高くなり、キヤツキヤツと笑っていた。そんなシエルの様子にシリウスも微笑を浮かべ、そのまま歩き始めた。暫くすると、シエルがシリウスの顔を覗き込んだ。

「ねえ、パパー！」

「なんだい？」

「私の名前ってパパが決めたんだよね？なんで、私の名前をシエルにしたの？」

「また、唐突だな。急にどうしたんだ？」

「二ー君が前に自分の名前を調べる宿題を出されたって言うってたから、ママに聞いたんだけどパパが私の名前を付けたって聞いたの。ママも知ってるらしいけど、教えてくれなかったから……ねえ、どうして？」

「そっか。シエルという名前はアフリカユニオンに存在したとある国の言葉で、『空』という意味なんだ。シエルは知らないかもしれないけど、パパの名前はシリウスっていう宇宙で最も輝く星の名前なんだ。そして母さんの名前はジャンヌ・ダルクという花の名前があるんだ。

俺はシエルという名前に二つの願いを託したんだ。一つは宇宙と花を繋いでくれるような存在になって欲しいという願い。もう一つはこの青空の様に、大きく広い心を持ってほしいという願い。それが、シエルの名前を決めた理由なんだ」

「……私はパパの願いを叶えられてるの？」

「何を言ってるんだ。シエルがいつもここに来てくれるから、俺は家族の絆を忘れないでいられる。パパが守りたいと思う人がいる事を忘れないでいられるんだ。それに、これはパパの勝手な願いだ。シエルはシエルらしくいてくれれば、パパはそれだけで満足なんだ」

実際、シリウスはシエルとジャンヌの存在に感謝している。彼女ら

がいるからこそ、シリウスは日々の仕事に従事する事ができる。頑張って家に帰ろうと思う事ができる。もし、二人がいなければギヤラルホルン創設以前のように無茶を繰り返していたら。シリウスはそう確信する事ができた。

そんな会話をしていると、新たなモビルスーツのテスト会場に着いた。そこにはヴァルキュリア・フレームの次世代機ゲイレル・フレームが置いてあり、その周辺には多くの科学者やパイロットたちが実験を見に来ていた。その中心ではアグニカがシリウスとシエルに手を振っていた。

「おう、シエルの嬢ちゃん。よく来たな。シスまで来るとは思わなかったが」

「あのなあ、モビルスーツのテストに子供を乗せるとか正気じゃないぞ？お前、まだシエルが五歳だったこと忘れてるんじゃないのか？」
「忘れちゃいないがな。こんな機会でもなきや、モビルスーツなんて早々乗れねえだろ？貴重な体験って奴だよ。嬢ちゃんだって楽しんでだろ？」

「うん！今日はよろしくお願いします！アグニカおじさん！」

「うくん、おじさんか……個人的にはお兄さんとかの方が良いんだがなあ。まだ華の二十代後半の筈なんだけどな、俺……」

「俺と同年代という時点でおじさんなんだろうな、シエルにとっては。まあ、甘んじて受けろ。どうせいつかは受けていた呼び方なんだからな」

「そりゃあ、そうかもしれないがよ……そういう問題じゃねえだろ？エリオンとかファルクぐらいになればおっさんって言われてもしょうがねえし、バクラザンとか爺に片足突っ込んでるじゃん。それぐらいだったら爺ちゃんって言われても仕方ねえよ。でも、二十代でおじさんはちよつと……」

「意外だな。お前もそういうのを気にするぐらいには人間性が残ってたんだな」

「こういうのは人間性とか関係ないだろ？こんな小さい子におじさんって言われるのは若さ的に嫌だ、って話だろうが。ま、別にそこま

で改善したい問題じゃないし、別に良いけどさ」

アグニカがシエルを抱き上げ、空中に放り投げて遊んでいた。シエルもキヤツキヤツと笑っていたので何も言わなかったが、シリウスは苦い顔をしていた。暫くすると、準備が完了したのか職員がアグニカを呼びに来た。アグニカはシエルを抱き上げたまま、ゲイレールに乗り込んだ。

アグニカなりにシエルに配慮しているのか、普段の荒々しい操縦からは想像できない程に繊細に機体を動かしていた。いつもバエルの整備をしているスタッフはいつもこれぐらい繊細に機体を操縦してほしい、と思ってしまうぐらいには繊細な動きだった。シリウスもその動きを見ながら、ゲイレールの稼働率を確認していた。本来テストパイロットを務める人間ができる程度の動きはしていることを確認した。

ゲイレールのテストが順調に進んでいる事を確認していると、シリウスの許にシリウスの秘書が走ってきた。その慌てように眉を顰めたシリウスだったが、秘書が耳打ちした内容を聞くと更に表情を厳しくした。そして近くにいる職員から通信機を借り、アグニカに通信を繋いだ。

「アグ、緊急会議だ。さっさとゲイレールから降りろ」

『なんかあったのか?』

「あったから緊急会議なんてするんだろうが。シエルも車を用意させるから、それに乗って家に帰りなさい」

『ええ〜……楽しかったのに』

「か・え・り・な・さ・い。パパたちはこれから重要な仕事があるんだ。それぐらい分かるだろう?頼むから言う事を聴いてくれ。今回の仕事が終わったら一緒に遊ぶから、頼むよ」

『本当に!?パパが遊んでくれるの!?!』

「ああ、本当だとも。今回の仕事はそれだけヤマが大きいんだ。これが終われば、間違いなく状況は終息する。そうなれば、一緒に遊ぶ時間ぐらいは取れるようになるさ」

『分かった!アグニカおじさん、降ろして!』

『分かった分かった。そう慌てなくても降ろすから、ちよつと落ち着いてくれ!』

暫くすると、会議室の一室にセブンスターズとアグニカにシリウス、そしてテレビ通信でジャンヌがいた。突然の緊急会議にセブンスターズの面々は緊張しきつていた。シリウスはタブレットを操作し、モニターを起動した。そこには数枚の写真が映っており、その数枚はモビルアーマーの物だった。

「これは地球と火星のちょうど中間あたりに存在しているコクーンから撮影された物だ。現在、モビルアーマーの集団が火星と木星の両方から発見されている。確認されている数も残っている数と一致した。おそらく、最も人間が生きている地球を目指しているんだろう。これはまあ、まだ良い。最も問題視するべきなのは……コレだ」

シリウスがタブレットを操作して新たに表示されたのは三枚の写真。そこには特別な意匠が施されたモビルアーマーが三機表示されていた。それが何であるのか、ここにいる面子であれば分からない訳がなかった。この写真に映っているモビルアーマーは――

「《セラフ》……四大天使どもが、ここに？」

「まず間違いないだろう。確認されたのはガブリエル、ウリエル、ラファエルの三機。ミカエルはまだ確認されていないが、間違いなく次の戦場に現れるだろう。火星圏には既に態勢を整えて兵士を送るように命令を出している。連中の行軍速度から次の最終決戦はおよそ半年後。それまでに戦力を整える必要がある」

「では、本部の方でもモビルスーツの増産体制を強化させましょう!パイロットの育成も同時に並行させなければなりません!」

「そんな付け焼刃でどうにかなる相手か?それよりは決戦兵装を増産し、兵士たちにそれを使わせた方が良いんじゃないのか?」

「ルシフェルには通じなかつたんでしよう?それよりはボードウインの言ったように、戦力となる人材を成長させる方が良いんじゃない?」

「現在のパイロットたちの練度を上げつつ、戦力となり得る素質を持つ者の選定。及び、モビルスーツと決戦兵装の増産。本来であれば、

本部と火星支部による演習を行いたいところだが、そんな事をしてい
る時間もなさそうだな。ダルク公、どう思う？」

『火星支部の指揮官と本部の指揮官を集め、通信による演習を行って
は？ 幸い、敵はコクーンを破壊せずにいます。不可能ではないかと。
シミュレーターモードを艦隊及びモビルスーツ全機に適応させれば、
より本格的な演習ができるとは思いますが……半年では流石に難し
いでしょう』

会議が白熱していく中、シリウスとアグニカは黙っていた。二人の
間に生まれていたのはこれまで歩いてきた道筋だった。厄祭戦が開
始される前、ガンダム・フレームの構想すら生まれていない段階から
ここまで、二人にとっては途方もなく長い時間を歩いてきたように感
じられていた。

「……各々、言いたい事もあるだろう。話すべき事も山のようにある。
だが、これだけは分かって欲しい。俺たちは今、瀬戸際に立っている。
終末の笛が——ギャラルホルンがこの世界に鳴り響くのか否か、
その未来を換えられる権利を握っているのは俺たちだという事を。」

俺たちが待ち望んだ未来は、すぐそこだ。必ずや、俺たちはこの戦
いに勝利しなければならぬ。そして、俺たちが人々の未来と明日を
……大切な人々が安心して生きることのできる時間を取り戻す！俺
たちはそのために、この五年間戦い続けてきたんだから」

「そうだな。俺たちがモビルアーマーどもに反旗を翻して、もうそん
だけ経つんだ。これまでの戦いで、どれだけの人間が死んだ？ どれだ
けの犠牲が生まれた？ それを乗り越えて、俺たちはここまで来た。昔
に比べれば、今の技術はだいぶ劣った物になっちゃったよな。不甲斐
ない事だぜ。」

——それでも、俺たちは勝つんだ。あのクソ天使どもを皆殺し
にする。これは俺たちが散々言い続けてきた事だ。だから、最後まで
やり遂げなければならない。俺たちが俺たちの意思で、この戦争の幕
を引くんだ！ 世界の守護者を気取るなら！ その程度でやり遂げてみ
せろ！」

『ハッ！ 我が身命にかけて、必ずや我らに勝利を！』

最終決戦を半年後に備え、ギャラルホルンは設立以来最大の危機に直面しようとしていた。しかし、彼らの心に絶望などという物は欠片も存在していなかった。何故なら、彼らの許には悪魔の王と英雄がいるのだ。負ける道理など何処にもなく、ただ勝つために尽力する事のみしか頭にはなかった。英雄の妻たるジャンヌ・ダルクを除いて、ただの一人も。

厄祭戦・12

モビルアーマーとの最終決戦を半年後に控え、ギヤラルホルンの生産体制は最高状態に達していた。生産体制だけではなく、訓練プログラムもモビルスーツを操縦する物にシフトしていた。毎日のように演習を行い、モビルスーツが動かせない時にはシミュレーターによる戦闘演習が行われた。

セブンスターズやアグニカ、シリウスもシミュレーターによる特別演習に参加。それによって一般的なパイロットも新兵同然のパイロットも、瞬く間に力量を伸ばしていった。これは火星圏ともダイレクタトリックしており、どちらのパイロットも操縦技術を磨いていた。この演習にはジャンヌも参加しており、優秀な成績を残していた。地味にシエルが参加している戦闘もあり、負けた兵士たちは膝を折っていた。

「おら、どうしたどうした!?!この程度で終わってんじゃねえぞ!」

「お前は、いい加減に止まれ!」

アグニカがシミュレーターでやり過ぎた場合、それを止めるのはシリウスかセブンスターズの役割となっていた。互いに武器をぶつけ合い、高速で戦闘を繰り返していった。それを見ていた新兵たちは啞然としていたが、先輩たちに怒鳴られて戦闘に参加していた。先輩たちもまったく、と言いなながらアグニカとシリウスの戦闘をチラ見した後、戦線に戻っていった。

しかし、これは無理ならしからぬ事だった。とある一線を越えた戦闘は人々の視線を魅了する。それがギヤラルホルンの誇る悪魔の王と英雄の物であれば、尚更の事だろう。モビルアーマーをギヤラルホルンにいる誰よりも多く狩り殺してきた二人だからこそ、互いに並び立てる者が数少ない。彼らはお互い以外の存在を対等だとは思っていない。それは、スラムの時代からずっとそうなのだ。

シリウスに勝てるのはアグニカしかいないし、アグニカに勝てる可能性があるのはシリウスしかいない。お互いにそうだと思っている。それが事実で、間違えようのない真実なのだと思いきっている。そう

だと思っっているからこそ、お互いに遠慮がないのだ。自分の思っている事をぶつけ合える。そんな稀少な親友なのだ。

「ちよっと妬いてしまいますね……」

「男なのに二人でいちやついちやつてねえ。あの二人、自分たちが妻帯者だつて事を忘れてるんじゃない?」

「イシュー公……」

「クエスで良いわよ。思えば、こうして二人だけで話すのは初めてね。ジャンヌ、と呼んでも良いかしら?」

「はい、大丈夫ですよ。クエスさんはもう結婚されていらつしやるんですか?」

「ええ。私の部下でね。独身時代はよくぶつかってきたものよ。理由を訊けば、私に認められたかつたとか言ってたけどね。丁度、今あそこの仮想戦場に参戦しているわ」

シリウスがアグニカの相手にかかりきりになっている中、副官の人物が巧みに部隊を指揮していた。どちらの軍も実力が拮抗しているせいか、まだ大きな戦況の変化は見られない。そんな停滞した戦場に劇物を投じるように、ガンダムが戦場に現れた。それを抑えるようにヴァルキュリアが動き回り、最早戦場は完全な泥沼と化していた。

「とんでもないわね……あ、キマリスだ。ボードウィンも大変ね。あんなの無視して放つておけばいいのに」
「クエスさんは参加されないんですか?」

「自分よりも強い相手と戦うというのも大事よ。弱いなら弱いなりに立ち回りを考え、敵を倒す方法を考える。そういう思考を鍛える事も出来るからね」

「なるほど……クエスさんは今回の戦いどう思いますか?」

「……そうね。これまでも厳しい戦いがあつたけれど……それとも比較にはならない程の厳しい戦いになると思っているわ。まあ、でも、大丈夫でしょう」

「それは、何故?」

「……?当然でしょう。私たちにはガンダムや精鋭と言える兵士たちもいる。それに何よりアグニカにシリウスがいる。バエルとゾーク

フリートがいれば、たとえば《セラフ》が相手でも後れを取る事はないでしょう」

「……本当にそうなんでしょうか」
「え？」

「確かに、バエルとジークフリートは強力な機体です。それを操る二人もまた優秀なパイロットです。それはこれまで繰り広げてきた戦果、そしてこの眼で見てきた戦闘からしても明らか。それは分かっています。でも……なんだか嫌な予感がするんです。あの二人が、あの人が帰ってこないんじゃないかって、そう思えてしまつて……」

「……軽々しく言うつもりはないけど、あなたの気持ちも分かるわ。なにせ、相手はまだ私たちが相手にした事がないほどに強力な相手よ。あの化け物集団のトップに位置する奴らと戦わなくちゃいけない。そんな今まで見た事も聞いた事もないような相手が待つてるんだから、そう思つてもしょうがないのかもしれない。」

でもね、あなたが信じなくてどうするの？ 誰よりもあの男の隣であの男を案じていたあなたが、彼の事を信じなくてはいけないのでしょ？ あなたが真つ先に彼の勝利を祈らなくてはならない。私でも、他のセブンスターズの連中でもない。あなたが、ジャンヌ・ダルクが信じなくて誰が信じると言うの？」

「それは……」

確かにその通りなのかもしれない。しかし、ジャンヌの心からは不安が拭えなかった。それはアグニカやシリウスを妄信している訳ではないジャンヌの心にもみ存在する感情だった。ジャンヌは本部にいる人間たちほど、アグニカやシリウスと付き合いがある訳ではない。だからこそ、彼らの事を客観的に見る事ができた。

これまでずっと勝ち続けてきた事は、これからも勝つ事とイコールではないのだ。どんなに強い人間でも、負ける時は負けるのだ。一騎当千と呼ばれる英雄も、少し不意を打たれた程度で死んでしまう事もある。ジークフリートがハーゲンに弱点の背中を突かれて死んでしまったように、死ぬ時は死んでしまう物なのだ。

「……まあ、そういう問題は私じゃなくてもっと相談すべき相手が

いると思うけど。精々、後悔の無いようにしなさい。今回の戦いが私たちにとつても、世界にとつても大きな戦いとなるわ。私もあなたもどうなるか分からない以上、やり残しなんて物は早めに解消しておきなさい」

そう言うと、クエスはシミュレーターの方に戻っていった。その場には不安に胸を押し潰されそうになっているジャンヌが残され、ジャンヌはただじつとバエルと剣をぶつけ合っているジークフリートを見ていた。お互いに負けて堪るかと言わんばかりに剣を、頭をぶつけ合っている。その苛烈さときたら、お互いに他の仲間を認識しているかどうか怪しいレベルだ。

こいつに勝ちたい、こいつには負けたくない。そういう意志がぶつかり合っているのだ。だからこそ、その戦いは周囲の目を惹く。生死を掛けた物ではなからうとも、これは彼らにとっては立派な勝負なのだ。故に、手を抜くような事は絶対にしない。そんな事をしている余裕は彼らにはないのだ。少し注意を逸らしただけで次の瞬間には殺されているかもしれない。そう感じるだけの迫力が相手にはあるのだ。

「ハッハッハッ！どうした、シス？そんな物じゃないだろ、お前はよ！」

「喧しいぞ、この問題児が！これはお前の欲求を満たす物じゃなくて、兵士たちの練度を上げるための物だって本当に理解しているのか、お前は!？」

最終的に、事前に副官に自分の手が空かなくなった場合の対処方法を教えていたシリウス側の勝利となった。周囲から攻撃を受け、少し意識を逸らした瞬間に手元にあったブレードでコックピット部分を潰されていた。演習が終わり、シミュレーターから出てきたアグニカは叫び、疲れ切っていたシリウスはジャンヌの傍まで歩き座り込んだ。

シリウスとしても、アグニカの相手は大変なのだ。獣じみた反応速度で動かれるため、一瞬後には負けているかもしれないとなれば疲労も倍増してくる。演習で勝ちこそしたものの、実戦ではきつと敵わな

いだろう事をシリウスは自覚していた。なにせ、このシミュレーターにはバエルの意志が宿っていない。だからこそ、アグニカも自分の本領を発揮できていない。それはシリウスもそうだが、本当のバエルに乗っていれば間違いなくシリウスと戦いながら部下たちの攻撃を捌ききったであろう事は間違いない。

「ああ……疲れた」

「お疲れ様です。大丈夫ですか？」

「大丈夫かそうでないかで話をしたら、大丈夫じゃないな。あいつ、これで決まったと思った攻撃をとんでもない速度で反応したり回避したりするからな……他の戦線をきちんと確認しないといけないし、やらなきゃいけない事が多すぎる。さしもの俺も疲れるよ……いや、本当に」

「確かに、多くの兵士の皆さんがあなた達の戦いを気にしていましたからね。それも仕方のない事かもしれませんが。今は休んで下さい」

「ああ、そうさせてもらう。……ジャンヌも話があるようだけど、今は休ませてもらうよ」

「えっ……」

「分からない訳がないだろう？あの会議の時、ジャンヌだけは顔を曇らせてた。それ以降もずっとだ。この戦争に対する不安か悩みかはよく分からないが、言いたい事があるんだろう？だったら、俺に言えば良い。良い意見を言えるとは限らないが、それでも聞くだけなら出来るからな」

シリウスはジャンヌの事をよく理解していた。どんな悩みを抱えているのかは分からずとも、悩みを抱えている事は分かる。それが恐らく、今回の最終決戦に関わる事であろうという事も、分かっていた。だからこそ、シリウスは待っているのだ。ジャンヌが自分にその悩みを話してくれる時を、自分に頼ってくれるその時を。

「……はい。家に帰ってから話しましょう。これまで話さなかった事を、これまで知ろうとしなかった事を。お互いの事をよく理解するために、必ず」

「ああ。俺も君もお互いの事を見てきたようで、その実あまりお互い

の事を知らないからな。思えば、結婚してからそういう昔の話はあまりした事がなかったな。前にやったお茶会でジャンヌの話は聞いたが、俺の話をした事はなかったな。その時に聞かせてやるよ」

「ええ、楽しみにしていますね」

「ああ。君に渡したいと思っていた物もやつと準備が終わったからな。丁度良かったよ」

「渡したい物……ですか？」

「ああ。それと悪いんだが、先に帰ってもらっても良いか？俺はこの後、ちよつと寄る所があるからな」

「それでしたら、一緒に行きましようか？」

「いや、俺の個人的な用事だからな。まあ、後のお楽しみとでも思っておいてくれ。後で用事が何だったのかも教えるからさ」

「……分かりました。それじゃあ、楽しみにしていますね」

「ああ、是非とも楽しみにしていてくれ。まずは目の前の仕事を片付ける所から始めるとするさ」

そう言いながら、シリウスは立ち上がりシミュレータールームを出て行った。兵士たちがシミュレーターを動かすだけでも金にかかるものだ。更にモビルスーツの開発などで金をかけている。現在は戦時特需という事で経済を回しているが、それが終われば確実に経済活動に問題が生じてしまう。それをどうにかするため、戦後の対策も考えていた。

セブンスターズやアグニカに武官たちの教育を任せ、シリウスは文官たちや経済学者を纏め上げて戦後の対策をも考えていた。他にもギヤラルホルンが厄祭戦以降も存在するために必要なルール作りに加え、セブンスターズの各当主が引き継ぐ業務内容など、決める事は多岐に渡っていた。同時にモビルスーツや決戦兵装の製造状況を確認したりと、シリウスは忙しい時間を過ごしていた。

その日の夕方、ジャンヌが家に戻るといつもジャンヌが戻ってくると思えてくれた使用人たちがいなくなった。それに、シエルの姿も見えず、何故かと思いいながら食堂に向かうと——爆音と紙吹雪がジャンヌの顔面を叩いた。ジャンヌは唐突に起こったソレにパチクリと

瞬きをしていた。

『ママ（奥様）、誕生日おめでとう（ごぎいます）！』
「えっ……」

ジャンヌが食堂を見ると、色紙などで様々な装飾がされていたり部屋の奥には『ママ、お誕生日おめでとう！』と書かれた横断幕が立て掛けられていた。そこで漸くジャンヌは今日の日付を思い返し、自分の誕生日である事に初めて気付いた。

その用意されたセットに驚いていると、後ろからジャンヌの肩を掴んでいるシリウスがいた。そのままジャンヌの身体を押してゲスト席に座らせた。そして手を挙げると、ごくごく普通のケーキが置いてあった。それこそ普通のケーキ屋にも置いてありそうな、ごく普通のホール。そこにロウソクを置き、着火する。そしてバースデーソングをその場にいた全員が歌い始めた。

ジャンヌは思わず涙を流してしまった。何とか抑えようとするが、どうしても収まらず嗚咽を漏らしてしまう。ジャンヌが泣いてしまった事に周りは焦っていたが、シリウスは慌てずに抱きしめた。そして、ポンポンと頭を叩きながら撫でた。そのシリウスの仕草にジャンヌの堤防は決壊した。

「大丈夫だよ、ジャンヌ。皆、ここにいる。お前を置いて消えたりはしないよ。だから、落ち着いて」

「う、うううう……あああああああつー！」

「まったく、しょうがないなあ。しばらくこの胸を貸してやるから、次に顔を上げる時は笑顔を見せてくれ。それが俺たちに対する最大の返礼だ。皆、お前の笑顔が見たくてこういう事をしてるんだからな」

ジャンヌは泣きながら頷き、シリウスはそんな愛しい妻を黙って抱きしめていた。暫くすると、ジャンヌは泣き止んだ。そしてジャンヌが顔を上げるのとはほぼ同時に、シエルが二人の間に突っ込んできた。ジャンヌの涙に引つ張られたのか、その顔は泣き顔になっていた。シリウスとジャンヌは顔を合わせた後、シエルを抱きしめた。そんな二人にシエルはまた泣き始めたのだった。

それからしばらくした後、シエルもジャンヌも泣き止んだのを確認

すると改めて口ウソクに火を点けた。今度はキッチンと火を消し、誕生日会が始まった。ご馳走にはしゃいで口元を汚すシエルの口元を拭ったり、ジャンヌは大変だったが楽しかった。シリウスは楽しそうにしている二人を見て、優しく笑っていた。

シエルを寝かせると、ジャンヌはシリウスと共に庭を歩いていた。シリウスが連れて行きたい場所があると言い、ジャンヌはシリウスの後ろを歩いていた。そして連れてこられた場所は——格納庫だった。普段はジークフリートの整備などでシリウスしか使っていないため、ジャンヌはここに近付いた事がなかった。

しかし、ここにそんなに面白い物があつただろうか？と首を傾げていると、シリウスは扉を開いてジャンヌを招いた。そこにはジークフリートともう一機、別のモバイルスーツが立っていた。全身を真っ白に染め上げ、ところどころに赤い花模様の意匠が入ったモバイルスーツ。ジークフリートが武骨な機体だとすれば、この機体は華々しい機体だった。

「この機体は俺が受け取ったヘルヴォルを改修した機体だ。ジャンヌ、俺はこれを君に託したい」

「……どういう事ですか？これはあなたが乗るために作ったんじゃないからな。」

「ハハハッ、俺はこんな華々しい機体には乗れないよ。これは最初から君のために作ったモバイルスーツだ。俺やアグ、そしてセブンスターズの連中とは違って、ジャンヌには艦隊の指揮を任せる事になると思う。俺はしても小隊から中隊規模に留まる。前線で戦わなきゃならないからな。」

だから、ジャンヌには旗頭になってもらいたいんだ。今回の一戦では本部も火星支部も共同して事に当たらなくてはならない。仲違いなどしている余裕はないんだ。だからこそ、君に託したい。火星を守り導いてきた君に、この仕事を託したいんだ」

「で、でも……！」

「ジャンヌ。俺は君に会えて本当に良かったと思っている。俺が生きていたと思えるのは間違いなく、君のおかげなんだ。俺はこれからも

君と一緒にいたいと思ってる。だから、この機体を預かってくれ。君が生き残れるように、俺たちも最善を尽くすから」

「どうして！そんな遺言みたいな事を言うんですか!?聞きたくない！私はそんな言葉、聞きたくないんです！」

「ジャンヌ……」

「私はあなたと一緒にずっと生きていきたいんです。これまでも、これからも！あなたと一緒に時間を歩いて、あなたと一緒に死にたい！あなたの命が明日までなら、私の命も明日までで良いんです！」

「……そんな事を言わないでくれ、ジャンヌ。俺は勿論生き残るつもりだ。それでも、万が一はある。俺は君が生き残るために、そしてシエルを始めとした未来の子供たちに希望という名の未来を託さなくてはならない。俺は俺ができる最善を尽くさなくてはならないんだ」
それがシリウスの願いだ。愛する妻が、愛する娘が生きるために必要な事をしなくてはならない。万が一に備えて行動しなければならぬ。それがどれだけ不謹慎な事であったとしても、未来へのバトンを繋げなければならぬ。それはこれまで多くの人間の力を借りてきたシリウスの役目なのだ。

「ジャンヌ、この機体の名前はヘルヴォル・ゼラニウム。『軍勢を守るもの』という名前を与えられた戦乙女であり……俺の君への想いを託した機体でもあるんだ」

「……え？」

「俺らしくもなく花言葉の辞書とか引いてさ、色々調べたんだ。総てのゼラニウムに共通している花言葉は真の友情」と「尊敬」と「信頼」だ。でも、赤いゼラニウムはそれだけじゃない。赤いゼラニウムの花言葉は——」

——「あなたがいて幸せ」だ。

「……………」

「そうだ。俺は君といれて幸せなんだ。君が繋いでくれた様々な物が、俺は幸せなんだと気付かせてくれた。アグでも、セブンスターズの連中でもない。君なんだよ、ジャンヌ。だからどうか——この花を受け取って欲しい」

そう言つてシリウスが取り出したのは青色のバラだった。かつて、青色のバラは不可能な代物だと言われてきた。そんな物が存在する筈がない、そんな物が出来る筈がないと、そう言われ続けてきた花だ。それでも、人の奇跡ゆえかそれは成った。

「君との出会いこそが俺にとつての奇跡であり、言いたくはないが神様からの祝福なんだ。どうか、俺に君の幸せを祈らせてくれよ。かつて、君が俺の事を案じてくれた時のように、君の幸せを俺に祈らせてくれ」

「ひどい……あなたは本当にひどい人です。そんな事を言われたら、私はもう断る事も出来ないじゃないですか！」

「そうだよ。俺は是が非でもこの機体を君に渡す。何よりも大切な家族のために、誰よりも愛しい我が最愛の人を守るために。俺はこの機体を君に渡す。乗らなくても良い。ヘルヴォルには悪いが、乗らない方が本来は良いんだよ。だから、お守り程度に思つてくれ。それだけでも、俺は十分に嬉しいから」

大切な命の輝きを守らんがため。シリウスはいかなる努力でも成し遂げると決めた。だからこそ、彼は戦うのだ。死んでしまう事は怖い事だけれど、大切な人を守れない事はもっと怖い事だ。そんなことは出来ない。彼は世界にとつてはちっぽけな命のために、その身命を賭す覚悟を決めたのだから。

「勝とう、ジャンヌ。俺たちの子供が明るい未来を歩けるように。俺たちがこれからの時間を本当に楽しいものだったと思えるように……な？」

「……分かりました。勝ちましょう、必ずや。これからの未来を守るために。だから、勝ったら私を愛してください。苦しくなるほどに抱きしめてください。あなたの愛を私にください」

「俺の愛は全部ジャンヌに捧げたつもりだったんだが……分かった。この戦いに勝ち、俺は君に俺の愛を渡そう。世界すらも溺れさせるほどの愛で、君を愛そう。だから、どうか生きてくれ。それだけが俺の願いなんだから」

ジャンヌとシリウスは抱き合い、どちらからともなくキスを交わ

す。この夜の後、二人は公的な場で言葉を交わす事はなかった。それでも、お互いが勝利した上で生き残るために最善の努力を始めたのだった。

厄祭戦・13①

半年後、本部の全戦力は宇宙に上がっていた。モビルアーマーを地球に下ろす訳にはいかないからだ。だからこそ、ギャラルホルンは月を戦場とする事を決定した。モビルアーマーたちよりも先に火星支部の戦力と合流し、戦闘準備を整え終えていた。

地球と火星の間にある最後のコクーンからモビルアーマーの映像が届いて数日、もうすぐモビルアーマーがこちらに来る。それを理解しているからか、艦隊内は極度の緊張状態に陥っていた。ガンダムのパイロットたちやジャンヌを除き、誰もがこれから死戦が始まる事に恐怖を抱いていた。

「おい、最高司令官殿よ。そろそろ号令をかけた方が良いんじゃないのか?」

「うーん、それもそうだな。こんな緊張状態じゃあ、演習の成果なんてろくに発揮できないだろうしな。それじゃあ、全艦隊にLCSを繋いでくれ」

あまりにも呑気と言わざるを得ないトップ二人にジャンヌは苦笑を浮かべ、乗組員は緊張が少しではあったが和らいでいた。そしてLCSで全艦隊を通信で繋ぐと、アグニカは強く息を吸い込んだ。そのアグニカを見た瞬間、シリウスはジャンヌに耳を塞ぐようにジェスチャーをした上で自分も耳を塞いだ。

「ダメエラー!いつまでガタガタ怯えてやがる!?!」

その大声に直接聞いた者たちは一瞬鼓膜が破れたんじゃないかと疑った。そしてアグニカの方を見てみると、心底苛々しているアグニカがいた。アグニカはこの時をずっと待ち続けてきた。モビルスーツ登場以前からモビルアーマーはアグニカにとっての宿敵だった。それを根絶やしにする最後の機会に立ち会う事ができたのは、アグニカにとっては僥倖とも言えた。

しかし、周りの人間が恐怖にとらわれ過ぎている事に不満があった。この戦いは人類を救うための戦いだ。高慢ちきな天使どもを根絶やしにして、人が人らしく生きられる時代の始まりなのだ。自分た

ちには楽しく明るい未来が待っているのだ。だと言うのに、今から負ける心配をするなどアホらしいにも程がある。

「この半年間、お前らがあんなに戦ってきたのは何のためだ!? 勝つためだろうが! あのモビルアーマーどもを殺して、新しい未来をこの世界に齎すためだろうが! 今から負ける心配なんてしてんじやねえ! ふざけてんのか!?

この厄祭戦が始まって彼此十年か。その間に、どれだけの人間が死んだ? 四分の一だ。もうそれだけしか残っちゃいないんだ。その中には大切な人がいたかもしれない。それでも、俺たちは戦わなくちゃならない。何故か? 決まってる。俺たちはあいつらが憎いからだ!」
モビルアーマーに対する謂れのない憎悪がアグニカの中にはあった。しかし、事ここに至ればそれは多くの人間の心の中にあるものだ。それぐらい、モビルアーマーは人を殺し過ぎた。その人にとって大切な人々を殺し過ぎたのだ。

「俺たちが何をした? ただ普通に生きていただけだ。確かに、互いに利益を求めあつて愚かな戦争をしていたかもしれない。だが、殺された者たちはそれに関係した者たちだったか? いいや、否だ! 中には関係者もいただろう。だが、その大半が無関係な人間だった! お前らは納得できるのか!?! この無慈悲な殺戮を! 無差別の虐殺を! 納得できる筈がない! そんな無茶苦茶な道理に納得など出来る訳がないのだ!」

無茶苦茶加減はお前も大差なかったよ、とは思ったが決して口に出す事はなく黙っているシリウスがいた。そんなシリウスを抑えるようにジャンヌはシリウスの手を握っていた。

「繰り返されるぞ? この戦いに敗れば、同じようなことが繰り返される。いや、世界で唯一の軍隊である俺たちが負ければ、確実に人間はおしまいだ。ジ・エンド。さよなら……なんて認められる訳がねえだろうが! だったらどうする!? 決まっている——勝つんだ! 他の誰でもない俺たちが! ここでモビルアーマーどもを根絶やしにする! それ以外、俺たちの選択肢はなきものと思え!」

アグニカの一喝によって、兵士たちは緊張を士気に変える事に成功

していた。アグニカはその反応に口端を上げて笑っていた。シリウスはそんなアグニカを見た後、まだ通信が繋がっている画面の前に立った。

「皆、聞いて欲しい。最高司令官の言った通り、この戦いに敗北は赦されない。絶対に俺たちは勝利しなければならない。だが、どうか忘れないでほしい。君たちの流す血が、未来を歩く人々の希望となるという事を。俺たちの流す血が後世を生きる人々の支えになるんだ。」

傷つく事を、どうか恐れてくれるな。俺たちが流す血によって敵を斃す度に、後に残される人々が生きる未来は明るい物となるんだ！たとえ、道半ばでこの命を落としたとしても、それを拾い上げて次に繋げてくれる仲間がいる限り！俺たちの戦いは、散らされた命は！決して無駄な物にはならない！

立て！我が頼もしき仲間たちよ！屍を積み上げ、その先に愛しい人々の、大切な人々の未来を築き上げろ！この俺が、シリウス・ダルクが諸君らに約束しよう！必ずや、この戦場で流される血を無駄な物にはしないと！」

シリウスの宣誓に兵士たちの士気は最高潮に達した。数十体に及ぶモビルアーマーとの戦闘で犠牲者が出ない訳がない。しかし、それでも、自分たちの流した血が後に生きる者たちのためになるのならば。命を賭して戦う事ができる。そのために頑張る事ができる。

悪魔の王と英雄の主たちの言葉は兵士たちにとって、何よりも重い物だった。この未来を導いたのは他でもない彼らなのだから。最初に希望を齎した聖女がいる。次に希望を齎した英雄がいる。最も大きな希望の輝きを示した悪魔の王がいる。ならば、自分たちは絶対に勝たなければならない。たとえ、自分たちが生きられないとしても、彼らにはこれからの未来を導いてもらわなければならないのだから。

「エイハブウエーブを確認！モビルアーマーです！」

「皆さん、これが最後の戦闘です。互いに大事な物は異なるでしょう。それでも、今だけは互いに背中を預け、モビルアーマーを討つてください！モビルスーツ隊、準備出来次第全機発進せよ！」

聖女の号令に従い、全員がモビルスーツに乗り込んでいく。アグニ

カとシリウスもブリッジから出てモビルスーツデッキに向かおうとする。シリウスはその前にジャンヌに一瞬触れるだけのキスをして、笑ったまま頭を撫でて行った。

「また後で会おう」

「ええ、また後で」

モビルスーツデッキに移動すると、そこには最後の調整を施されたジークフリートがいた。シリウスにとって、最も思い出深い機体。互いに最後となる戦場を前に、シリウスもジークフリートも感傷的な気分になっていた。少しジークフリートを見つけた後、シリウスは躊躇なくジークフリートに乗り込んだ。

「さあ、最後の戦場だ。おおいに楽しむとしようか、ジークフリート」
『主殿、あなたに感謝を。あの時、主殿が先代の言葉を拾ってくれたから、私はここまで戦う事ができた。この事に関しては主殿に対して、感謝以外の何物もない』

「……それは俺も同じ事だよ。お前がいてくれたから、俺はジャンヌと出会う事ができた。彼女を自分の手で守るといふ大役を担う事ができるんだ。それはお前がいるからに他ならないんだぞ？だからこそ、申し訳なく思っているんだ。この戦いが終われば、お前は……」
『その先は口に召されるな、主殿。今はこの戦場を生き抜く事だけを考えればよろしい。あの悪竜どもを根絶やしにする絶好の機会、逃す訳にはいきませんぞ。心配なさらずとも、主殿は必ず守ってみせよう。たとえ、この身が朽ちようとも必ずやあの姫君の許に返してみせましょう』

「ハハハッ、英雄様のお墨付きとは嬉しいね。さあ、行こうジークフリート！一世一代の大勝負だ！張っていくぞお！」

『了解！』

ジークフリートが艦から出ると、既に出てきているガンダムたちがうずうずしているのが感じられた。どいつもこいつも、目の前にいる大勢のモビルアーマーに興奮を隠しきれないようだ。シリウスは全ガンダムに通信を繋ぎ、声をかけた。

「今回はガンダムの本懐を發揮できる最後の機会だ。食い残しの無い

ように、全力を振り絞れ！」

シリウスの言葉に反応したかのように、ガンダムの眼光が赤く染まる。悪魔たちは最後の戦場を前に、自重などその他諸々を投げ捨てようとしていた。しかし、ジークフリートとバエルが動き出さないせいか、他のガンダムたちは動かなかった。そして、バエルが唯一持つているバエルソードを掲げる。そして、全員の視線が集まった時、バエルソードを振り下ろした。

「防衛戦、開始だ！」

その言葉に真っ先に反応したのは、ジークフリートだった。シリウスが阿頼耶識の接続率を己が耐えられる限界まで跳ね上げ、赤から紅へと変化した眼光とリミッター解除を行ったガンダムたちよりもさらに上の出力を叩き出す。そして、そんなジークフリートに反応できずに棒立ちになっているモビルアーマーの頭部に持っているライフルを突きつける。

弾丸が放たれる度に爆発が起き、頭部を覆っていたナノラミネートアーマーが剥げていく。十発も叩きこまれると、ナノラミネートアーマーは完全に消滅していた。そして、更にもう一発撃たれると完全に頭部が破壊されていた。モビルアーマーを蹴飛ばすと、バスタードソードでブルーマどもを叩き潰し始めた。その頃によく他のガンダムたちが戦線に参加した。

ジークフリートが大きな挙動で動く、その穴を埋めるようにダインスレイブがモビルアーマーたちに打ち込まれた。戦場において、シリウスがどう動くのかを理解しているジャンヌにしか出来ない動きであり、自分がどう動けばジャンヌはどう動くのか理解しているシリウスにしか出来ないファインプレーだった。

バエルとジークフリート、そして他のガンダムによって戦場をかき回し、その隙に決戦兵装と他のモビルスーツによる大隊規模でモビルアーマーを一機ずつ潰していく。その動きは時に苛烈であり、時に静謐に変化していった。モビルアーマーに対応を許さず、戦場をかき回し続けた。

しかし、それでも犠牲は生まれてしまうものだ。どれだけ犠牲が少

なくなるように動いていたとしても、絶対に犠牲は生まれざるを得ない。一人はブルーマにコックピットを潰されて。一人はモビルアーマーの銃弾を受け。一人はモビルアーマーのワイヤーブレードに貫かれて。どんだん兵士たちが命を落としていく。

しかし、彼らは死ぬその瞬間まで希望がその胸から消える事はなかった。何故なら、彼らには特大の希望が付いているのだから。アグニカが、シリウスがいる限り、彼らの希望が途絶える事はない。必ずや、彼らがモビルアーマーを根絶やしにしてくれると信じている。だからこそ、死んでしまうその一瞬まで彼らは命を賭ける事ができた。

その戦いようはまさしく死兵。たとえば、ここで死せども、貴様だけは道連れにすると言わんばかりの戦いにモビルアーマーは圧倒されていた。希望が絶えない限り、我々が折れる理由はない。そう言わんばかりにモビルアーマーに食らいついていく。

ブルーマにタツクルしつつ自爆したり、大破状態でモビルアーマーの足に抱きつきナパーム弾の弾倉を持ったままナパーム弾を狂ったように連射し大爆発を起こした。死ぬことを恐れていないかのような戦い方をされれば、モビルアーマーとて不利になるのは道理だ。

犠牲になった人々に報いる事が出来るかは分からない。けれど、止まることはできない。ガンダムたちにも犠牲は生まれ始めていたが、それでもバエルとジークフリートを中心にしてモビルアーマーと戦っていた。しかし、次第にモビルアーマーたちの動きが変化し始めた。

ジャンヌはモビルアーマーたちの動きが変化したのを敏感に感じとり、兵士たちの陣形を即座に変化させた。同時に艦隊の陣形も変化させ、不測の事態にも対応しきれるようにしようとした瞬間、背後からビームがビームが射出され1番外側の艦が爆発した。

即座に背後に視線を向けると、月の大地を砕きながら1体のモビルアーマーが現れた。この戦場で唯一、姿を見ることが出来なかったモビルアーマー——《天使長》ミカエルがそこにはいた。それと同時にシリウスは何故モビルアーマーたちが地球に来たのかを悟った。

「ミカエルが月の裏側で眠っていたからか……」

モビルアーマーの中でも最強の戦闘能力を持っているミカエル。それを呼び起こし、一塊の集団を形成して地球や火星、木星にコロニーを襲撃するつもりだったのだ。ならば、ここで止めなければならぬ。しかし、シリウスはガンダム隊の中核だ。この場を離れることは出来ない。

「行け、シリウス！」

「そうよ！行きなさい、シリウス！あなたの大切な人を守りなさい！」
「お前ら……」

「大丈夫だよ、シス。俺たちはこんな奴らに負けたりしないし、お前が抜けたぐらいで負けるほど弱くもないぞ？俺らを信じろよ！」

「……分かった。ここはお前らに任せるぞ！」

シリウスは少しの間逡巡したが、すぐさま母艦の方に戻っていった。それを見送ると、アグニカはため息を吐いた。アグニカの隣には常にシリウスがいた。しかし、最後の戦場では共にいる訳ではなく、その事実になんとなく物悲しさを感じつつもこれもまた時の流れによる物なんだろう、と思っていた。

同時に、子供のままではいられないという事も分かっているのだ。シリウスには子供が生まれ、一人の親になった。その変化をアグニカは喜びながらも、胸の中ではどこか一抹の寂しさとも呼ぶべき物が存在した。それは己が子供を作る事ができない身体だっただけに、尚更の事だった。

しかし、その思考を即座に改めた。なにせ、今は一大決戦の真つ最中だ。そんな事を考える時間はあとで幾らでもあるだろう。今は目の前にいる連中に集中しよう。アグニカはそう考えると、バエルが急かすようにリアクターを動かす。バエルも興奮を隠しきれていない事を理解したアグニカは笑みを浮かべながら、レバーを強く握りこむ。

「分かっている。行くぞ、バエル。あいつらは皆殺しだ！」

同調率を上げながらアグニカはそう叫ぶ。バエルの眼光を更に赤く染め上げながら、戦場を駆け抜ける。そんなアグニカの道を阻むように、ハシユマル数機とラファエルが立ち塞がる。しかし、それに臆

することなくそのままバエルのスラストーを強く踏み込む。

「邪魔してんじゃねえぞ、天使もどきが——っ！」

悪魔の王は剣を高く掲げながら、天使を翻弄する。昔であれば、斃すだけでも一苦労だった天使たちを今となってはあっさり翻弄する事ができる。その事実にあグニカはこれでは足りないかと咆える。そのアグニカの訴えにバエルは応える。最後の戦いという事で、自重という物を失くしているのだ。それがどういいう事を意味するのか、この時のアグニカは分かっていたいなかった。

厄祭戦・13②

「モビルスーツ隊！五番から十番小隊は船の直衛に着け！十二番中隊は俺の援護！ミカエルは俺が抑えるから、周囲のプルーマどもを一掃しろ！」

『了解！』

眠りから目覚めたミカエルは相当な資源を抱えていたのか、大量のプルーマを生み出していた。というよりは、ミカエルは月の中で眠りながらただプルーマ製造機として稼働していた可能性がある。プルーマ製造機はエイハブ・リアクターを必要とはしないから、気付かなかった可能性がある。動かしていたとしても、周囲にコロニーがない時に動かしていたんだろう。

ミカエルが厄祭戦開始時から月の中で眠っていたと仮定した場合、生み出されたプルーマの総数はモビルアーマーの集団がいる場所にいるプルーマよりも格段に多い。この量のプルーマの相手をしている余裕はさしものシリウスにもなかった。しかし、月のある位置がまぶしかった。地球が背後にある状態ではダインスレイブは打てない。

そもそも決戦兵装とは、モビルアーマーに決定打を与える事を前提に作られた兵器だ。それゆえに威力に関しては、現存するありとあらゆる兵器を凌駕する。一発だけでも地形を変形させるぐらいは余裕なほどの威力を出してしまう。そんな兵器が地球に落ちてしまえば、被害は甚大な物となってしまう。人が巻き込まれてしまえば、それは本末転倒という物だ。

だからこそ、少なくとも月の軌道が地球の背後から離れるまで決戦兵装は使えない。ガンダムにモビルアーマー隊への対処を任せただけで、シリウスは一人でミカエルと対峙しなければならない。ルシフェルもそうだが、上位のモビルアーマーは突出したパイロットがガンダムに全身を売り払う覚悟挑まなければ勝てない。

戦争は数で勝負する物かもしれないが、モビルアーマー戦は質で勝負しなくてはならない。たとえ、万の軍勢がいたとしても上位のモビルアーマーには勝てない場合がある。事実、これまで《セラフ》が発

見されてこなかったのは、発見した兵士たちが皆殺しにされているからだ。それほどに上位のモビルアーマーの戦闘能力は常軌を逸している。

「二番から五番艦は八十度回頭！砲撃にてモビルスーツ隊の動きを援護せよ！残りの艦隊はモビルスーツ隊が抜けた穴を保持せよ！ミヨルニルを用いてブルーマどもを薙ぎ払いなさい！」

「アレを使用なさるのですか!?!」

「はい。この戦場で我々が優位な状態で進めるためには、ブルーマは率先して叩く必要があります。しかし、モビルスーツ隊が抜けた穴はあまりにも大きい。それを保持するためには、ミヨルニルを使い殲滅する必要があります」

「……了解！」

ミヨルニル——それは艦隊専用の決戦兵装であり、この戦争以後総て廃棄された禁忌兵器の一つである。原理としてはダインスレイブと同じ電磁投射砲——即ち、レールガンと同じである。しかし、ダインスレイブに使用されているそれとは、明らかに規模が異なっている。この実験とはある放棄されていたデブリ帯で行われたが、一発をデブリ帯に放つと——デブリ帯に浮かんでいるデブリの内、約半分が消滅した。

この報告を受けたシリウスはこの戦場でのみの使用を決断し、それ以降は完全に廃棄することを決定した。そもそも、決戦兵器は対モビルアーマー専用である。人に向かって使う事など想定していないのだ。それほどまでに強力な兵器故に、決戦の行く末を決定する兵装という名前を付けられたのだから。

「ミヨルニルの準備、完了いたしました！」

「射線上にいるモビルスーツ隊を退避させなさい！この兵器は余波だけでもモビルスーツを破壊出来ます！細心の注意を払いなさい！」

「……モビルスーツ隊の退避、完了しました！」

「……………ミヨルニル、発射！」

この時放たれたミヨルニルは計十発。あまりにも威力が大きすぎたため、シリウスが十隻にのみ設置することを了承したためだ。しか

も、一発こっぴりで発射後は勝手にパージされるほどの念の入れよう。しかし、その後の光景を見た者たちはシリウスの判断が正しい物である事を理解した。

数千、或いは万をいったかもしれないプルーマがたった十発の砲撃で、完全に消滅したのだ。その中にはモビルアーマーも数機ほど紛れており、紛れていたモビルアーマーたちも紙屑同然に消し飛んだ。それは決して人に向かって撃って良い物ではない。

これだけの兵器を使用した艦隊も負担は大きかった。使った反動で艦隊の様々な箇所が故障が起きていた。中には航行させる事すら難しい状態に陥っていた。すぐさま、整備班を向かわせたがそれでも復旧には時間がかかる。そして更なる問題として、一発使っただけでエイハブ・リアクターのエネルギーのほとんどを食い潰した事だ。

モビルスーツでも使えるように小型化した物ですら、様々な問題が存在するのだ。それが巨大化すれば、更に問題は生まれてくるのは当然だ。少なくとも、暫くの間は整備に時間を使わなければならなくなる。ジャンヌがここにおいても、仕事はないに等しい。そう判断したジャンヌは副官にその場を任せ、モビルスーツデッキに向かった。

「整備長！ヘルヴォルの準備は出来ていますか？」

「ジャンヌの嬢ちゃんか！ヘルヴォルの整備は終わってるが、戦場に出るのか？」

「はい。この艦に残っていても、私の仕事はありませんから。兵士たちの指揮をするだけなら、モビルスーツを操縦しながらでも出来ます！」

「……分かった。寝覚めが悪いから死んでくれるなよ！」

「当然です。シリウスと約束しましたから。私は絶対に死にませんよ。あの人や娘と一緒にこれからの人生を歩いて行くんです！」

「よく言った！この戦争が終わったらパーティーが待つてんだからな！主賓が抜けるなんて、俺らは絶対に赦さないからな！」

「……分かりました。ジャンヌ・ダルク、ヘルヴォル・ゼラニウム行きます！」

戦場に聖女が現れ、兵士たちの士気が見るからに向上した。一般兵

士の部隊には火星支部の人間が多いため、革命の乙女として崇められたジャンヌは彼らにとってはアイドルのような存在だったためだ。彼女を守るためなら、彼らは喜んで命を捧げるだろう。

「モビルスーツ隊、隊列を整え私の機体の許に集いなさい！残りのモビルアーマーの対処に当たります！」

『了解！』

ジャンヌは月を一瞥すると、すぐさま戦線に参加した。シリウスにまた後で、と言った以上は今は今会うべきではないと判断したからだ。

月の方ではモビルアーマー最強を誇るミカエルとギャラルホルン最優を誇るジークフリートの一騎打ちが続けられていた。ミカエルのワイヤーソードを捌きつつ、ビットと名付けられた有線式ビーム単射砲を躲していく。ジークフリートの出力をシリウスの耐えられる限界まで上げての戦闘はギリギリの綱渡り状態だった。

ミカエルはシリウスだけでなく、モビルスーツ隊の方に注意を向けられるだけの余裕を残している。それが分かっているからこそ、シリウスはこの戦闘で己の機械に頼らない反応速度と驚異的な事に操縦技術をトライ&エラーを繰り返す事で上昇させていた。事実、ジークフリートの動きは秒単位で上昇していた。

バスタードソードの中に収納されていた太刀を取り出し、ワイヤーソードのワイヤー部分を切り裂いた。これはテイワズに特注した太刀であり、その斬れ味はγナノラミネートソードに匹敵する。つまり、事実上では斬れない物は存在しない事になっている。かつて、テイワズを訪れた際に使い方を聞いておいてよかったとシリウスは思っていた。

そんな成長し続ける怪物に対して、ミカエルは脅威度を更新した。数機のビットをモビルスーツ隊の権勢に使用しつつ、残りの大半をジークフリートに向けた。この敵はこの場で潰さなければならないと、ミカエルが判断したのだ。その選択はシリウスにとって歓迎するべき事であり、同時に歓迎すべからぬ事でもあった。

何故なら、シリウスに注意を向けられるという事はそれだけシリウスの負担が上昇するという事でもあるからだ。モビルスーツ隊とシ

リウス両方に注意を向けられていたからこそ、シリウスは何とか踏みとどまっていたのだ。それがシリウスにだけ注意を向けられるような事になれば、シリウスの負担は急激に増加する。

「ああ、そうだ。俺たちと戦ってるって言うのによそ見なんかしてんじやねえ！俺たちを見ろおおおおおつ！」

片手に太刀を、片手に剣を。英雄とその操縦者は天使長を相手に不退転の覚悟で挑んでいた。絶対に目の前を殺しきってみせると、シリウスは誓ったのだ。自分が斃されれば、その猛威は他の兵士たちに——ジャンヌに向く。それだけは、絶対に赦す訳にはいかないのだ。

愛した女だけはこの身を引き換えにしても守る——それがシリウスの覚悟なのだから。その覚悟に英雄は応える。元より、英雄とは誰かを守るために偉業を成し遂げるモノだ。天使長？最強のモビルアーマー？上等だとも。世界の敵を前にして逃げるモノが英雄などであるものか。

故に、彼らは決して止まらない。目の前にある難業を踏破するつもりでいるのだ。ミカエルという、モビルアーマーが誇る最強を打ち倒そうと考えている。そんな事を考える事ができる者が他にいないとすれば、それはアグニカくらいの物だろう。

絶対に、負ける事など赦さないし認めない。シリウスとアグニカからすれば、勝つなどという事は当たり前の話でしかないのだ。勝つた上でどうするのかを考えるのがシリウスであり、勝つ事を至上の目的とするのがアグニカなのだ。だからこそ、シリウスはアグニカに負けた。勝った後の事を考えない無茶苦茶な人間だったからこそ、シリウスはアグニカ・カイエルという人間を読み違えたのだから。そのアグニカと言うと——

「おらおら、どうしたあ!?こんな物か、テメエの力はよお！《セラフ》だなんて大仰な名前を名乗りやがって恥ずかしくねえのかあ!」

向かってきたモビルアーマーを鱈切りにし、ラファエルを蹂躪していた。ラファエルは取りつけられた武装の尽くを斬り潰され、文字通り手も足も出ない状態に追い込まれた。最終的に翼と腕の両方を切

り取られ、残された頭部をバエルソードに貫かれて機能を停止した。ラファエルを踏みつけながら、バエルが咆哮する。この程度では満足できないと、もつと良質な獲物はいないのかと、もつと喰い応えのある敵はいないのかと、そう叫んでいる。その咆哮に反応したかのように、バエルの前に一体のモビルアーマーが現れた。

神話において、楽園を焼き払った天使であり破壊天使の異名を持つ天使——ウリエルである。我々を侮るのは赦さないと云わんばかりの気配に、アグニカは笑みを浮かべる。ああ、やつと戦いがいるある敵が来てくれたと、心底喜んでいた。

「なあ、お前強いんだらう？この場にいる誰よりも！もしそうじゃないうって言うんなら——疾く俺たちの餌になれよ、クソ天使が！」
そうしてアグニカは更なる一步を踏み込んだ。人が足を踏み入れてはならない極致へ、シリウスが内心で危惧していた領域へ、アグニカはついに足を踏み入れてしまった。即ち、ガンダムとパイロットの合一化。今この瞬間から、バエルはアグニカでありアグニカはバエルとなった。最早溶け合った魂は元には戻らない。

しかし、アグニカはそれを喜んで受け入れた。目の前の敵を殺しきる力が手に入るのなら、それは歓迎するべき事なのだから。そして、そんなアグニカだからこそバエルは共にあることを了承したのだ。力のためならどんな物であっても捨てる事のできる人間だから——
——バエルとアグニカの契約は成立したのだ。

「もつと、もつとだバエル！こいつを殺しきるにはこれだけあってもまだ足りないぞ！俺たちの持てる全力でなければ、こいつは殺せない！最早、俺とお前は一蓮托生なんだろう？だったら——お前の総てを俺に寄越せよ」

アグニカの言葉にバエルが反応する。アグニカの眼がバエルと同じ赤色に染まった。それはアグニカとバエルが本格的に同じ存在となり始めている証拠でもあった。アグニカからすれば、最早レバーなど握る必要すらない。何故なら、アグニカこそがバエルなのだから——

「遅い。遅い遅い遅い！なんだ、テメエその様は！その程度で俺

に勝てると思ってるのか!? 舐めんじゃねえ!」

ウリエルはバエルに蹂躪されそうになるが、ウリエルがリアクターの出力を上げることで五分の勝負に戻された。ウリエルが使ったのは、ガンダム・フレームに搭載されているリミッター解除と同じ物だった。ただでさえ強力なモビルアーマーがリミッター解除した事で、さらに強力になった。それでもアグニカは笑みを浮かべ、歓迎した。

「そうだ。俺の相手を使用って言うんだから、それぐらいは当然してくるだろうな! いいや、してもらわなきゃ戦いが無いってもんだ!」
こうしてアグニカはほとんど人から離れていく。鉄の悪魔にその身を捧げ、ガンダムと一体化を為したただ一人の人間として、アグニカ・カイエルは歴史にその名を刻んだ。悪魔と混じり過ぎればどうなるかを、アグニカ・カイエルは己が身で立証してみせたのだ。

古今東西、悪魔に身を捧げ過ぎれば待っている物は破滅しかないという事を、シリウスは知っていた。アグニカはきつとその一線を軽々と超えるだろう事を。その果てがいかなる物かを。それでも、シリウスはアグニカの願いを叶えた。何故なら、シリウスは隣人としてアグニカを見続けてきたのだから。

「そうだよな。お前はきつとそうすると思っていた。力を求める権化であるお前なら、バエルと融合する事を躊躇わないと。それでも、お前が望む願いを俺が叶えてやる。敗者は勝者に従うものだ。そして、この俺が唯一負けた事を認めたのだから—— お前には常に勝者でいて貰わなくては困るんだよ」

最優ゆえに最強の思考を理解していた。勝利する事が至上の命題であるアグニカを勝利させる事は、勝利した後の事を考えるシリウスにとっては当然の事だ。アグニカは一騎当方に値する最強ならば、シリウスは最強を支え最強の齎した勝利を最大限に利用する最優となる道を選んだ。

アグニカの隣に立ち続けるとはそういう事だ。同格の存在であり続けるといふ事は生中な事ではない。凡人がどれだけ努力を重ねても届かず、秀才が幾万もの努力を積み上げても掠らず、天才が幾千も

の努力をしても触れられない。天災と呼ばれる領域に立つ天才が幾億もの努力をする事で、ようやく隣に立てる存在——それこそが、アグニカ・カイエルなのだ。

「さて、俺もどうかはしていられないな……」

所々の装甲が壊れ、剥き出しの状態になっているジークフリートの前には二体のモビルアーマーが、ミカエルとガブリエルが立ちはだかっていた。ミカエルはワイヤーブレードやビットの尽くを両断されているが、ほぼ無傷の状態。ガブリエルに至っては何の損傷もない状態なのだ。

まさしく、絶望という言葉こそが相応しい状況だった。しかし、英雄の顔は絶望はおろか苦悶の表情すら浮かんではいなかった。それどころか、その頭の中ではどうやってこの二体のモビルアーマーを殺すかしか頭の中にはなかった。何故なら、これは絶望であると同時にチャンスでもあるからだ。

「真の絶望とは、希望を知るからこそ生まれる物……故に真の希望とは真の絶望の果てにある物とはよく言ったものだ！確かに、その通りだ！」

《セラフ》と名付けられた二体の最上級モビルアーマー。それがほぼ無傷に近い状態で向かい合っている。確かに、それは絶望だ。本来であれば、勝てるなどは到底思わない存在だ。しかし、シリウス・ダルクにとってはチャンスでもあった。何故なら、こいつらを斃せば間違いなくこの戦況は揺るぎない物になる。

モビルアーマーを一挙に殲滅させる事が出来るようになる。そうなれば、間違いなく人間側の勝利に違いない。そして、ジークフリートの前に立ちはだかるといふ事は勝利するかしないかの次元ではなくなる。勝利しなければならぬのだ。大切な女を守るために、シリウスは戦っているのだから。

「来いよ、クソ天使ども。英雄に仇名すもの、そして無益な殺人を繰り返す化け物は英雄に敗れるが定めだろうが！」

英雄譚に当てはめるのなら、人に害為す者たちは英雄に敗れる物だ。光り輝く英雄の餌食になるのが、悪の化け物たちの役割だ。その

理屈で言えば、シリウスの言葉も間違っではない。しかし、そんな言葉に唯々諾々と従うようなら、この二機は世界最凶のモビルアーマーなどとは呼ばれていない。

天使長と預言天使は咆哮する。目の前にいる最優を潰し、しかる後に最強を下す。不遜なる人間たちに己が神の威光を示さんがために、最優と謳われた英雄の死が必要なのだ。希望の星たる英雄を殺し、象徴たる悪魔の王を殺し、完膚なきまでに人間たちの心をへし折り、約束された楽園をこの世に齎すのだ。

「さあ、最終戦争だ。どちらが黙示録の鐘を鳴らすのか……いや、黄昏を知らせる角笛を吹かせるのか、勝負といこうじゃないか！」

シリウスの宣誓に対し、ミカエルとガブリエルは真っ向から迎え撃つ。元より、彼らは神の使徒たる名前を受けた者。神の使徒たるならば、いかなる相手であろうとも圧倒的な力を持つて真正面から叩き潰す。何故なら、神とは絶対の存在なのだから。高々英雄如きに負ける物かと、高位の天使は吼えている。

しかし、それは英雄とて同じ事。自らの出自は神を救うために生み出された物。神に手を加えられた事で生まれた命であるジークフリート。戦神によりこの世に生まれ落ちた英雄が、高々神の使徒に負ける筈がない。守るべき物がある英雄はその真価を發揮するのだ。

最強と最優、それぞれの天使と悪魔がぶつかり合う。お互いに自らの力を立証するために、全力を尽くして戦う。この戦いこそが、愛しき人々を守る悪魔と神の愛する楽園をこの世に齎す天使の代表決戦となるのだった。

厄祭戦・13③

悪魔と天使、両方が誇る最強と最優の衝突。悪魔の王と破壊天使が宇宙を縦横無尽に駆け回りながら衝突を繰り返す、竜殺しの英雄と天使長と預言天使が月の大地を破壊しながら武器をぶつけ合う。一般兵たちの介入を許さない戦場が構築され、他のモビルスーツ隊は残りのモビルアーマー討伐に動いていた。

身体から溢れ続ける無限の力を制御し更に引き出す悪魔の王とトライ&エラーを繰り返す事で無限に成長し続ける英雄。それに対抗せんとばかりに攻勢を強めるモビルアーマーたち。人から外れた者たちによる戦いは周囲を破壊しながら、デッドヒートを続けた。最早戦いはどれだけ人の枠を離れられるかにシフトしつつあった。

地面を踏みしめながら次々と襲いかかってくる攻撃を掻い潜り続ける英雄に、言葉を喋るほどの余裕も残されてはいない。全神経をミカエルとガブリエルの攻撃に傾け、どうすればこの二機を殺しきれるのかだけに思考が行っている。人の技術を持って、化け物を狩ろうとしている。それ故に、相手の一部の間も見逃さない。

逆に悪魔から力を引き出し続けるアグニカは、徐々にその魂を汚染されていく。その身に潜んでいた暴力性を露わにしながら、ウリエルとぶつかっていく。バエルの全霊を發揮して目の前の敵を滅ぼすべく力を使っていく。化け物の力を持って、化け物を狩ろうとしている。獣の狩りとも言うべきそれは、圧倒的な力で敵を蹂躪する。

「ハハハハハハハハハハッ！おらおらおら、もつと俺を楽しませろ！お前なんて、どうせその程度の役にしか立たねえだろうが！」
「……………」

まったく真逆の戦闘スタイルだが、勝利を追求するその姿勢だけは変わらない。武人たる英雄と獣である悪魔。対極に位置する彼らはそれ故に対等なのだ、世界に知らしめるようにその猛威を振るう。その蹂躪劇がモビルアーマーたちにとっては恐怖としてしか映らない。突き抜け過ぎた二人は、最早機械天使であるモビルアーマーすら畏れさせる存在へと成り果てた。

太陽のように燃え盛る熱と月のように冷めきった熱がこの戦場には存在していた。バエルは主の選択を全面的に肯定し、ジークフリートは主の選択をこの場に限り肯定した。それはやはり、名付けられた名前によって生まれてしまった差異と言えるだろう。

悪魔としての役割を齎されたバエルと、英雄としての役割を任せられたジークフリートでは成長も異なる。もし、ジークフリートがアガレスとしてシリウスに力を貸していれば、バエルと同じようになっただろう。しかし、彼はジークフリート。力のない人間を守る役割を与えられた英雄なのだ。人から外れていく事を歓迎できる筈がないのだ。

『主……いや、今は気にすまい。主を無事に妻子の許へ帰す事——
—ならば、我は全力を發揮するのみ!』

ジークフリートは己の意志でさらなる力を発現させた。ガンダムとパイロットにおける融合の一線を越しながらも、シリウスとジークフリートの魂が混ざり合う事はなかった。それは、ジークフリートの魂を利用する事で可能にした奇跡。まさしく、主を想っているからこそ起こった奇跡とも言えるだろう。

しかし、同時にそれはジークフリートの魂を犠牲にしているのと同じ義だ。ガンダムが圧倒的とも言える出力が出せるのは、ガンダムに魂が宿っているからだ。機械はあくまでも規格通りの出力しか出せない。そこに魂が宿っているからこそ、規格以上の出力を出せるのだ。ジークフリートの魂がなくなれば、飲まれる心配がなくなる代わりに一瞬でミカエルとガブリエルに殺されてしまう。

そうなる前に、この二機を或いは一機だけでも潰しておく必要がある。それが今のジークフリートであれば可能な筈だ。先ほども死なないための行動しか出来なかったが、今ならば勝つための行動をとる事ができる。この出力と今の段階まで上昇したシリウスの腕を持つてすれば、決して不可能ではない。

そう判断したシリウスはジークフリートを操る。その時のジークフリートはまさしく人馬一体ならぬ人機一体。シリウスの思考をノータイムで読み取り、シリウスの望むように動いた。先ほども押されていたのが嘘ではないかと言いたくなるほど、その動きは洗練さ

れていた。

一時的な物とはいえ、その反応速度は最上位のモビルアーマーであるミカエルとガブリエルを圧倒していた。ホルスターに仕舞われたままだったハンドガンを取り出し、ミカエルの装甲とフレームの間に突っ込んで連射した。装甲に付着した弾丸からは特殊なガスが巻かれ、フレーム材とナノラミネートアーマーを腐食し始めた。

ミカエルがジークフリートを自分の上から落とそうとした瞬間にはその背から離れ、顔面に蹴りを叩きこんだ。その反動を利用してガブリエルの攻撃を回避し、ミカエルに猛攻を仕掛けていく。ガブリエルの攻撃の一切を無視し、ミカエルを仕留めるために全力を費やす。幸い、先ほど使った特殊兵装の効果でミカエルの戦闘能力の多くは奪われていた。

「ここで……仕留める！」

腕部の片方を蹴り碎き、六翼存在する内の半分を斬り碎いた。そして持っていたブレードで身体を貫通すると、ミカエルは地面に斃れこんだ。本来であればそこで止めを刺すところなのだが、ガブリエルの猛攻に止めを刺す事は諦めてガブリエルの対処に移った。その頃にはジークフリートも限界だったのか、最大同調は解除された。

『ぐっ……ぬう、申し訳ありません主』

「いいや、お前はよくやってくれた。お前のおかげで、ミカエルを行動不能に追い込む事ができた。謝る必要なんてどこにもない……あともう一仕事、付き合ってくれよ！」

『了解！』

ジークフリートの眼光が光り、スラスターが火を噴く。残されたブレードと刀を握り、ガブリエルに向かい合う。ミカエルほどではないにしても、ガブリエルも強力なモビルアーマーだ。その戦闘能力は決して侮って良い物ではない。ガブリエルの特徴がそんなところにはないとしても、侮って良い理由にはならないのだ。

《セラフ》と冠されたモビルアーマーは他の天使たちとは役割が異なっている。ラファエルはブルーマに頼らないモビルアーマーの修復技能を持ち、ウリエルはブルーマの生産ユニットを排する代わりに

強大な戦闘能力を手に入れ、ミカエルは休眠時はプルーマを大量生産し起動時にはプルーマの生産ユニットを戦闘に回す事で他のモビルアーマーとは一線を介す戦闘能力を手に入れている。

では、ガブリエルが持っている特殊能力は何か？それは、総てのモビルアーマーとの情報共有能力である。智天使によるプルーマの総力戦を行われた際、その情報をモビルアーマー総てに伝達し渡された情報を智天使に渡していたのが、ガブリエルなのである。それが示すところは——ガブリエルは総てのモビルアーマーと繋がりがながら、その情報を処理しきれただけの要領を持っているという事でもあった。

「チイツ……こいつ、俺の行動パターンを認識していやがるな？」

度重なるシリウスの行動パターンを認識し、演算を繰り返す事で疑似的な未来予知を可能としていた。それによって、ジークフリートの攻撃は紙一重で躲かされていた。シリウスが手詰まりになっていると、ガブリエルが突如弾かれた。その方向を見ると、そこにはヘルヴォルと部下のモビルスーツ隊がいた。

それを見た瞬間、シリウスはレバーを後ろに引いた。それを確認したヘルヴォルが手を降ろし、モビルスーツ隊がガブリエルに向けて射撃を始めた。そして、ガブリエルがその場に釘付けになっている間にヘルヴォルが近付いてきた。ヘルヴォルからライフルを受け取り、ジークフリートも射撃戦に参加した。

「ジャンヌ、他のモビルアーマーどもはどうした？」

「残りはガンダムの方々だけで対処できそうでしたので、モビルスーツ隊を半分ほど残してこちらの救援に来ました。……余計でしたか？」

「いいや、ナイスフォローだ。俺もあいつの相手には手を焼かされていた所だからな。どうもあいつ、俺の行動パターンを把握しているらしい。さつきから攻撃が躲かれ続けている。しかし、この射撃もあいつには決定だとはならないだろう。しかし、まだ決戦兵装を使えるような位置にはない……どうした物か」

「では、さつきはどのようなの？」

その時、ジャンヌから提案された作戦はシリウスを唾然とさせた。しかし、ジャンヌの表情を見て、ジャンヌが本気である事は分かった。頭痛が痛いとはまさしくこういう事か、と思いつながら披露している頭を左右に振った。それでも、ジャンヌの表情は変わっていないかった。「……ジャンヌ、自分の言っている意味が分かっているのか？そんな無茶苦茶な作戦と呼ぶのも怪しい物を実践しようって言うのか？」
「では聞きますが、今現在でこれ以外の手段がありますか？」
「それは……」

「ないでしょう？あのモビルアーマーがこのまま暴れ続ければどうなるか、分かった物ではありません。出来る事ならば、短期決戦こそが望ましい。違いますか？」

「それはお前の言う通りだ。だがな、その為にお前が……」

「大丈夫ですよ。私にはあなたがくれたこのヘルヴォルがあります。『軍勢を守るもの』——その軍勢の中には、あなたもいるんです。どうか、その事を忘れないで下さい。あなたが私を守りたいように、私もあなたを守りたいんです」

「……分かった。ただし、俺の指示には従ってもらおうぞ」

「もちろん。私よりもずっと長い時間戦い続けてきたあなたの言葉を無碍にするつもりはありません。ここで勝って、家に帰りましょう。シエルの待つ、あの家へ」

「ああ……そうだな。それにシエルとは一緒に遊ぶ約束までしてるんだ。帰らない訳にはいかない。絶対に帰るんだ、俺たち家族が暮らすべきあの家へ。だから……少しの間、力を貸してくれるか？ジャンヌ」

「ええ、もちろん。あなたにそう言って貰う時を、私はずっと待っていたんですから」

ジャンヌのその答えにシリウスは笑みを浮かべる。俺は本当に良い奥さんを持ったものだ、そう思ったのだ。ジークフリートもシリウスら夫婦のため、今一度己の全力を尽くす事を此処に決意した。ジークフリートが動き出すと同時に、ジャンヌは追従するように動き始めた。

ジャンヌが提案した作戦は簡単だ。ジークフリート単体では動きが読まれると言うのなら、ヘルヴォルも共に行動するという物。つまり、ジークフリートとヘルヴォルのタッグで動くという事だ。だが、これは一歩間違えればヘルヴォルは撃墜されてしまうだろう。なにせ、完璧にシリウスの思考を読み切れなければ、ガブリエルの攻撃を受けるという事なのだから。

多大なる危険性があったとしても、ジャンヌは挑戦する道を選択した。理由としては幾つかある。まず、シリウスの作ったヘルヴォルがガブリエルの攻撃に反応できない訳がないという判断。ヘルヴォルはシリウスが作っただけあり、中々操作性が難しい。しかし、慣れてしまえばモビルアーマーの攻撃にも易々と反応できる。しかし、それ以上に——ジャンヌがシリウスを読み違える事などあり得ないという自覚があるからだ。

「邪魔だあああああッ！」
「ふっ！」

ジークフリートが距離を詰め、ヘルヴォルがサポートする形で戦闘は移行した。ガブリエルの基本的な攻撃は他のモビルアーマーとは異なり、総てがビーム兵器によって構築されている。質を数で補う事で、最上位のモビルアーマーとしての力を持っている。

一発一発の威力は小さくとも、ビームが発する熱量に何度も晒されればさしものナノラミネートアーマーでも耐え切れない。普通のパイロットでは乱打という言葉が相応しいビームの嵐とガブリエルの思考速度に対抗しきれない。ガブリエルが最も得意とする戦闘は長期戦であり、膨大な情報があればあるほどにガブリエルは有利になる。

だからこそ、一見無謀とも言えたジャンヌの作戦はここで成功を見た。何故なら、ジャンヌは今までモビルスーツに乗って戦場に出た事がない。ガブリエルの莫大な情報データにジャンヌ・ダルクというパイロットのデータは一つもない。ジャンヌほど精巧にシリウスをサポートできるパイロットはいない事を、ここに立証してみせた。

ガブリエルは困惑していた。自分には膨大と言って差支えない程

の戦闘データがある。同胞が培ってくれた人間側の強敵の行動パターンを記している戦闘データを持っているのだ。だからこそ、ミカエルを打倒したジークフリートを圧倒していたのだ。だが、あの機体は何だ？あの機体が現れて以降、演算結果とは違った行動を繰り返してくる。

いや、その言葉は正確ではない。ジークフリートは演算通りの動きをしている。自分の計算は少しも外れていない。であるならば、ジークフリートは先ほどと同じように自分に圧倒されるのが当然だろう。だが、そうはなっていない。あの機体が尽く自分の邪魔をしてくるからだ。であるならば、あの機体は邪魔だ。

「——どこを向いてやがる」

シリウスのその言葉と共に、ガブリエルは身を翻そうとした。しかし、ジークフリートの行動の方が一拍早く、二十門以上あるビーム砲の内五門ほど斬り裂かれた。破壊されたビーム砲をすぐさま撃ち抜き、爆発する事で目晦ましとして距離を開けてヘルヴォルに残りのビーム砲を全門向けて撃ち抜こうとした。そう、撃ち抜こうとしたのだ。

「そんな余裕を俺たちがお前に与えてやる訳ねえだろ」

しかし、ジークフリートはビームで撃ち抜いた瞬間にはスラストターを使って距離を詰めていた。そして持っていたブレードで装甲の隙間を貫き、空いた穴を刀で斬り裂いた。これによって、ガブリエルは大きく体勢を崩す事になり、その隙を見逃すほどシリウスとジークフリートは甘くはない。

「死ね、ガブリエルウウウウツ!!」

ガブリエルは焰を吐きながら残された翼からビームを吐き出した。そのビームに機体を押されながらも、リアクターを貫くように残されていた刀を突き刺した。さしものガブリエルも限界だったのか、地面に斃れ伏した。いつもであれば抜かりなく頭部を貫くまでしただろうが、《セラフ》級のモビルアーマー二体との戦闘は疲れたのかそこまで頭が回らなかった。

「シリウス」

「……ああ、ジャンヌ。一度艦に戻ろう。全体の戦況の把握をしなければならぬ。アグは……多少苦戦しているみたいだが、あの分なら間違いなくウリエルは狩れるだろう」

アグニカの方に視線を向け、戦局を確認した。元々、あの状態のアグニカならば負ける事はないと思っていたが、確認として見ただけだ。そして、再びジャンヌに視線を向けたその瞬間、シリウスは背中からジャンヌは真正面から衝撃を受け、地面に倒れた。

「な、何が……馬鹿なっ!?!」

シリウスが視線を向けた先には五体満足の状態のミカエルが立っていた。先ほどまで戦闘不能の状態であったはずのミカエルがこんな短時間で戦線復帰、しかも五体満足の状態でいられる筈がない。一体何故、と思つた瞬間、ミカエルの装甲の隙間が見えた。そこでは何かが蠢きミカエルのフレームを修復しているのが見えた。

それを見た瞬間、月を見回した。そして幾らか離れた場所に破壊されたラファエルを見つけた。それを発見した瞬間に理解した。このミカエルを修復したのはラファエルなのだ。ラファエルが自らの命を犠牲にする代わりに、ミカエルを復活させたのだ。

ラファエルは単体によるモビルアーマーの修復が可能と言つたが、その秘密はラファエルに搭載されているとある物が要因となつている。ラファエルはプルーマの生産ユニットを積んでいない代わりに、ナノマシンを搭載している。そのナノマシンは周囲に存在するプルーマを始めとした素材を分解し、モビルアーマーを修理する際に分解した素材を使用する。

ナノマシンは壊れたパーツ同士を繋ぐ糊のような役割もこなしており、それによつて斬り裂かれたミカエルの翼を繋いだのだ。破壊された腕部に関してはラファエルが自らのパーツを使用したのだろう。同じ《セラフ》級のモビルアーマーだ。互換性がない訳がない。

ラファエルの執念とでも言うべきか、先程まで優勢だったはずのシリウスたちは追い込まれていた。シリウスとジャンヌを何とか助けようとモビルスーツ隊も動くが、ミカエルの圧倒的な火力に次々と撃破されていった。力を限界まで解放したジークフリートだからこそ、

ミカエルを一時的に戦闘不能にできたのだ。普通はミカエルというモビルアーマーを斃す術はない。

しかし、斃す術がないからと諦める訳にはいかない。何か手がない物かと周囲に視線を向けた瞬間、青く輝く惑星——地球の姿を見た。その惑星を見た瞬間、シリウスは苦渋の選択を行う事を選択した。シリウスは自軍に通信を繋いだ。繋いだ通信先は——ダインスレイブ隊だ。

「ダインスレイブ隊！月は地球の軌道上から離れた！俺たち——シリウス・ダルクとジャンヌ・ダルクごと、モビルアーマー・ミカエルを破壊せよ！」

「なっ、何を仰るのですか！宰相とジャンヌ様ごと撃つ事などできません！」

「戯け！この機を逃すな！このままであっても、俺たちは死ぬ以外に選択肢がない！それならば……我らの命を地球の、世界の平和のための礎とせよ！」

「しかし！」

「……シリウス様、本当によろしいのですか？」

「構わない。どちらにしても死ぬしかないなら、せめてこいつを道連れにしてやりたいんだ。頼む」

「……ダインスレイブ隊、発射体勢を取れ。目標、月裏側に存在するモビルアーマー・ミカエル！」

「カルフ様！」

「全責任は私が取る！発射体勢を取れ！我々は、あのような化け物を地球に行かせる訳にはいかないのだ！我々はギャラルホルン！世界の治安を守るための組織だ！それが私情を優先させる訳にはいかない！たとえ、偉大な御方を失ってしまうとしても……我々には通さなければならぬ筋がある！」

「くっ……了解！」

シリウスは心の中で自分の命令に従ってくれた副官に礼を言うと、アグニカの端末に短文のメールを送りつつジャンヌに通信を繋いだ。シリウスを見つめるジャンヌの顔には微笑が浮かんでいた。もう後

幾らもしない内に死んでしまうかもしれないのに、ジャンヌの表情は酷く穏やかで……シリウスは勝てないなと思ってしまった。

「悪いな、ジャンヌ。俺と死出の旅路を共にさせる事になっちまって」「大丈夫ですよ。前にも言ったでしょう？あなたの命が明日までなら、私の命も明日までで良いと。シエルの事は心残りですが……」

「大丈夫……ではないかもしれないが。セブンスターズの連中とアグにサファイアさんが支えてくれるさ。あの子なら、しっかりとやっていけると俺は信じているよ」

「ええ、私もです」

「……ああ、そう言えば昔アグに妙な話を聞いたんだよな。知ってるか？この世界には生まれ変わりなんていう概念があるそうだ。非科学的極まりないが、こんな状態にもなると信じてても良いんじゃないかと思えてくるんだから、現金な物だよな」

「ふふっ、そうかもしれないですね……では、ここに約束しましょう。たとえ、ここでこの命果てようとも、いつか必ず再びあなたと巡り会ってみせると」

「……ハハハハハッ、やはり君は最高の女だな。そうだな、どれだけの時間がかかろうとも必ず君と巡り会ってみせる。これは俺の宣誓だ。だから、その時まで——」

「ええ、その時まで——」

「————一時の別れとしよう／しましよう」

シリウスとジャンヌがそう言葉を交わした瞬間、ダインスレイブが放たれジークフリートとヘルヴォルごとミカエルを貫いた。ダインスレイブはミカエルのエイハブ・リアクターを貫いており、空気中に火花が散り同時に大爆発が起こった。その瞬間、誰もが戦う事を止めてその方向に視線を向けた。それはこの男も例外ではなく——

「シス……っ？」

ウリエルを完全に破壊しきり、ダインスレイブの一撃とミカエルの爆発によって破壊された月の方を見ながらアグニカはぽつりと呟いた。そして、ちょうどシリウスから届いたメールを開いた。そこにはただ一言、こう記されていた。

—— シエルと世界の平和を頼んだぞ、俺が最も信頼する親友と。

厄祭が終わった後

厄祭戦終結。それは混沌の時代を生きていた人々にとって、思わず滂沱の涙を流してしまうほどの事態だった。世界の——人間の敵だったモビルアーマーは滅ぼされた。これで明日の命を心配しなくとはならない夜を迎える事もなくなったのだ。歓迎して然るべきことだ。

しかし、当たり前の話だが、犠牲がまったくなかった訳ではない。戦力の凡そ二割ほどを失い、ガンダムに關しても十機以上を失った上に、英雄と聖女を世界は失った。人々を守るために戦った戦士たちはその命を、世界の礎に捧げたのだ。

英雄と聖女に至っては、まだ歳幼い一人娘を残して逝く羽目になった。二人の影響力を知る者たちは彼らの死を悼んだ。四経済圏がこの日を英雄と聖女を悼む日とする程に、彼らはギャラルホルンになくてはならない存在だった。それ故に、誰もが彼らの葬儀の日には涙を流した。

葬儀の場ではシエル・ダルクの後見人の立場に納まったアグニカが挨拶をする事になった。しかし、アグニカは暫く二人の棺を見た後、涙を流している参列者を見た。その時、アグニカが何を思ったのかは分からない。けれど、少なくともアグニカは涙を流している者たちを許せないと思つた事は間違いないだろう。

「泣くな！」

アグニカのその言葉に、誰もが顔を上げた。心底怒っているアグニカの表情を、この時初めて人は目にする事になった。これまでもアグニカが怒っている事は何度もあった。しかし、この時ほどアグニカの激情が激しかった事はない。そう言えるほどに、アグニカの表情は凄まじかった。

「あいつらは勇敢に戦つた！そんなあいつらの前で涙を流す事が、どれだけの恥になるか分かつているのか!?あいつらは俺たちにこれからの未来を託したんだ！託された俺たちが、そんな様であいつが安心できるか!?火星のために奮起したあの嬢ちゃんが、任せて逝けると思

うのか!? あいつらの事を思うなら、ちゃんと胸を張れ! あいつらの遺志を継いで行くというのなら! 情けない姿なんて見せるんじゃないやねえ!

アグニカのその言葉に、最初に涙を止めたのは彼らの残した忘れ形見であるシエルだった。本当は一番泣きたいだろうに。他の人を気にする事なく涙を流したいだろうに。それでも、逝ってしまった両親を安心させるために、シエルは涙を流す事を止めた。

その勇姿に、人々は涙を止めた。年端も行かない幼子が勇気を示したというのに、大の大人である自分たちが情けない姿を見せる訳にはいかない。あの少女の勇気に恥じない大人でなければならぬのだ。それが残された我々が示さなければならぬ最低限の矜持だと言わんばかりに。

「シエル。俺は決して、俺が間に合っていればとかそういう仮定は言わない。それが何故か分かるか?」

「……………」

「そんな仮定が無駄だからではない。そんな仮定を想像する事こそが、あいつらに対する侮辱だからだ! お前の両親は——シリウス・ダルクとジャンヌ・ダルクは勇敢に戦った。あいつらの存在こそが今日の平和の象徴なんだ。だからお前は、そんな両親の想いに恥じぬように生きろ。これから起こるであろう様々な苦難を受け止め、それを乗り越えろ。……俺が唯一、総てを任せることのできた親友のように。火星の人々が希望の象徴とした、お前の母親のように」

「……………はい!」

「……良い返事だ。お前らも、舐め腐った真似すんじゃないやねえぞ! あの二人だけじゃなく、死んでいった者たちも含めた俺たち全員で築いた平和を、穢す事のような事をする奴は俺が絶対に赦さねえ! その事を、心の奥底まで刻み込め!」

『はい!』

「総員、敬礼! あいつらがまたいつか必ず巡り会えるように、死後の世界でも共に幸せに暮らせるように祈れ! そして努々忘れるな! これから齎される時代は、多くの者たちの死の上に成り立っているという

事を！」

ギャラルホルンの兵士たちは全員が敬礼し、他の関係者たちは二人の冥福を祈った。その後、英雄と聖女を失った事でギャラルホルンの内情が混乱する事は——なかつた。何故なら、シリウスが事前に戦争終了後のギャラルホルン法規を決めていたからだ。それに加えてマニユアルなどの整備も終えられており、ギャラルホルンは迅速に動けるようになっていた。

セブンスターズがギャラルホルンの方針を合議制で決め、ダルク家は七星番外家としてセブンスターズが間違いを犯した場合にセブンスターズを裁く権限を与えられた。そして、カイエル家はギャラルホルン内で最も優秀なパイロットにのみ、一代だけの当主とさせる家となった。これに関しては一悶着あつたが、最終的にアグニカが認めた事で問題はなくなつた。

アグニカが認めた理由はシリウスの残した言葉にあつた。『カイエル家はギャラルホルンの象徴でなくてはならず、ギャラルホルンの象徴とは最強でなくてはならない』。シリウスがジャンヌを除いて唯一敗北を認めたアグニカはこの言葉を理解した。ダルクの上に立つ者は最強であれ、とシリウスは言いたかつたのだ。

この世に必要な物は力なのだと、シリウスとアグニカは思っている。どれだけ気高い理想もどれだけ正しい理屈も、強大な力の前には退くほかない。勝者が強者であるとは限らないが、強者でなければ基本的に勝者たり得ない。勝ちたいならば、まずは強くなければならぬのだ。

ギャラルホルンが世界で唯一の治安維持組織を名乗るのならば、ギャラルホルンは世界で最も強くなくてはいけない。そして世界で最も強い組織の象徴は、その組織における最強でなくてはいけない。そうでなければ、ギャラルホルンの象徴と名乗ることは出来ない。ならば、アグニカの後継も最強でなくてはならない。

ただ、他の者たちへの配慮なのか、カイエル家の当主にはセブンスターズ及びダルク家の者が就任することは出来ないと言われている。カイエル家の人間は政治に関わってはならないからだ。象徴はあく

までも象徴でなければならぬ、というシリウスの考え故だ。

その後、アグニカは半ば引退していた。ダルク家の後任として、サファイアと共にシエルを育てていた。アグニカがそうせざるを得なかったのは、バエルとアグニカの間に結ばれた約束が理由だった。そもそも、アグニカとバエルは一心同体であり、最終決戦終了後にはその魂はバエルに捧げられていなければならなかった。

しかし、アグニカはまだ魂をバエルに捧げることは出来なかった。何故なら、シリウスにシエルの事を頼まれたからだ。シリウスの遺言を無視して魂をバエルに譲り渡す事はアグニカには出来なかった。バエルも自らの製作者の願いを無碍にする事は本心ではなかった。だからこそ、バエルとアグニカは約束をした。

アグニカはシリウスの遺言通り、シエルが自分の助けが必要なくなるまで育てた後にバエルに魂を譲り渡す事を。バエルはその間、アグニカに猶予を与える事を。お互いに相手が必ず約束を守る事を理解しているからこそ、その約束を結ぶことに躊躇いはなかった。

この事はセブンスターズ以上の家の者たちは皆知っていた。サファイアも同様であり、生まれた望外の時間に感謝しこそすれ文句を言う事はなかった。唯一、シエルだけが迷っていた。父親の遺言を守り、早く立派な大人になりたい。けれど、自分が大人になればアグニカの時間はそれだけ少なくなってしまう、と。

しかし、アグニカからすればそんな考えは無駄な心配だった。大人が子供のために頑張る事は当然であり、その成長を喜ぶことは寧ろ当然である。アグニカやサファイアからすれば、シエルは自分たちにとっても娘同然だ。その健やかな成長は二人にとっても望むべき物だった。シエルが成長する事は、アグニカにとっても喜ぶなのだ。

シエルがダルク家を継ぎ、アグニカとサファイアがその成長を支え始めてから十数年。アグニカは十分シエルが成長したと思った。その事をサファイア自身も自負していた。事実として、シエルはダルク家を背負うにたる器として成長していた。それは同時に、アグニカのタイムリミットが訪れているのと同様だった。

アグニカは一日だけサファイアと共に過ごした。使用人たちにも

暇を出し、その日だけは二人だけになるようにした。セブンスターズもシエルもそんな二人に協力した。そこで何を話したのかは分からない。けれど、翌日バエルの前に集まった時二人の表情はとても晴れやかな物だった。

セブンスターズなどアグニカと古くから関わっていた者たちがそこにはおり、皆がアグニカとの別れを寂しがっていた。アグニカがこの世を去れば、ギヤラルホルンの中核とも呼べる存在は誰もいなくなる。ギヤラルホルンの始まりはアグニカとシリウスが川辺で語り合った瞬間なのだから。

「ええい、泣くな！言っておくが、俺はこの世を完全に去る訳じゃねえ。俺の魂は何時だってバエルの中にあるんだ。たとえ乗るパイロットがいなかりうと、俺たちはお前らの事をずっと見ているぞ！あんまり舐めた事してると、暴れてやるからな！」

「それはちよつと勘弁してもらいたいですな」

「そう思うなら、下手な統治なんてするんじゃないぞ。俺たちの本分を忘れるな。俺たちの存在は戦いの中にしかない。小賢しく頭を働かせることは無意味だと理解しろ。それこそが、俺たちという存在を証明する物なんだ」

ギヤラルホルンなどという大層な名前を名乗っても、その実態は大差ない。自分たちは戦う事では自分という存在を証明する事ができない。モビルアーマーギヤラルホルンが消えたとしても、争いが消える訳ではない。だからこそ、自分たちは武力を捨てる訳にはいかないのだ。

「俺たちは世界の平和を守るためにある。私利私欲を貪るためじゃねえ。争いという物の抑止力となるために俺たちはあると知れ！それが俺とシエルの願いだ。あいつは最後のメールで俺にシエルと世界の平和を頼むと言った。幸い、シエルは十分成長した。あいつの遺言の半分は達成できたわけだ。だが、世界の平和は俺だけじゃどうにもならねえ」

アグニカはそう言いながら、何を見るでもなく視線を上に向けた。これまで様々な事を経験してきたアグニカの隣には何時だってシリウスがいた。しかし、その頼れる相棒はもうこの世にはいない。その

事にため息を吐きながらも、視線を前に向けた。

「だから、お前らが守れ。もう、俺が世界の平和を守るために貢献することは出来ない。だからこそ、俺には出来ない事をお前らがやるんだ。それはこれから未来を作っていくお前らにしか出来ない事だ。任せたぞ」

「我らが身命にかけて、必ずやあなたの言葉を守ってみせます」

「お前らが守らなきゃならんのに命を賭けてどうする……と言いたいところだが、そのぐらいの覚悟で挑んでくれれば良いさ。協力しい、世界を守れ」

そう言うと、アグニカはバエルのコックピットに乗り込んだ。そして阿頼耶識で繋がったバエルは懐かしいという感覚を味わいながら、アグニカはバエルにその魂を捧げた。バエルはアグニカの魂を取り込み、二人は完全なる融合を果たす事になった。これ以降、阿頼耶識が禁忌とされた事もあり、バエルを操る事ができる者はギャラルホルンの頂点に立てるといふ伝説ができた。

本来あり得べからざる存在は、確かにその存在を世界に刻み込んだ。それが良い事であったのか、それとも悪い事であったのかを論じる事は誰にも出来ないだろう。それでも、彼の努力は確実に世界を変えてみせたのだ。たとえ、その結果が変わらずともその間にあった事は確かに変わったのだ。

英雄と聖女は散り、悪魔の王はその命を悪魔に捧げた。正史と同じように、七星が世界を導いていくという事には変わりはない。それでも、その未来が幸多き物とならんことを願い、幕を下ろすとしよう。